鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(20)

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

XI

小山遺跡
谷ノ口遺跡
宮後遺跡
上城城址

1982.3
鹿児島県教育委員会

序　　文

九州縦貫自動車道（えびの～鹿児島）建設に伴う鹿児島郡吉田町小山・谷ノ口・宮後・上城城址遺跡の発掘調査は，昭和46年11月６日から昭和47年２月10日までの間実施し貴重な発見をしました。

その後，昭和56年度に整理を行い，ここに「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅺ」として発刊することになりました。

県教育委員会では，この報告書が文化財保護のため広く活用されることを願っています。

発刊に当たり，日本道路公団はじめ吉田町教育委員会及び調査に協力していただいた地元の方々に対し，心から感謝の意を表します。

昭和57年３月

鹿児島県教育委員会

教育長　井之口　恒　雄

小山遺跡

例　　言

1　この報告書は，九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設に伴う小山遺跡の調査報告書である。

2　発掘調査は，日本道路公団からの受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3　本書の執筆は，つぎのとおりである。

第Ⅰ章～第Ⅵ章	戸崎勝洋
第Ⅵ章第　節	立神次郎
第Ⅶ章	河口貞徳

なお青磁・白磁・染付・須恵器については小田富士雄氏（北九州歴史博物館主幹）の指導助言を得た。

4　出土遺物については各時代を通して一連番号としたので，挿図番号，図版番号は一致する。

目　　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　序　説……5
　第1節　調査に至る経過……5
　第2節　調査の組織……5
　第3節　調査の経過……5
第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境……8
第Ⅲ章　調査の概要……10
第Ⅳ章　層　位……13
第Ⅴ章　遺　構……16
　第1節　縄文時代……16
　　1　縄文式土器・集石の分布……16
　　2　集　石……18
　第2節　歴史時代……25
　　1　集　礫……25
　　2　ピット群……25
　　3．礫　列……25
　第3節　小結……25
第Ⅵ章　遺　物……29
　第1節　土　器……29
　　1　縄文式土器……29
　　2　弥生式・土師器・紡錘車・土錘…75
　　3　青　磁……76
　　4　白　磁……77
　　5　染　付……77
　　6　須恵器……77
　　7　石鍋・その他の陶磁器……83
　　8　台　座……83
　　9　こうがい……83
　　10　古　銭……83
　第2節　石　器……87
　第3節　小　結……109
第Ⅶ章　総　括……110

挿図目次

第1図　小山遺跡周辺地形図……9
第2図　小山遺跡地形図……11
第3図　グリッド配置図……12
第4図　土層，遺物主要出土層模式図……14
第5図　土層断面図……14
第6図　土層断面図……15
第7図　縄文土器・集石出土分布図……17
第8図　1号集石……18
第9図　2・3号集石……18
第10図　4号集石……19
第11図　5号集石……19
第12図　6号集石……20
第13図　7号集石……20
第14図　8号集石……20
第15図　9号集石……20
第16図　10号集石……21
第17図　11号集石……21
第18図　12号集石……21
第19図　13号集石……22
第20図　14号集石……22
第21図　15号集石……22
第22図　16号集石……22
第23図　17号集石……23
第24図　18号集石……23
第25図　19号集石……23
第26図　20号集石……24
第27図　21号集石……24
第28図　22号集石……24

第29図　集石分布図……24
第30図　集礫実測図……26
第31図　ピット群実測図……27
第32図　礫列実測図……28
第33図　石坂式・石坂系土器実測図……29
第34図　吉田式土器実測図……35
第35図　吉田式土器実測図……36
第36図　吉田式土器実測図……37
第37図　吉田式土器実測図……38
第38図　吉田式土器実測図……39
第39図　吉田式土器実測図……40
第40図　吉田式土器実測図……41
第41図　吉田式土器実測図……42
第42図　吉田式土器実測図……43
第43図　吉田式土器実測図……44
第44図　吉田式土器（底部）実測図……45
第45図　吉田式土器（底部・角筒）実測図……46
第46図　前平式土器実測図……47
第47図　円筒形土器・押型文土器平栫式土器実測図…49
第48図　塞ノ神Aa 式土器実測図……52
第49図　塞ノ神Aa 式土器実測図……53
第50図　塞ノ神Aa 式土器実測図……54
第51図　塞ノ神Aa 式土器実測図……55
第52図　塞ノ神Aa 式土器実測図……56
第53図　塞ノ神Aa （底部）実測図……57
第54図　塞ノ神Ab 式土器実測図……60
第55図　塞ノ神Ab 式土器実測図……61
第56図　塞ノ神Ab 式土器実測図……62
第57図　塞ノ神Ab 式土器実測図……63
第58図　塞ノ神Ab 式（底部）実測図……64
第59図　塞ノ神（無文）式土器実測図……66
第60図　新型式土器実測図……68
第61図　新型式土器実測図……69
第62図　轟深浦・向形文・点線文・春日式土器実測図…72
第63図　岩崎式土器・指宿式土器実測図……73
第64図　縄文式土器（晩・後期）実測図……74
第65図　弥生式土器・土師器実測図……78
第66図　土師器・紡錘車・土錘実測図……79
第67図　青磁実測図……80
第68図　青磁・白磁・染付・実測図……81
第69図　須恵器拓影……82
第70図　須恵器・滑石製石鍋・すり鉢実測図　…84
第71図　台座・こうがい・実測図……85
第72図　古銭拓影……86
第73図　石器実測図（石鏃）……89
第74図　石器実測図（石鏃・特殊・石器・石匙）…91
第75図　石器実測図（石匙・スクレイパー）……93
第76図　石器実測図（石匙・スクレイパー）……95
第77図　石器実測図（スクレイパー）……99
第78図　石器実測図（剝片石器・削器）……100
第79図　石器実測図（剝片及び剝片石器）……102
第80図　石器実測図（剝片・石槍）……104
第81図　石器実測図（石核・砥石）……105
第82図　石器実測図（磨石）……107
第83図　石器実測図（磨石・石皿）……108

表　目　次

表1　小山遺跡及び周辺遺跡一覧表……8
表2　吉田式土器出土区・層一覧表……32
表3　吉田式土器出土区・層一覧表……33
表4　吉田式土器出土区・層一覧表……34
表5　前平式土器出土区・層一覧表……47
表6　円筒形式土器出土区・層一覧表……48
表7　塞ノ神Aa式土器出土区・層一覧表……50
表8　塞ノ神Aa 式土器出土区・層一覧表…51
表9　塞ノ神Ab 式土器出土区・層一覧表…59
表10　塞ノ神系土器出土区・層一覧表……67

表11　その他縄文式土器出土区・層一覧表…71
表12　その他縄文式土器出土区・層一覧表…75
表13　土師器出土区・計測一覧表……76
表14　石器出土一覧表……87
表15　石器出土一覧表……90
表16　石器出土一覧表……90
表17　石器出土一覧表……92
表18　石器出土一覧表……92
表19　石器出土一覧表……94
表20　石器出土一覧表……96
表21　石器出土一覧表……96
表22　石器出土一覧表……97
表23　石器出土一覧表……97
表24　石器出土一覧表……98
表25　石器出土一覧表……101
表26　石器出土一覧表……101
表27　石器出土一覧表……103
表28　石器出土一覧表……103
表29　石器出土一覧表……103
表30　石器出土一覧表……106
表31　石器出土一覧表……109
表32　石器出土一覧表……109

図版目次

図版1　遺跡遠景・発掘風景……114
図版2　集石出土状況……115
図版3　遺物出土状況……116
図版4　遺物出土状況・礫列出土状況……117
図版5　石坂式土器・石坂系土器……118
図版6　吉田式土器……119
図版7　吉田式土器……120
図版8　吉田式土器……121
図版9　吉田式土器……122
図版10　吉田式土器……123
図版11　吉田式土器……124
図版12　吉田式土器……125
図版13　吉田式土器……126
図版14　前平式・押型文・円筒形・平栫式土器…127
図版15　塞ノ神Aa式土器……128
図版16　塞ノ神Aa……129
図版17　塞ノ神Aa……130
図版18　塞ノ神Ab式土器……131
図版19　塞ノ神Ab式土器……132
図版20　塞ノ神Ab式土器……133
図版21　塞ノ神Ab式土器……134
図版22　塞ノ神Bd式土器・新型式土器……135
図版23　新型式土器……136
図版24　轟式・深浦式・点線文・瓜形文・春日式土器 … 137
図版25　岩崎式・指宿式土器・後期・晩期・底部……138
図版26　土師器・紡錘車・土錘……139
図版27　青　磁……140
図版28　青磁・白磁・染付……141
図版29　須恵器・滑石製石鍋・すり鉢……142
図版30　須恵器・かんざし・鋼銭・台石……143
図版31　石器(特殊石器・石匙)……144
図版32　石器(石匙・スクレイパー石槍)……145
図版33　石器(スクレイパー制片石器石槍倒器)…146
図版34　石器(剝片・石核)……147
図版35　石器(磨石)……148
図版36　石器(石皿)……149

第1章　序　説

第1節　調査に至る経過

九州縦貫自動車道は，昭和43年3月6日第18回国土開発幹線自動車道建設審議会において，九州関係各路線とともに鹿児島県内では，加治木～鹿児島間の整備計画が決定された。ついで昭和43年4月1日建設大臣から加治木～鹿児島間25kmについて，日本道路公団に対して，工事施行命令が出された。

日本道路公団は「日本道路公団の建設事業等，工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき，埋蔵文化財の取扱について，鹿児島県教育委員会に協議を求めた。

これに対し県教育委員会では昭和43年12月17日～昭和44年1月20日の間，県内の考古学者を調査員に依頼して分布調査を実施し，26か所の周知の遺跡の確認調査を行った。九州縦貫自動車道鹿児島線の路線はこの報告をもとに決定されたが，路線内の未確認の遺跡については，昭和46年1月に分布調査を実施した。その結果，小山遺跡等7か所の遺跡が発見された。

県教育委員会はこの結果をもとに，日本道路公団とそれらの遺跡の取扱いについて，協議する一方，発掘調査について鹿児島県考古学会（会長河口貞徳氏），鹿児島県史蹟調査会（会長河口貞徳）等に協力を依頼した。

こうして一応の発掘調査体制が整ったため，昭和46年8月10日より小瀬戸遺跡（姶良郡姶良町所在）から発掘し，小瀬戸遺跡の調査終了をまって，小山遺跡の発掘を昭和46年11月6日から実施することとなった。

小瀬戸遺跡に準じて小山遺跡も路線内の遺跡は全面発掘するという主旨のもとに，小瀬戸遺跡の調査員が引続き調査を担当することになった。

第2節　調査の組織

調査責任者	社会教育課長	寺師次夫
調査主任	県文化財専門員	河口貞徳
総　務	社会教育課文化係長	盛園尚孝
調査員	内之浦町立内之浦中学校教諭	戸崎勝洋
		立神次郎
		尾ノ上道雄
		有元彰順
調査補助員	中間研志（鹿児島大学生）	
調査協力者	中間研志，楠原郁子，本田道輝（鹿児島大学生）	

第3節　調査の経過

発掘調査は昭和46年11月6日から昭和47年2月10日まで実施した。

調査面積は，調査が進むにつれて遺跡の北方約 130㎡（路線内）に拡大することが判明した。そのため日本道路公団，県教育委員会，調査主任の三者が協議し，路線内遺跡は全面発掘することで合意が成立した。

発掘調査そのものは表土より順次掘り下げていった。そして歴史時代の青磁，白磁，土師器等の遺物が出土し，その下層には，縄文時代前期該当の塞ノ神式土器。縄文時代早期の吉田式土器等が出土した。調査中は５～10cmにもなる霜柱や寒さに悩まされたが，作業員の協力のもとに発掘調査は進行し昭和47年２月10日終了した。

調査の経過は以下略述するとおりである。

- 昭和46年11月６日(土)～11月14日(日)

調査団，作業員現地集合。発掘方法，手順，　編成ののち草刈り，公団の中心杭を基準にトレンチ設定。グリッドは10m ×10m とし，その中に２m ×２m の小グリッドに細分。

表層より掘り下げ。土師器，青磁片等出土。A－Ⅰ区ではすでに塞ノ神式土器(縄文前期)も出土する。表層は褐色砂質層。ブルドーザーにより表層はぎ。壁断面層位実測。

A－Ⅰ，Ⅱ区，B－Ⅰ，Ⅱ区，C－Ⅰ，Ⅱ区掘り下げ。B－Ⅰ区遺物平面実測。D－Ⅰ，Ⅱ区掘り下げ。

- 昭和46年11月15日(月)～11月21日(日)

台風襲来。B－Ⅰ，Ⅱ区実測。P－Ⅰ，Ⅱ区掘り下げ。石鍋，土師器等出土。B～D－Ⅲ，Ⅵ区杭打ち。石群（D－Ⅰ，Ⅱ区）実測。春日式土器，縄文晩期等出土。ピット断面実測

- 昭和46年11月22日(月)～昭和11月28日(日)

B－Ⅱ区平面実測，ピット断面実測，B～D－Ⅲ区表層掘り下げ。A～D－Ⅲ，Ⅳ区表層掘り下げ。土錘，須恵器等出土。遺構写真撮影。出土。C－Ⅰ，Ⅱ区黒土層掘り下げ。

指宿式土器出土・崇寧重宝，岩崎上層式出土。

- 昭和46年11月29日(月)～昭和46年12月５日(日)

A－Ⅲ，Ⅳ区拡張区掘り下げ。霜柱立ち，寒さは厳しい。B－Ⅰ，Ⅱ，C－Ⅰ～Ⅲ区遺物レベル実測。A～D－Ⅰ～Ⅲ区Ⅲ層（黄ボッコ層）掘り下げ。縄文時代後期土器等出土。B－ⅢⅣ区実測，C，D－Ⅱ区遺物実測。B－Ⅰ，Ⅱ区４層掘り下げ。

- 昭和46年12月６日(月)～昭和46年12月12日(日)

A－Ⅱ，Ⅲ区平面実測。A～D－Ⅰ，Ⅱ区４層掘り下げ。Ⅳ層面より集石出土。集石実測ののち写真撮影。遺物は塞ノ神式土器が主体となるⅣ層である。C－Ⅰ，Ⅱ区実測，５層掘り下げた結果吉田式土器出土。

- 昭和46年12月13日(月)～昭和46年12月19日(日)

C－Ⅰ，Ⅱ区出土遺物平面実測。A，B－Ⅰ，Ⅱ区Ⅴ層掘り下げる。吉田式土器出土。同様にC－Ⅰ，Ⅱ区Ⅴ層掘り下げ。B，C－Ⅱ区Ⅲ層掘り下げる。轟式土器出土，拡張区A'～D－Ⅰ区ブルドーザーにより表土排除。集石実測。A－Ⅲ（e －15）区に石匙出土。C，D－Ⅱ，Ⅲ区Ⅲ層掘り下げ。小雨の中発掘続行。

• 昭和46年12月20日(月)～昭和46年12月23日(木)

C，D－Ⅱ，Ⅲ区塞ノ神式土器実測・A，B－Ⅱ，Ⅲ区Ⅳ層掘り下げ。Ⅳ層中より轟式土器・石鏃等出土。集石中に塞ノ神式土器出土する。鮫島文夫県教育長来訪・A，B－Ⅱ，Ⅲ区Ⅴ層掘り下げ。23日で本年の発掘調査は完了。

• 昭和47年１月４日(火)～昭和47年１月26日(木)

遺跡の取扱い協議のため発掘作業一時中断，この間遺物水洗，注記実施。

• 昭和47年１月27日(金)～昭和47年１月29日(日)

１月27日より作業再開・A－Ⅰ'（e－l'）区掘り下げ。ピット実測，Ⅴ層中より焼石出土。集石実測，C－Ⅰ（m～p－1）区Ⅴ層掘り下げ。塞ノ神式土器の出土はなく吉田式のみである。遺物実測

• 昭和47年１月30日(月)～昭和47年２月10日(金)

遺物出土状況実測，掘下げ。使用杭，発掘用具等の収納，運搬，発掘はすべて完了。

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境

小山遺跡は，鹿児島県鹿児島郡吉田町字小山に所在する。

遺跡の所在する吉田町は，鹿児島県のほぼ中央部，鹿児島市の北東部に隣接する。すなわち南は鹿児島市，西は日置郡郡山町，北は姶良郡蒲生町，東は姶良町に接する。

吉田町の集落は鹿児島湾に注ぐ思川の上流付近に開析された，勾少な河岸段丘の開ける東佐多浦地区と，鹿児島市に流入する清水川，稲荷川の上流本名川によって開けた谷合いの平野部及び，鹿児島市のシラス台地につながる大原地区等みられる。しかし町の大部分は山林が占めている。この吉田町はかって大隅の国にはいり吉田院と称されていたが，天正15年（1587）姶良郡より鹿児島郡に編入され，昭和47年（1972）町制を施行した。

近年は鹿児島市のベッドタウンとして発展しつつある。

この吉田町に所在する小山遺跡は町の北東部，思川によって形成された谷底平地の開ける東佐多浦の麓集落より，鹿児島市に通ずる県道添いの山中に位置する。

遺跡の東側には思川に注ぐ谷川が作る渓谷に通ずる谷添いの小径があり，わずかな視界が開ける。南，西，北側には標高約 130m ～約 160m の山が三方を囲み，その間に形成された盆地状の小平地は，東側の谷添いの径と連らなり北西へ通ずる。なお，遺跡に接する北側の山は，標高 146.6m の円錐形で，字名の「小山」を想起させる。

ついで吉田町の遺跡について概観したい。

この地域は山あいという地理的条件からか遺跡数はきわめて少ない。しかし発見された遺跡は，本県の縄文時代の編年の標式となっている貴重なものが少なくない。

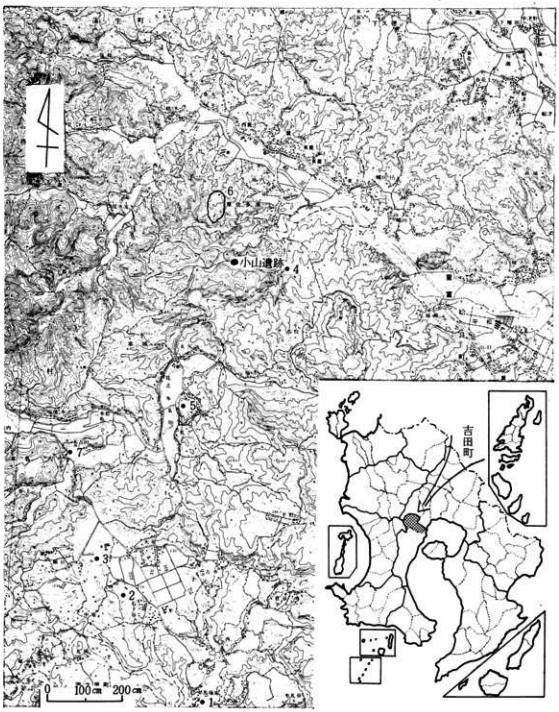
まず，鍋谷遺跡は本遺跡の東側約 500m，谷川を狭んだ岩陰遺跡であるが，河口貞徳氏の発掘調査で塞ノ神 Ab 式土器の完形が出土し，Ab 式の全容を知ることができる。

また，本町の南部の大原遺跡出土の土器は，「吉田式土器」と命名され，縄文時代早期に位置づけられる遺跡である。本遺跡も河口貞徳氏の調査によるものである。

なお歴史時代の遺跡としては本遺跡の北側約 500m に吉田氏の山城，吉田城が保存状況もよく遺存する。

番号	遺跡名	所在地	時代	文献
1	宮後	吉田町宮後	縄文時代	本報告書
2	向下堂	〃向下堂		「鹿児島県市町村別遺跡地名表」鹿県教委1977
3	大原	〃　大原	縄文時代早期	
4	鍋谷	姶良町鍋谷	〃　前期	
5		吉田町本城	中世	本報告書
6	吉田城	〃東佐多浦	〃	2に同じ
7	八幡神社跡	〃　本名	近世	2に同じ

表1　小山遺跡及び周辺遺跡一覧表



第1図　小山遺跡周辺地形図

第Ⅲ章　調査の概要

小山遺跡は鹿児島郡吉田町字小山に所在し，遺跡地は標高87.9m 程であり，三方はすぐ山が迫り，東側がわずかに開ける。遺跡の幅も約 120m と狭い，山狭の地の遺跡である。現状は畑地で，北側は一段高く，調査員は「上の段」，「下の段」と通称した。遺跡面積は約 1050 ㎡ である。

九州縦貫自動車道の中心杭に従えばＳＴＡ 110＋20を中心に東西35.2m，南北30.5m の範囲である。

調査はまず荒地化した畑地の草刈りから開始した。

調査グリッドは10m 四方を１単位とし，その１単位をさらに２m ×２m の小グリッドとすることとし，縦貫道路の中心杭ＳＴＡ 110＋30を基準点とし下の段と上の段との境いの東北端より南へ大グリッドⅠ～Ⅳ，小グリッド１～17，西へ大グリッドＡ～Ｄ，小グリッドａ－ｔとしそれぞれＡ－Ⅰ（ａ－１区）と呼称した。また調査中北側に遺跡が拡大することが確認されたため，１'～ 3'，ａ' ～t' 区を設定しA'－Ⅰ（ａ' －1' 区）と呼称した。

発掘調査は調査員４名を４班とし，河口貞徳が統括した。発掘は下の段の表層より順次掘り下げたが，12月，１月といった月は寒さが厳しく，霜柱は遺跡全面を覆うことがしばしばで作業開始前に霜の除去を行う日もあった。

また，昭和47年１月８日からの作業再開は，諸種の事情から発掘の中止が懸念された。

そこで，調査を一時中断し，関係各方面と連絡，協議を重ねた結果，昭和47年１月27日より再開されることとなった。

そして２月10日すべての調査は完了した。

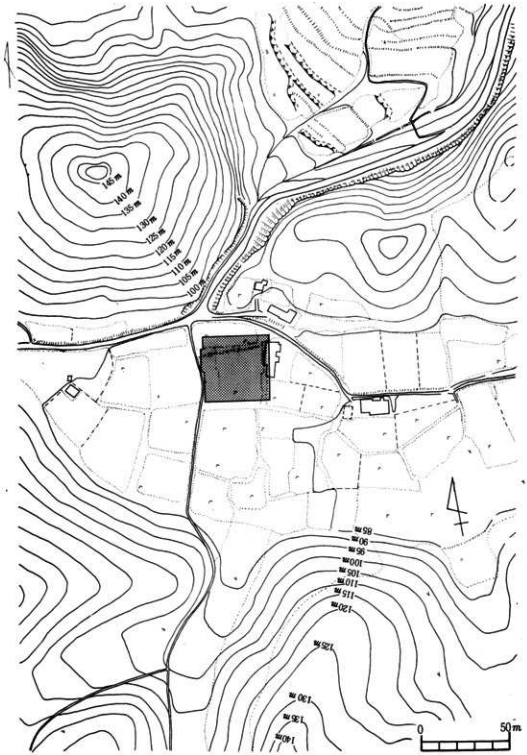
調査の結果は，最下層Ⅴ層には縄文時代早期該当の吉田式土器と集石，Ⅳ層には縄文時代前期該当の塞ノ神式土器，および集石遺構が検出され，本遺跡は縄文時代有数の遺跡となった。

また，各層中の出土遺物は，縄文式土器編年上貴重な資料となった。

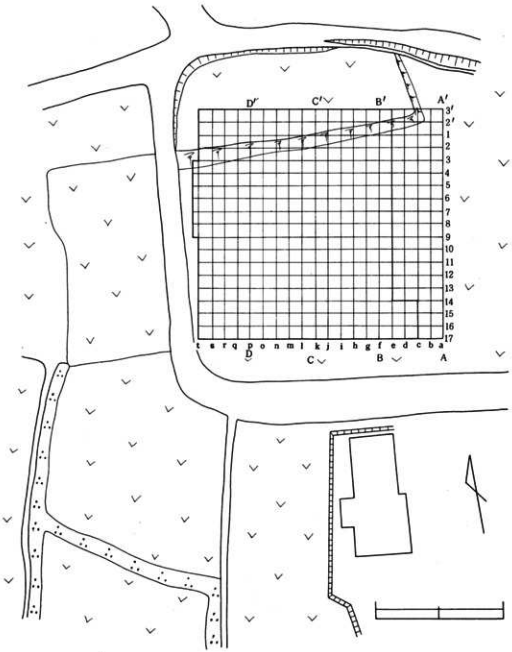
その他の縄文式土器には平栫式・円筒形・押型文・岩崎式・指宿式・轟式等がある。

上層のⅠ，Ⅱ層中には土師器（瓶，坏，皿），須恵器，青磁，白磁，滑石製石鍋等のほか，多数のピット群，礫列，礎石様切石等が出土した。

石器では，縄文時代を主に，石鏃，特殊石器，石匙，スクレーパー，剝片石器，剝片，削器石槍，石核，砥石，磨石，石皿などが出土した。


145m
140m
135m
130m
125m
120m
115m
110m
105m
100m
85m
90m
95m
100m
105m
110m
115m
120m
125m
130m
135m
140m
0
50m

第2図 小山遺跡地形図


D′
C′
B′
A′
3′
2′
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
t s r q p o n m l k j i h g f e d c b a
D
C
B
A

第3図 グリッド配置図

第Ⅳ章　層　　位

本遺跡は広い地点で 120m，狭い地点では40m にも満たない標高約87～89.5m の山狭の遺跡であるために，層位の乱れ，不安定な堆積を想定していたが，Ⅰ～Ⅲ層間に若干後世の耕作等で撹乱がみられたほかは，谷中心部に向かって若干傾斜する層序を示して安定している。

Ⅰ層　灰褐色ならびに黒褐色を呈する砂質ぎみの土層で，表層である。

C－Ⅰ，Ⅱ（1－3～10）区では北側で約30cmであるが南にいくにしたがい厚くないC－Ⅱ(1－10）区では約80cmの堆積を示す。ところがA'－Ⅰ（1～t－z'）区では 140cmにも及ぶ。これはA－Ⅰ（t－4）区からA'－Ⅰ（e'－1）区のラインで約1m の段差があり，このラインの南側は開墾等で表層が削平されたためと思われる。

Ⅱ層　黒色ならびに暗黒色を呈する砂質ぎみの火山灰層である。約10～30cmの厚さで堆積している。この層は通称黒ニガと呼ばれる。この層からは土師器（壺，坏，皿），須恵器，青磁・白磁等が出土した。

Ⅲ層　橙色および黄褐色を呈した火山灰層で，「赤ボッコ」と呼びならわされた土層である約30～40cmの厚さで堆積している。この層は鬼界カルデラを給源とするアカホヤ火山灰層に想定され，絶対年代は6050～6400Y．B．Pの年代が与えられている。

この層中よりは縄文後期の指宿式，岩崎式，春日式，深浦式，轟式の他に点縄文土器や縄文時代晩期土器片が出土した。

Ⅳ層　灰褐色および青灰色を呈する粘質の土層で，約40cm～50cmの厚さで堆積する。

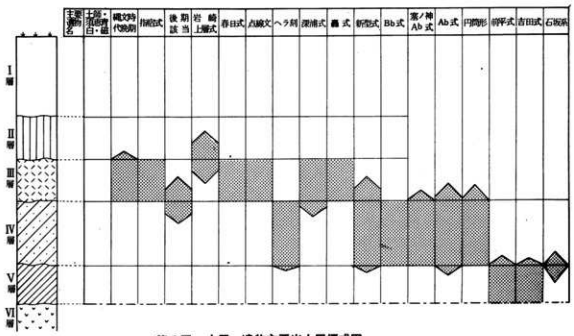
この層は加栗山遺跡（鹿児島市川上町）ではⅣ層青灰色土層とし，石峰遺跡（姶良郡溝辺町石峰）ではⅣa 層に比定できる。この溝辺遺跡でのC－14測定では7910±115Y．B．P．（7680±110Y．B．P．）の絶対年代が報告されている。

Ⅳ層からは縄文時代前期，塞ノ神式土器が主体に出土し，これに伴う集石群が検出された。塞ノ神式土器は Aa，Ab，Bd 式の他，塞ノ神系，無文である。この層中より他に，円筒形条痕文土器と少数の前平式・吉田式土器が出土した。

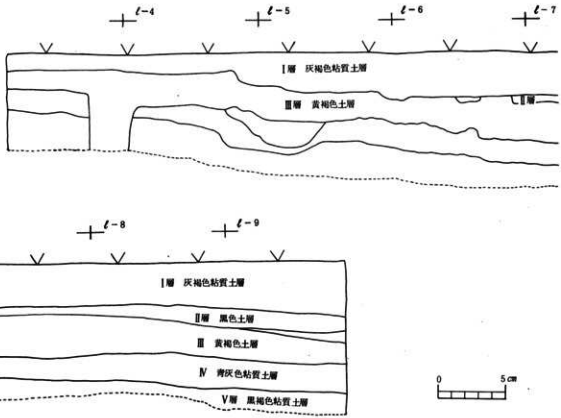
Ⅴ層　黒褐色を呈する粘質の土層で，約20～40cmの厚さで堆積する。

この層からは縄文時代早期，吉田式が集石とともに出土した。A'－Ⅰ（g'－3'）区では層厚は80cmに及ぶものの遺物の出土は皆無に近かった。前平式土器も少数出土した。

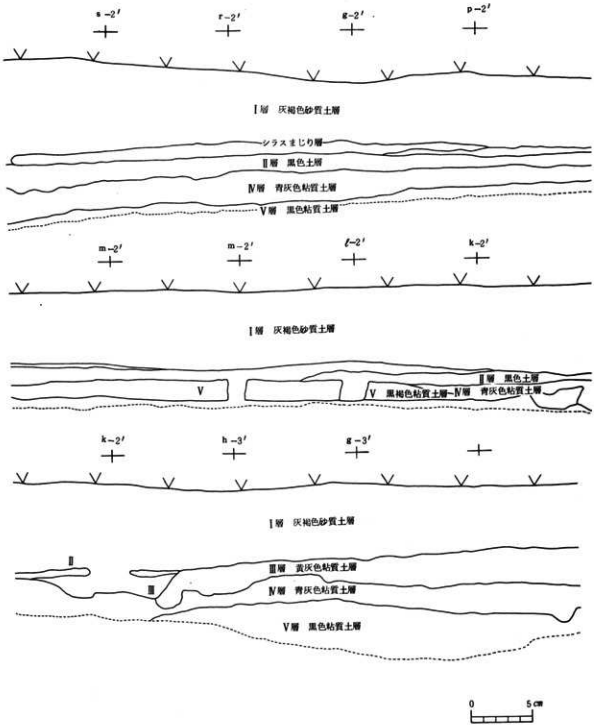
Ⅵ層　本遺跡の基盤層としたもので，黄褐色ないし紅褐色を呈するパミス層で，無遺物層である。本層は桜島起源とする火山灰といわれている。



第4図　土層，遺物主要出土層標式図



第5図　土　層　断　面　図


s −2′
r −2′
q −2′
p −2′
Ⅰ層 灰褐色砂質土層
シラスまじり層
Ⅱ層 黒色土層
Ⅳ層 青灰色粘質土層
Ⅴ層 黒色粘質土層
m −2′
m −2′
ℓ −2′
k −2′
Ⅰ層 灰褐色砂質土層
Ⅴ
Ⅱ層 黒色土層
Ⅴ 黒褐色粘質土層−Ⅳ層 青灰色粘質土層
k −2′
h −3′
g −3′
Ⅰ層 灰褐色砂質土層
Ⅱ
Ⅲ
Ⅲ層 黄灰色粘質土層
Ⅳ層 青灰色粘質土層
Ⅴ層 黒色粘質土層
0
5cm

第6図 土 層 断 面 図

第Ⅴ章　遺　　構

第1節　縄文時代

1　縄文土器・集石の分布（第7図）

小山遺跡における縄文時代の土器は石坂系土器，吉田式土器，前平式土器，円筒形土器，塞ノ神Aa式土器，塞ノ神Ab式土器，塞ノ神Bd式土器，塞ノ神系土器，轟式土器，深浦式土器，ヘラ刻文土器，点線文土器，春日式土器，岩崎上層式土器，協和式土器，指宿式土器，晩期といった縄文時代早期から前期，中期，後期，晩期と全時期に亘る土器が出土し，本遺跡が当時の生活に適した地域であったことがうかがわれる。

とくに，吉田式土器（早期），塞ノ神式土器（前期）は他の縄文時代の遺物に比して多量に出土し，この期が本遺跡の盛行時期であったことが理解できる。

しかし，山あいに開けた狭い谷底の平地も，吉田式土器期と塞ノ神式土器期とは微妙に変化している。

本遺跡はⅤ層下面での地形はA－Ⅱ（a－9）区とD－Ⅱ（t－10）区を結ぶ線を中心に南へ緩傾斜する地形を呈している。この地形を参考にして遺物の分布を述べると，吉田式土器が濃密に分布する地区はC－Ⅰ，Ⅱ区を中心にして遺跡の北，東区に集中して出土する。

この区は遺跡の中では平坦で地形が安定しており，ここに吉田式土器は集中している。

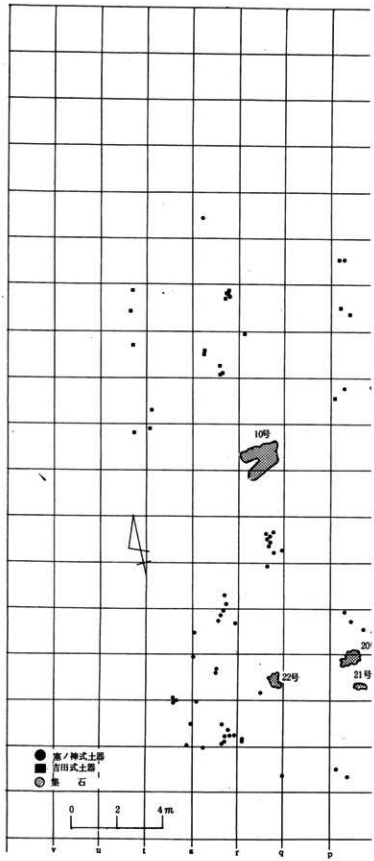
従って，これに伴う集石の分布もB，C－Ⅰ，Ⅱ区に集中して検出される。ただ集石は土器の濃密に出土する地区よりややすずれた，北側に集中する。

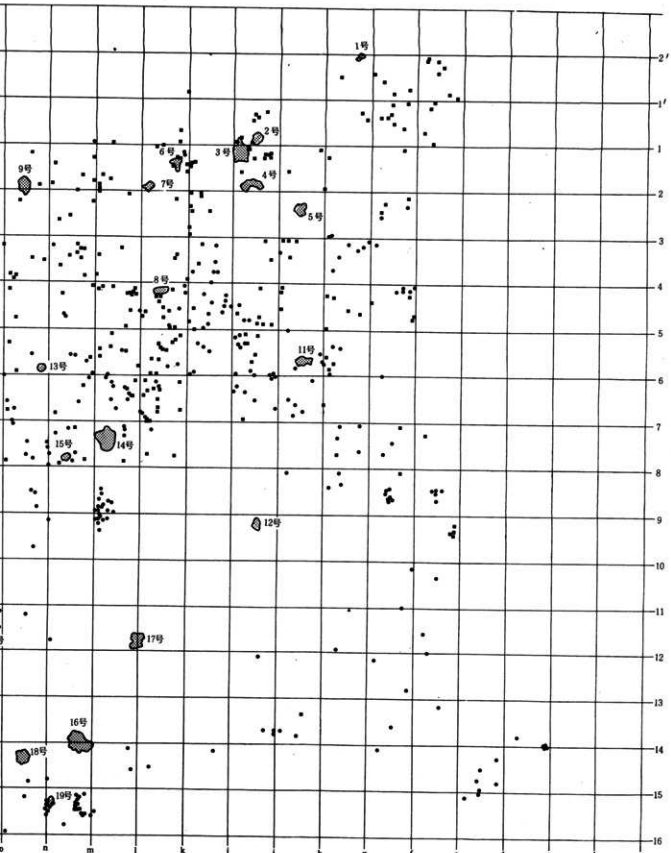
これに対比し塞ノ神式土器はA～D－Ⅱ，Ⅲ区，即ち遺跡の南面する地区まで拡がり，C－Ⅰ，Ⅱ区は吉田式土器と重層する。

塞ノ神式土器に伴う集石も当然のごとく南地区に分布するわけである。

このようにⅤ層吉田式土器の時期は遺跡の北側を中心として遺跡は拡がり，時代が下って縄文時代前期，Ⅳ層塞ノ神式土器の時期は，遺跡の中央部で吉田式土器の時期と共通するものの南面へ拡大していったことがわかる。

なお他の縄文式土器は，比較対象とするには出土点数も少ないが，参考までに記述すると，深浦式土器はD－Ⅰ～Ⅲ区，その他の土器もB～D－Ⅰ～Ⅲ区に出土し，遺跡の北側A－Ⅰ区には出土しない。


10号
20
21号
22号
高ノ神式土器
吉田式土器
集 石
0
2
4m
v
u
t
s
r
q
p



第7図　縄文土器・集石出土分布図

2 集 石

縄文時代の集石遺構は，遺跡の中心部から南側にかけて検出された。

礫は集中して検出された22基のほか，散在する礫とに区分される。22基は集石遺構として取り上げたが，このうち，13基はⅣ層（塞ノ神式土器）９基はⅤ層（吉田式土器）に伴うことが確認された。いずれも安山岩の角，円礫を使用し，表面は赤化してもろく，あるいは亀裂があるもの，土器が礫中に混入するもの，石器を再利用したものも見られた。礫は断面観察によると重層するものは希で，掘り方も確認されなかった。

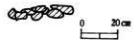
(1) Ⅴ層の集石

Ⅴ層検出の集石はⅤ層上面で検出されたものである。Ⅴ層中検出の集石は10基をかぞえ，その分布は遺跡の北東部に集中する。このあたりは吉田式土器の出土はきわめて高い。集石は角礫等を使用し，表面は赤色化し剥落したものもあり，集石は散在している。

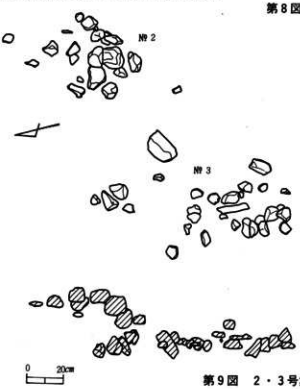
1 1号集石（第８図）

A'－Ⅰ（R'－1'，2'）区に検出された集石である。

10～７cm大の安山岩８個を集石したもので，集石では小形のものである。南東部は礫はない。掘り方等は確認されなかった。



第８図 １号集石



第９図 ２・３号集石

2　2・3号集石（第9図）

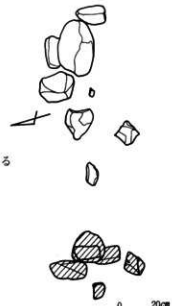
2・3号集石はA－Ⅰ（i－1，1'）区に検出されたものである。

このうち2号集石は，東方向に集中し北方向に散在する。

使用された集石は，15cm大のものから，5cm内外のものであるが，集中する南方向には大形の礫を使用する。南西部に吉田式土器1点が出土した。

3号集石は，2号集石の南西方向約 1.1m の位置に隣接して検出されたもので，東西70cm，南北 1.1m の範囲にあるが，集中するところは南部である。使用する集石は5～10cm内外のもので，角礫も散見される。

集石は積重ねられることなく，平面的に配置され，掘り方等も確認できない。



第10図　4号集石

3　4号集石（第10図）

B－Ⅰ（i－1）区に検出された集石である。

この集石は他と比較すると大形の礫を使用し，使用礫の数も少ない。

30×20cmの長楕円形の大形礫を中心に北，東に1個，西方向に1個，さらに4個の礫が散在する。これらの礫は10～20cm内外である。

土器の供伴はみられなかった。

4　5号集石（第11図）

B－Ⅱ（h－2）区に検出された集石である。

13個の礫が散在するが，わずかに北方向に6個の礫の集中がみられる。

使用された礫は5～15cm内外のものでばらつきが目立ち統一性も認められない。礫はⅤ層面にほぼ水平に置かれ，掘り込みや共伴遺物はない。

集石の周辺にも遺物は出土しなかった。

第11図　5号集石

5　6号集石（第12図）

B－Ⅰ（h－1）区に検出された集石である。

この集石の周辺には吉田式土器が集中して出土し，集石の北及び南西部に各1点づつ吉田式土器が，集

石の上面に出土した。

集石は5～10cm内外の安山岩を使用し，集中度はみられない。即ち東西50cm，南北60cmの範囲に16個の礫が不規則に配されたものである。

この集石の位置も，遺跡全体からみると北側にかたより他の吉田式土器に伴う集石群の一角をなすものである。

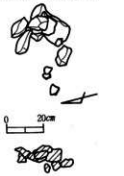
掘込みはなく水平に配されていた。

第12図　6号集石

6　7号集石（第13図）

C－Ⅰ（k－1）区に検出された集石である。

長径13cmの長方形角礫の上及び側面に拳大の礫10個を集石したもので，小形の集石である。



第13図　7号集石

7　8号集石（第14図）

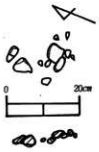
C－Ⅱ（k－4）区に出土した集石である。

6個の拳大の集石中には2点の吉田式土器が出土した。

8　9号集石（第15図）

C－Ⅰ（n－1，2）区に検出された集石である。8個の礫が集中する南側には，15cm内外の扁平な礫2個を配する。

掘り込み及び共伴遺物は確認されなかった。吉田式土器に伴う集石では北西端に位置するものである。



第14図　8号集石

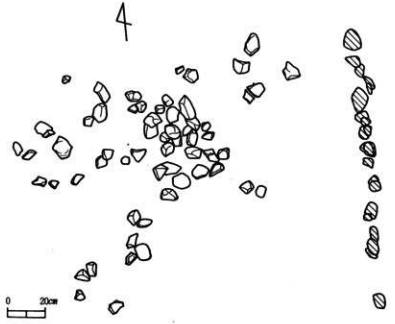
第15図　9号集石

9　10号集石（第16図）

D－Ⅱ（q－7，8）区に検出された集石である。

この集石は吉田式土器に伴う集石群より，南西方向に1基とびはなれ，集石の規模も15m×1.6mと大きく，使用礫の数も多い。礫の集中部より北東，西，南西方向に拳大の礫が散在する。礫の範囲は60cm×40cmで，使用した礫は5～10cm内外の比較的小形のものである。

掘り込み，共伴遺物は検出されなかった。



第16図　10号集石

(2) Ⅳ層の集石

Ⅳ層に検出された集石に基であり，遺跡の南西部に集中するものと一部吉田式土器と伴う集石の範囲と接するものとがある。集石の礫は密度濃く集中し，Ⅴ層出土の集石とは好対象である。

1　11号集石（第17図）

B－Ⅰ（h－5）区に検出された集石である。

80cm×50cmの平面形長方形を呈する。大形の礫を周辺に，中心部に小礫を集めたもので，わずかに積重ねられた状態である。使用した礫は50～60cm内外の小礫，20cm程の大形礫である。

共伴遺物，掘り込みは確認されなかった。塞ノ神式土器に伴うものでは北東に位置する。

2　12号集石（第18図）

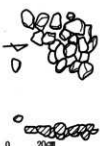
B－Ⅱ（i－9）区に検出されたもので，9個の礫を使用した小形の集石である。共伴遺物，掘り込みは確認されなかった。

第17図　11号集石

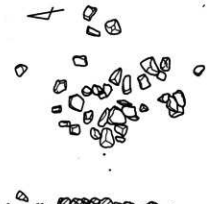
第18図　12号集石

3　13号集石（第19図）

C－Ⅰ（n－5）区に検出された集石で，この区は吉田式土器と塞ノ神式土器の分布が共通する区域である。集石は40cm×40cmの範囲に集中する小形のもので，使用礫も拳大のものを使用する。南西部がやや乱れるものの，まとまりの良い集石である。



第19図　13号集石



第20図　14号集石

4　14号集石（第20図）

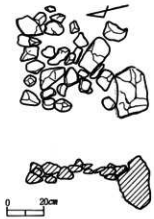
C－Ⅱ（1－7）区に検出された集石である。塞ノ神式土器に伴う集石はまとまりの良いものが特徴であるが，13号集石は散在する。使用する礫は5～10cm内外のもので，南北に並列状となり，中心部は粗となる。周辺は塞ノ神式土器と吉田式土器の分布が共通する区域である。

5　15号集石（第21図）

C－Ⅱ（m－7）区に検出された集石である。30cm×30cmの範囲に15個の礫が集中し，周辺に若干の礫が散在する。

使用した礫は拳大のもので，やや大形礫を周辺部に中心部には小礫を配している。

第21図　15号集石



第22図　16号集石

6　16号集石（第22図）

C－Ⅲ（k，1－11）区に検出された集石である。中心部は小礫を集中させる50cm×60cmのもので南端の大形礫に隣接してたたき石，中心部には塞ノ神式土器片が出土した。

7　17号集石（第23図）

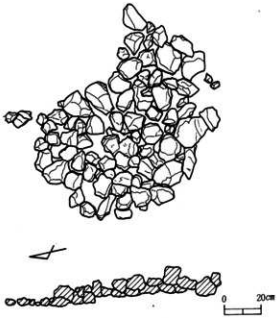
C－Ⅲ（m－13，14）区に検出された集石である。

北西部を欠き半月状を呈するもので約1m×約1mの平面形にはいる。

周辺部には20cm～10cm内外のやや大形の礫を配し，中心部にいくに従い比較的小形の礫を集石している。

礫は重層するものは少なく，平面に置かれる。使用礫は89個にのぼり，礫の表面は赤色，茶褐色に変色し，剥落も目だつ。

本遺跡出土の集石中最大でまとまりのある集石である。



第23図　17号集石

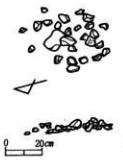
8　18号集石（第24図）

C－Ⅲ（n－14）区に検出された集石で，60cm×55cmの円形を呈する。54個の角礫を集中させる。中心部はわずかに粗となるものの，まとまりのある集石である。出土区は遺跡の南端にあたり，周辺にも遺物の出土は少ない。集石中よりすり石1個が出土した。集石に再利用したものと思われる。礫は55個を数え，水平に置く。

第24図　18号集石

9　19号集石（第25図）

C－Ⅲ（m－15）区に検出されたもので，4cm内外の礫を主に使用し，中心部は粗となる。集石の西側に隣接して塞ノ神式土器が出土する。



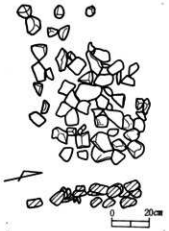
第25図　19号集石

10　20号集石（第26図）

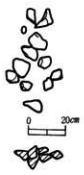
－　（O－11，12）区に検出された集石である。

80cm×60cmの範囲に56個の拳大の礫を集石したものである。西側は散在するものもあるが，

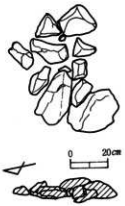
まとまりのある集石で，礫は平面に置かれている。



第26図　20号集石



第27図　21号集石



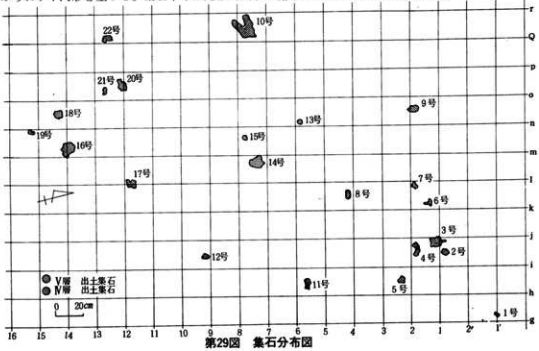
第28図　22号集石

11　21号集石（第27図）

C－Ⅲ（0－12）区に検出された集石である。12個の礫を集石するものでⅣ層出土の集石ではまとまりのない集石となっている。礫は拳大の礫を使用する。遺物，掘込み等はなかった。

12　22号集石（第28図）

D－Ⅲ（p－12）区に検出されたもので，30cm～40cm位の礫を使用している。南側には礫はみられず半円形を呈する。集石中では比較的大形の礫を使用した集石の1つである。



第29図　集石分布図

第2節　歴史時代

歴史時代に伴う遺構としてはピット群，集礫，礫列が検出されたほかA－Ⅲ（d－15）区には柄穴をもつ台座様のもの，蕗弁を上面に刻む台座が出土し，中世の遺構の存在をうかがわせた。

1　集礫（第30図）

集礫はD－Ⅱ（r－9，10・S－9，10）区に検出されたものである。長径 4.2m，短径2.1m の長楕円形，深さ 0.8m の掘込み中に50cm大の角石や5cm～30cm内外の角礫が多数検出されるものである。礫中に混在し石臼，土師器片等が出土した。

2　ピット群（第31図）

遺跡の南側A～D－Ⅱ～Ⅳ区を中心に多数のピットが検出された。ピットはⅢ層まで掘込まれ，径は約20cm～30cm，深さ約10cm～40cmを測る。建物跡，柵列等復元することはできなかったが，出土遺物からみて中世のピット群であろう。

3　礫列（第32図）

遺跡の西側D～Ⅱ－D～Ⅰ区，南北にかけて礫列がみられた。礫は北に向うほど散在するが南側では大小多数の礫が無雑作に積まれているものの，列としては整然とし，北端部で再び集中する。礫列中には台座（第71図 533）をはじめ土師器，青磁等が出土した。

第3節　小結

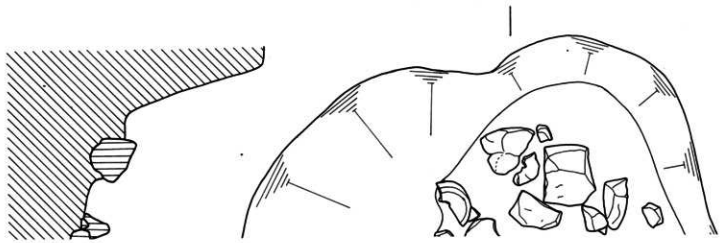
以上本遺跡で検出された遺構は縄文時代早期の吉田式土器に伴う集石，同前期の塞ノ神式土器に伴う集石，また歴史時代では中世の集礫，ピット群，礫列であった。

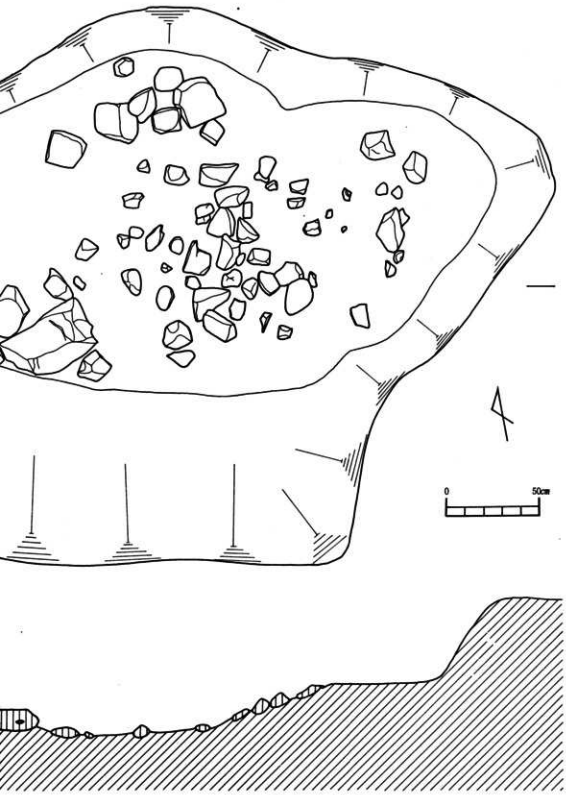
このうち縄文時代については，2時間の集石をなしていた。すなわち，早期の集石はまとまりを欠き使用した礫も小形が多いのに対して，前期の集石は礫が集中して散在するものが少ない。しかも（発掘区内のエリアではあるが）幅 100m 弱の狭い谷に開けたわずかな谷底平地にも関わらず，縄文時代早期と縄文時代前期の遺物が多量に出土したことは，注目される。

しかし，本発掘調査では，住居址，柱穴などの定住を示す遺構は全く検出されなかった。

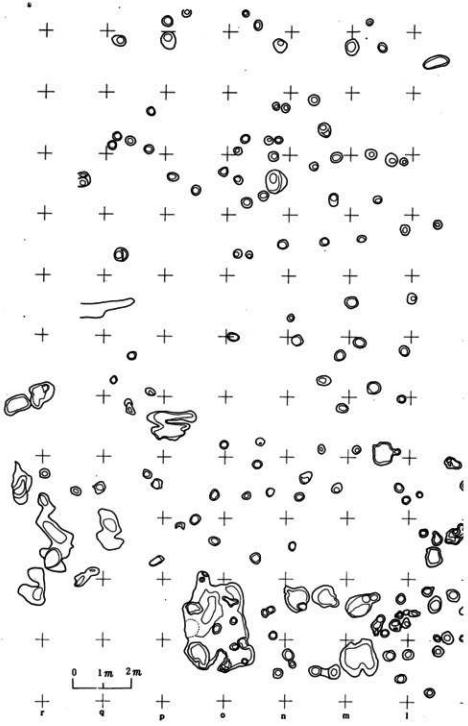
これらのことから，本遺跡は狩場等，一時的な，居住地としての可能性の強い，遺跡の性格を示しているものといえる。

歴史時代の遺構については復元するには至らなかったが，発掘時は寺院跡の可能性も検討された。遺物の項で述べる台座（第71図 533）は室町期頃の無縫塔の台座であり，しかもこの無縫塔はよく寺院の僧の墓に使用されていること，青磁等の遺物から15，16世紀頃が考えられることなどをあわせると，廃寺跡の可能性は強い。

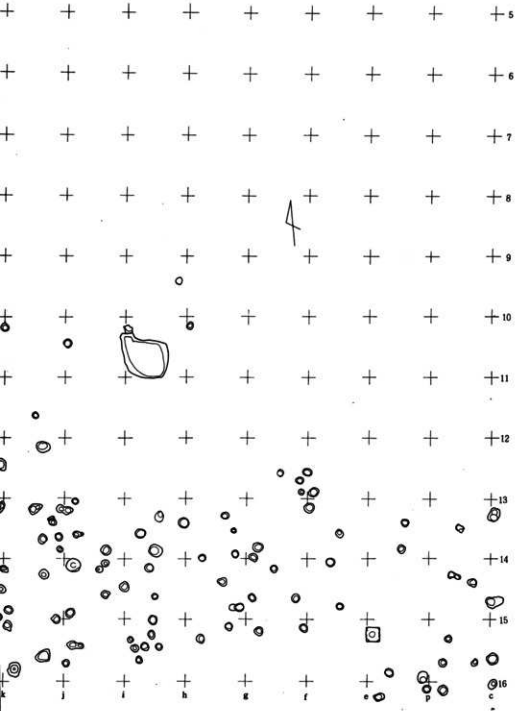




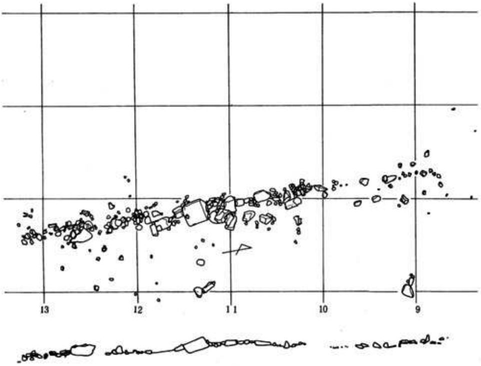
第30図 集礫実測図



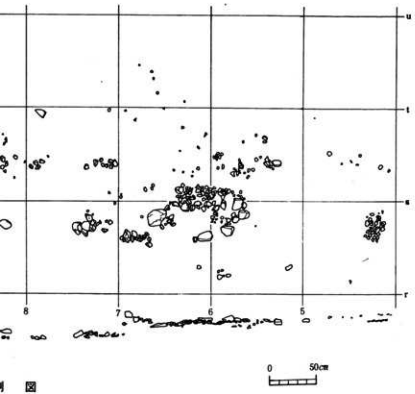
第31図



ピット群実測図



第32図　礫　列　実　測


u
t
s
r
8
7
6
5
0
50cm

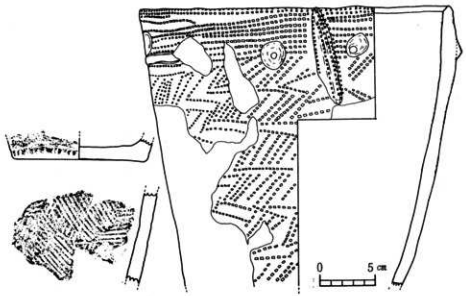
第Ⅵ章　遺　　物

第1節　土　器

1　縄文式土器

(1)石坂式、石坂系土器（第33図、図版5）

第33図1・2が石坂式土器である。石坂上遺跡（川辺郡知覧町）出土の土器を標式として名付けられた。掲載した土器は遺跡の東方約 300m 地点の道路公団試験盛土付近で採集したものである。1は胴部で器面には貝殻縁により綾杉状の条痕文を施す。2は底部で器面にはヘラ状工具により縦位の刻線を施す，3はB－Ⅱ（f，g－5，6）区を中心に出土したものを接合復元したものである。器形は胴部より直線的に外反して立上った器体は，口縁部でわずかに内湾し平坦面を作る。口縁部が内湾するために口唇部は内側で尖った状態となる。口縁部が内湾する位置には円周24cm間隔で10cm内外の断面蒲鉾状の凸帯が横位に付く。そしてこの凸帯の中間には口唇部から胴部へかけて，長さ9cm，幅1～1.4cmの凸帯が傾きをもって縦位に付く。この縦位の凸帯をはさみ左右には外面より内面にかけて穿った孔が1対。横位の凸帯に1個所（対に当る部位の破片がないが対をなしていたのであろう）穿孔がある。文様は貝殻縁により刺突した連点文を施す。口唇部は縦位に3条の肋をもつ貝殻縁で刺突し横位の凸帯及びその直下までは4～6条の連点文が施され，胴部には綾杉状に施文し，これを上下，左右に繰返す。この文様原体は9条の肋をもつ貝殻縁を用いている。内面はヘラ磨きされる。色調は茶褐色を呈するが。黒色部分もまだらにはいる。胎土は砂粒を含み粗い，焼成は良いが器面が剥落したところがみられる。出土区はⅤ，Ⅳ層である。



第33図　石坂式、石坂系土器実測図

(2吉田式土器（第34～45図・図版６～13）

第34図４～第45図 164の土器である。大原遺跡（鹿児島郡吉田町）第２層出土の土器を標式として名づけられた。円筒形，平底の土器で，口縁部は平担である。器壁・底部ともに薄く，土器内面はヘラ磨きされている。器面は口縁部，胴部，底部の三部位に分けて，貝殻により施文する。

口縁部の文様は，貝殻縁によって削り出し，あるいは貼り付けた楔状の凸帯を２～３列に廻らすもの，貝殻縁を横位に刺突してできる文様帯を１～２列廻らすもの，貝殻縁の押し引きによる文様帯を，交互に廻らすものなどがある。

胴部の文様は，貝殻縁による押し引きが面に廻るもの，押引きと連続した押圧を横位に廻らすもの，単に押圧の連続されるものなどがあり，これ等の手法をもって華麗な文様を描き出す。

底部外面の文様は，ヘラ状施文具による縦位のていねいな沈線を施している。

口唇部は外傾し平担となる。この平担な面に浅いヘラ刻目を施す。

本遺跡の吉田式土器は，前述の要素をもった土器が，Ｖ層を中心に出土した。

第34図４～第36図25までは楔状の凸帯を２列廻らし，胴部の文様は押引きを主体とするものである。いずれの土器も底部を欠くもので復元口径は21.5cm～25.5cmを測る。

４は復元口径21.5cmを測る小形の円筒形土器である。器形は口縁部でわずかに外反し，胴部以下は直線的に移行する。口唇部は平担で，浅いヘラ刻目が２～３mmの間隔で外側より内側に向けて刻まれている。口縁直下には貝殻腹縁を横位に２列の平行な押圧文を廻らす。

この文様の下位に幅 0.7cm，長さ２～ 1.4cmの楔状の凸帯を約１cmの間隔で上下２列に貼り付けている。楔状凸帯は，貼り付けた後，楔の頂部はヘラ状工具で刺突，側辺は貝殻縁で刺突し固定する。胴部には貝殻縁による押し引き文様を横位に廻らしている。器壁は 0.7cmと薄く，器内面はヘラ磨きされている。胎土は砂粒，雲母を含み粗いが，焼成はよい。

18は復元口径23.3cmを測るものである。18は楔状凸帯の施文に特徴をもつ。楔状凸帯は貝殻縁及びヘラ状工具を刺突することで凸帯を作り出す。従って楔は低く，小形である。

23は２列の楔状凸帯のうち下位の凸帯は貝殻縁を刺突することで楔状の文様を作り出している。

第36図28～第37図40までは胴部の文様帯に特徴をもつものである。他に楔状凸帯は２列のもののほか，26，27は１列である。

このうち29は復元口径19cmを測るもので，胴部の文様は押引きの間隔に強弱，あるいはいく分斜位に貝殻縁を置くことで，異った文様帯に見えるものである。

第38図41～55までは楔状凸帯を持つものを集成したものである。楔状凸帯は前述したように削り出したものが主であり，大きさは器体の大小による変化は見られない。

また楔状凸帯には大小が見られる一方，51の下位の楔状凸帯が粗雑になり小形化するもの，55のように，刺突あるいは押圧することで楔状凸帯を描き出すものもある。

第39図56～59までは，楔状凸帯の文様帯に特徴をもつものである。

このうち59は復元口径21.5cmを測るものである。口唇部及び胴部の文様は他の吉田式土器と同様である。この土器の特徴は口縁部下の楔状凸帯部分に楔状凸帯を有せず，貝殻縁で押圧したのち，ヘラ状工具で横位に刺突を繰り返すことで，胴部以下と異った文様帯となる効果を果しているものであろ。これらの手法は，楔形凸帯をもつ吉田式土器の技法を踏襲したものであろう。

同様なことは60，61にもいえる。60は本来楔状凸帯のつく部位の施文方法にみられる。

9条の貝殻縁を押引く際2～5mmの広い間隔をもち施文することで，胴部の密度の濃い押引き文と区別させ，異なった文様帯に見せる効果をあげている。

第39図61～第41図87までは楔状凸帯及び楔状凸帯に類似する文様帯をもたない類である。

60は復元口径16.0cmを測る小形の吉田式土器である。口縁部もほとんど外反しない円筒形である。平坦な口唇部にはヘラ刻目を施す。口縁部には7条の貝殻縁を単位とし横位に押圧し1条の文様を描く。この文様は幅5mm内外をもって3条平行に廻る。胴部にはていねいな押引きが繰り返えされ文様を形成する。器内面はヘラ磨きされるがわずかに剝落がある。胎土は砂粒及び雲母を含むが焼成は良い。66は幅4cm，8条の貝殻縁の文様原体を用い，横位に押引きを繰返すが，上部の1，2条は押引きが雑か，あるいは孤を描く貝殻縁のため器面への密着度が弱いためか押圧状を呈する。70，71，73，74，76等は斜位に繰返すため綾杉状を呈し，77にいたっては同一方向でないため雑な文様構成となっている。また使用した貝殻の大小により横様に差異は当然であるが70は幅5cm，12条の貝殻縁を使用し大形の文様を描くものから，79～82にみるように肋の間隔の狭いものを使用し，ていねいな文様を描くものもある。

85は復元口径14.3cmを測るもので，口縁部は直立し，口唇部もやや平坦さに欠ける土器である。文様は口縁部に2条の平行な押圧文，胴部には3条の貝殻縁により押圧するが，その間隔は粗く，無文帯となる所もある。器内面は貝殻条痕が施され，ヘラ磨きはない。口唇部の刻目も他に比較して大きい。本遺跡の吉田式土器のうち，1点出土したものである。

87は口縁部が強く外反する器形のもので，口縁部にはヘラ状工具による刺突状の文様が3列繰り返されたものである。この土器も本遺跡から1点出土した。

第41図88～91，第42図92～106，第43図107～120までは吉田式土器，胴部の集成である。

文様は使用した貝殻により描き出された文様は必然的に変化しているが，押引き及び押圧の基本的な技法は変らない。第43図 117までは押引きが主体であるが，第43図 108～ 120までの土器には一部押圧文を繰り返すものもあり，114，115になると文様が粗雑となり，115は文様帯の間に無文帯が出来たものもある。116，119は一定方向への規則制がないため，一部に綾杉状を呈するところもある。

第44図 121～第45図 159までは吉田式土器，底部の集成である。

吉田式土器の底部は前述したように，平底で，底部外側にはヘラによる縦位の刻線を密接に施文する。

底部径は復元径で9cm～15.5cmの範囲に含まれ，底部厚は 0.4cmの薄いものから，1.13cmの

厚いものまであるが，本報告書に掲載した底部厚は平均0.81cmを測り，薄手の造りである。

底部面もていねいなヘラ磨きで仕上げ，側面の刻線の幅も3㎜幅であれば，ほとんど3㎜幅の等間隔を保ち刻線を施し，正端さがうかがわれる。

第45図 160～164までは角筒形の吉田式土器で，本遺跡では5点の出土であった。

160は 0.5cmと薄い器壁のもので，平坦な口唇部には刻目文を施す。口縁部直下には一条の貝殻縁による押圧文を廻らし，下位に2列の楔状凸帯がある。胴部は7条の肋をもつ小形の貝殻縁で4～5回の連繰した押引きを横位に繰り返している。器内面はヘラ磨き，胎土はわずかに砂粒は含むものの，比較的良質の土を使用し，焼成も良い。161は四隅で綾をもつ。口唇部は平坦で刻目を施し，口縁部下には1条の押圧文が廻る。この下位に10条の肋をもつ貝殻縁で，押圧し楔形凸帯の文様帯にかえる。胴部は押引き，内面は粗いヘラ磨きである。角筒ではあるが，四隅は角とならず丸味を帯びている。162は四隅部で欠損する角筒胴部片で，器厚は 0.4cmと薄い。 163は磨耗が著しいため口唇部及び胴部の文様は薄い。表面観察では四隅に角の線がわずかに出ているのみで，内面では角とならない。 164は底部であるが，163 同様，四隅部がわずかに直線的となる，角筒である。色調は160～162が黒褐色，163，164が茶褐色を呈す。

番号	出 土 区	層位					番号	出 土 区	層位				
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
4	B－Ⅰ(h－3)				○		23	C－Ⅰ(l－5)				○	
5	B－Ⅰ(g－3)					○	24	B－Ⅰ(b－1)					○
6	D－Ⅰ(k－4)					○	25	B－Ⅰ(m－4)					○
7	B－Ⅰ(g－1)				○		26	B－Ⅰ(m－2)					○
8	B－Ⅰ(b－2)					○	27	B－Ⅰ(h－1)					○
9	B－Ⅰ(i－3)					○	28	C－Ⅰ(k－5)					○
10	表 採						29	C－Ⅰ(m－5)					○
11	B－Ⅰ(i－4)				○		30	C－Ⅱ(k－5)					○
12	C－Ⅰ(l－4)					○	31	C－Ⅰ(l－3)					○
13	C－Ⅱ(m－7)					○	32	C－Ⅰ(O－3)			○		
14	B－Ⅰ(b－1)					○	33	C－Ⅰ(l－3)			○		
15	C－Ⅰ(m－1)					○	34	D－Ⅰ(b－5)					○
16	B－Ⅰ(a－3)					○	35	B－Ⅰ(i－3)					○
17	B－Ⅰ(g－2)					○	36	C－Ⅰ(k－2)					○
18	C－Ⅱ(n－6)				○		37	A－Ⅰ(e－2)					○
19	B－Ⅰ(h－3)					○	38	C－Ⅱ(k－1)				○	
20							39	C－Ⅰ(k－1)					○
21	B－Ⅰ(i－1)				○		40	D－Ⅰ(r－3)			○		
22	B－Ⅰ(b－1)					○	41	B－Ⅰ(i－1)					○

表2 吉田式土器出土区・層一覧表

番号	出土区	層位				
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
42	C−Ⅰ(l−3)					○
43	A−Ⅰ(l−1)				○	
44	B−Ⅱ(i−6)					○
45	C−Ⅱ(m−1)					○
46	B−Ⅰ(g−3)				○	
47	C−Ⅰ(m−3)					○
48	B−Ⅰ(b−1)					○
49	C−Ⅱ(k−5)					○
50	B−Ⅱ(i−9)					○
51	C−Ⅰ(k−2)					○
52	C−Ⅰ(l−5)					○
53	C−Ⅰ(k−5)					○
54	B−Ⅰ(i−5)					○
55	A−Ⅰ(e−2)					○
56	C−Ⅰ(l−1)				○	
57	C−Ⅰ(k−1)					○
58	B−Ⅰ(b−2)					○
59	B−Ⅰ(i−5)					○
60	C−Ⅰ(m−5)					○
61	C−Ⅲ(O−12)				○	
62	C−Ⅰ(n−2)					○
63	B−Ⅰ(b−1)					○
64	B−Ⅰ(b−1)					○
65	B−Ⅰ(i−4)					○
66	C−Ⅲ(O−12)					○
67	B−Ⅱ(i−7)				○	
68	C−Ⅱ(O−6)				○	
69	A−Ⅱ(e−9)					
70	A−Ⅰ(e−2)					○
71	C−Ⅰ(k−3)					○
72	B−Ⅲ(b−12)					
73	B−Ⅰ(k−3)					○

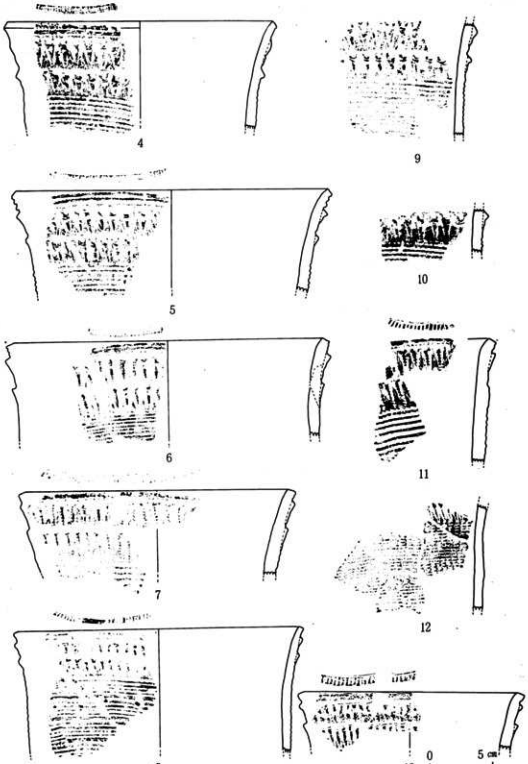
番号	出土区	層位				
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
74	C−Ⅰ(m−3)					○
75	C−Ⅰ(l−5)					○
76	C−Ⅰ(m−3)					○
77	C−Ⅰ(m−2)				○	
78	C−Ⅱ(k−7)					○
79	C−Ⅰ(m−3)					○
80	B−Ⅱ(i−7)				○	
81	A−Ⅰ(e−3)			○		
82	C−Ⅰ(n−2)				○	
83	B−Ⅰ(i−4)					○
84	B−Ⅰ(i−4)					○
85	B−Ⅰ(i−2)				○	
86	C−Ⅰ(k−4)					○
87	C−Ⅰ(O−4)			○		○
88	B−Ⅰ(b−3)				○	
89	C−Ⅰ(m−3)					○
90	B−Ⅰ(b−1)					○
91	C−Ⅰ(h−3)			○		
92	C−Ⅱ(l−8)					○
93	C−Ⅰ(k−3)					○
94	C−Ⅱ(m−7)				○	
95	C−Ⅰ(k−2)					○
96	B−Ⅰ(g−1)					○
97	C−Ⅰ(k−3)					○
98	D−Ⅱ(p−8)				○	
99	B−Ⅰ(b−3)				○	
100	C−Ⅰ(m−3)			○		
101	B−Ⅱ(g−6)				○	
102	C−Ⅰ(k−5)					○
103						
104	B−Ⅰ(k−3)					○
105	C−Ⅰ(k−2)					○

表3　吉田式土器出土区・層一覧表

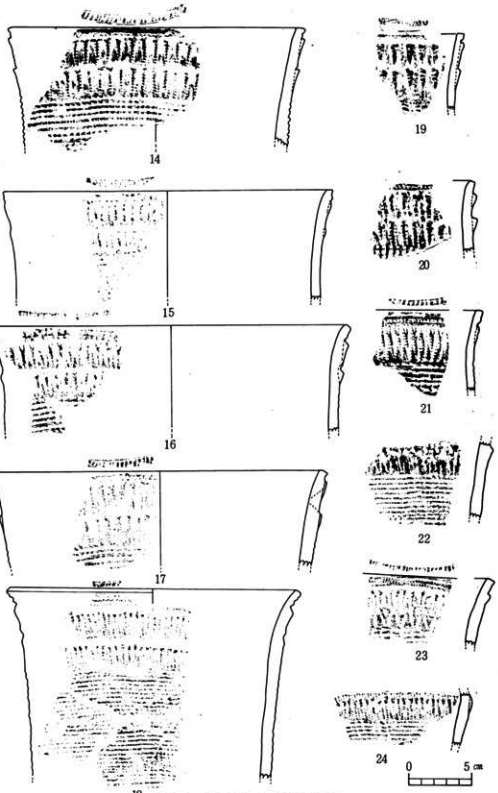
番号	出土区	層位				
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
106	C−Ⅰ(l−3)					○
107	D−Ⅱ(P−6)			○		
108	C−Ⅰ(O−4)			○	○	
109						
110	D−Ⅰ(t−4)					○
111	C−Ⅰ(m−3)					○
112	B−Ⅰ(g−4)					○
113	A−Ⅰ(l−2)					○
114	O−Ⅰ(r−5)					○
115	B−Ⅰ(i−4)					○
116	C−Ⅰ(h−1)					○
117	B−Ⅰ(g−5)					○
118	D−Ⅰ(r−1)				○	○
119	C−Ⅰ(k−1)					○
120	C−Ⅰ(l−3)					○
121	B−Ⅰ(i−5)					○
122	C−Ⅰ(n−4)				○	
123	C−Ⅰ(l−4)					○
124	B−Ⅱ(i−6)					○
125	C−Ⅰ(m−2)					○
126	C−Ⅰ(k−5)					○
127	C−Ⅰ(n−3)					○
128	C−Ⅰ(k−4)					○
129	C−Ⅰ(l−3)					○
130	D−Ⅰ(p−4)			○		
131	C−Ⅱ(m−5)					○
132	D−Ⅱ(g−7)			○		
133	B−Ⅰ(i−5)					○
134	C−Ⅰ(O−3)				○	
135	B−Ⅰ(b−3)					○
136						
137	C−Ⅰ(l−4)					○

番号	出土区	層位				
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
138	B−Ⅰ(i−6)					○
139	C−Ⅰ(l−2)					○
140	表採					
141	C−Ⅱ(k−7)					○
142	C−Ⅰ(m−2)				○	
143	B−Ⅰ(b−1)					○
144	C−Ⅱ(k−6)					○
145	C−Ⅰ(k−4)					○
146	C−Ⅰ(l−2)				○	
147	B−Ⅰ(l−3)					○
148	B−Ⅲ(g−4)				○	
149	B−Ⅰ(i−4)					○
150	C−Ⅱ(m−7)				○	
151	C−Ⅰ(l−3)					○
152	B−Ⅰ(b−2)					○
153	C−Ⅱ(O−6)				○	
154	D−Ⅱ(p−7)				○	
155	B−Ⅱ(b−4)					○
156	C−Ⅰ(n−1)					○
157	C−Ⅰ(O−4)				○	
158	B−Ⅰ(i−4)					○
159	C−Ⅰ(k−5)					○
160	C−Ⅰ(l−5)					○
161	C−Ⅱ(k−6)					○
162	C−Ⅰ(k−1)					○
163	B−Ⅰ(g−3)				○	
164	C−Ⅰ(l−4)					○

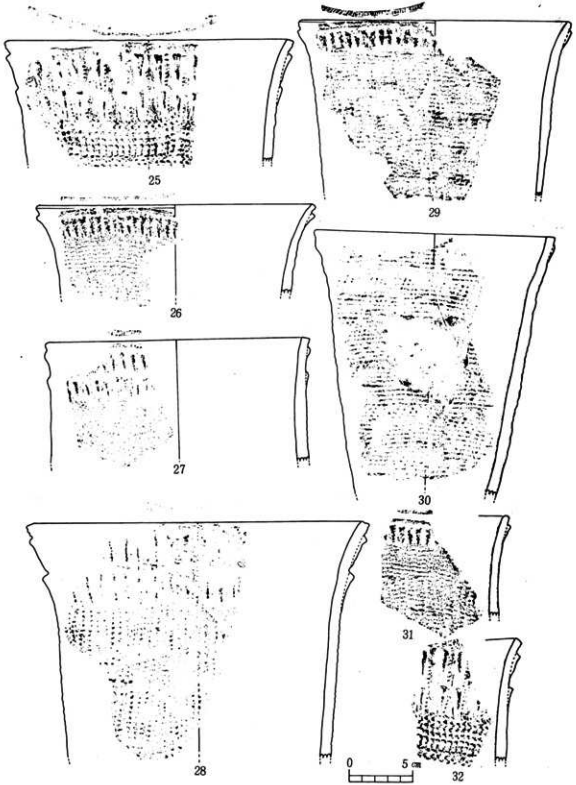
表4　吉田式土器出土区・層一覧表



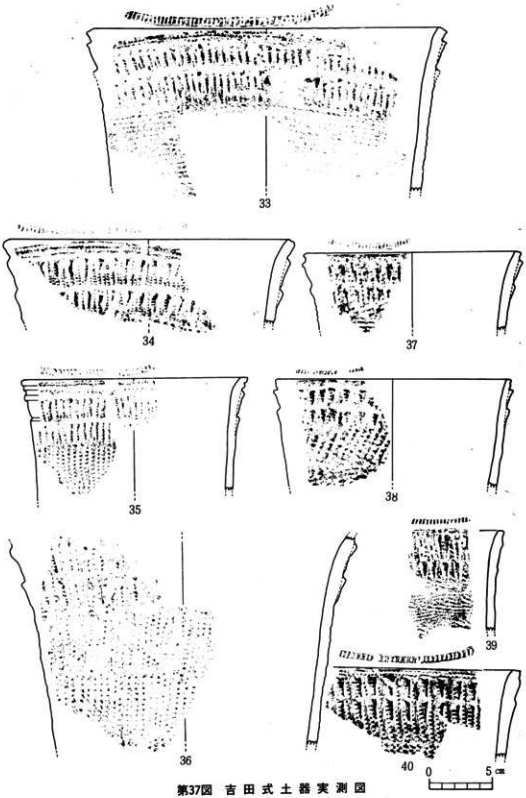
第34図　吉田式土器実測図



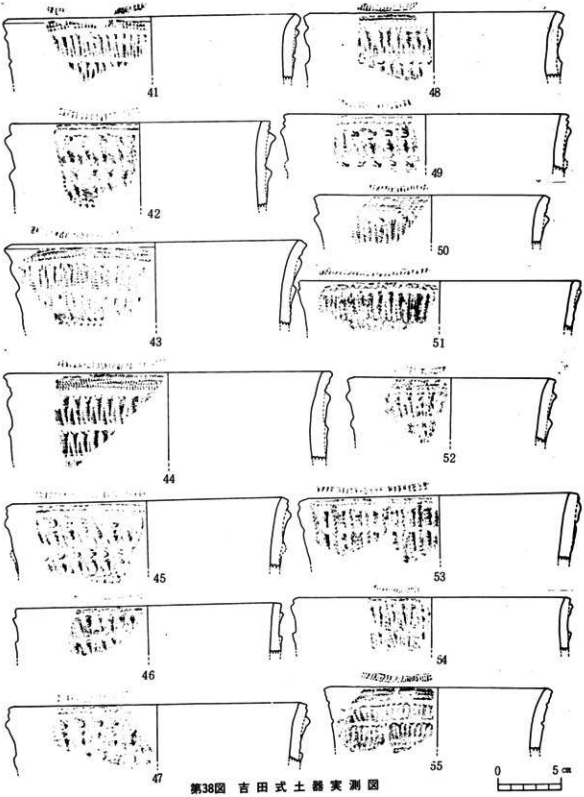
第35図 吉田式土器実測図



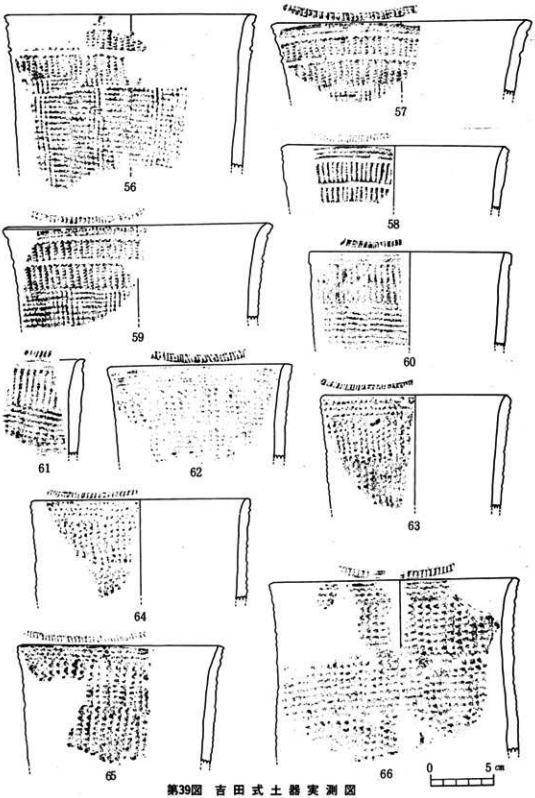
第36図　吉田式土器実測図



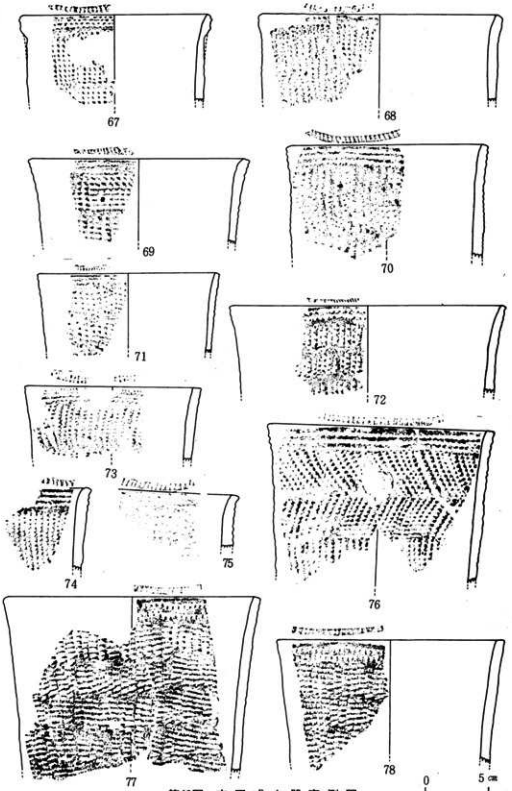
第37図 吉田式土器実測図



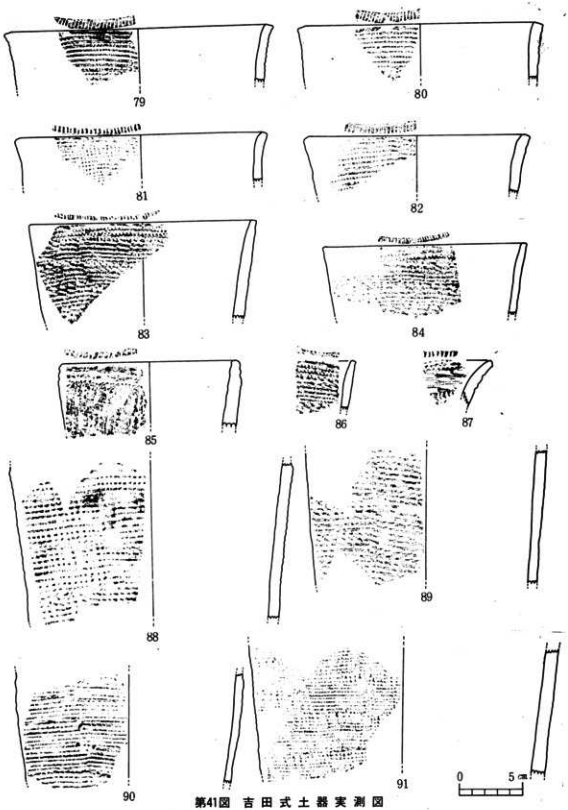
第38図 吉田式土器実測図



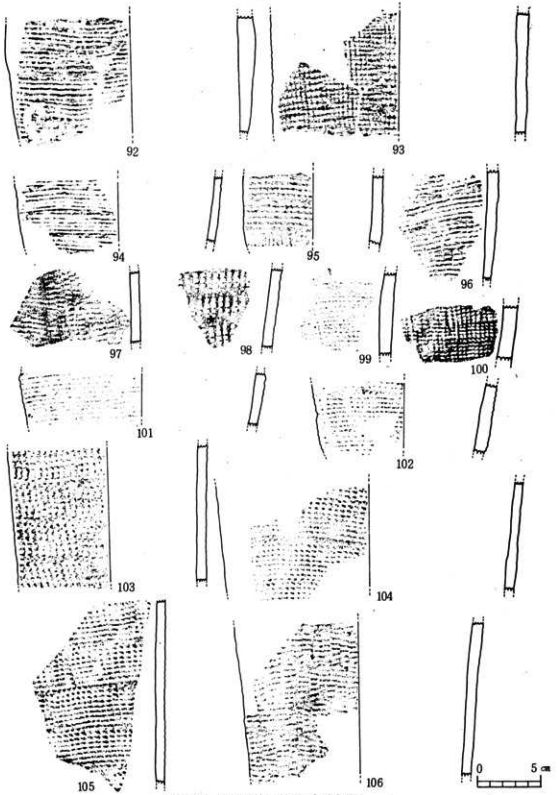
第39図 吉田式土器実測図



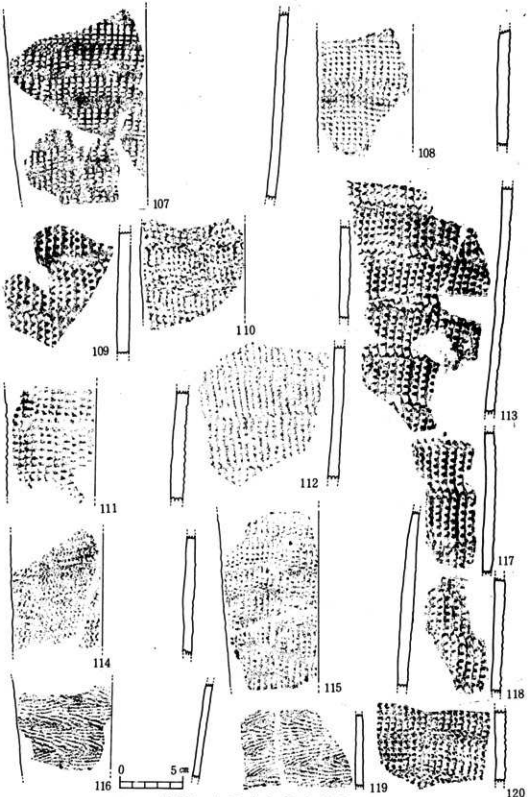
第40図 吉田式土器実測図



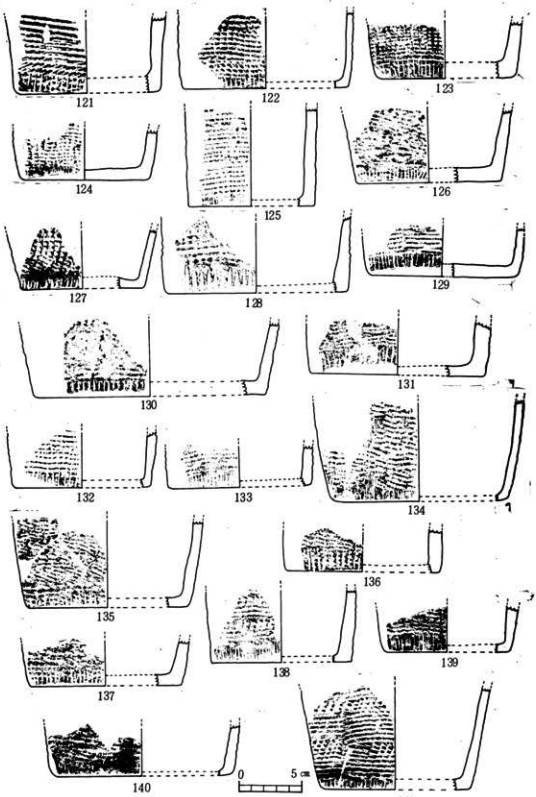
第41図 吉田式土器実測図



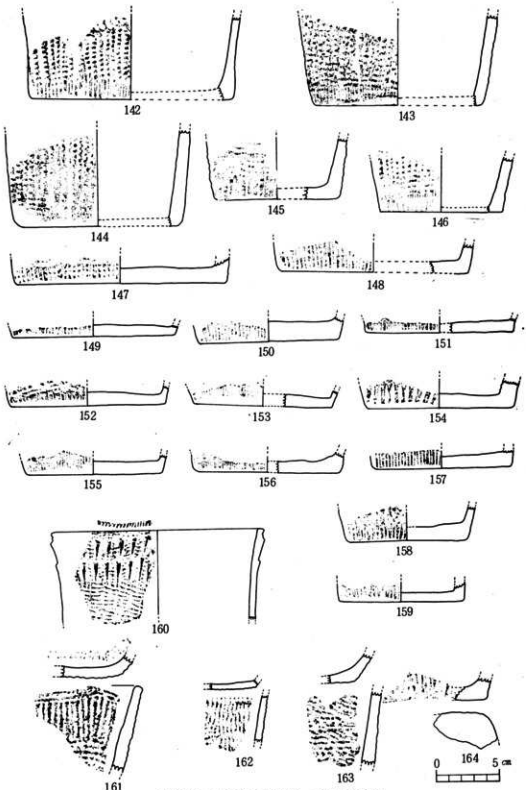
第42図　吉田式土器実測図



第43図　吉田式土器実測図



第44図　吉田式土器（底部）実測図



第45図　吉田式土器（底部・角筒）実測図

(3前平式土器（第46図・図版14）

第46図 165～ 173の９点の土器である。

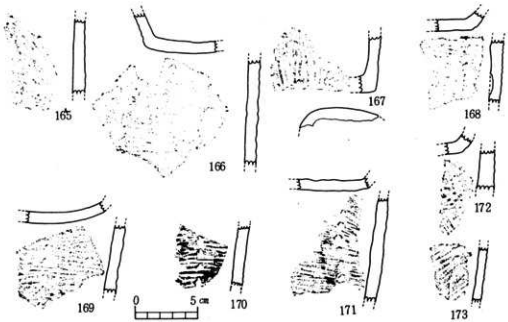
前平式土器は，前平遺跡（鹿児島市吉野町）出土の土器を標式として名付けられた。器形は円筒形平底と，角筒土器の２種類で，吉田式土器との文様の差異は前平式土器は貝殻条痕文の上に，さらに刺突文・条痕文を重ねて施文するところにある。本遺跡出土の前平式はV層中より出土し，いずれも角筒土器片である。 166は胴部で，貝殻条痕を横位または斜位に施したのち，縦位にヘラ状工具で刺突し連点文を重ねる。内面は研磨がなく，色調は茶褐色を呈する。

168～171も同様である。 173は連点文の末端に貝殻縁で放射状の押圧文を施す。

165,172は斜位の貝殻条痕文が施されたもので，明るい茶褐色を呈する。167は底部である。底部外側はヘラ刻目に変わり貝殻縁の粗い条痕が縦位に施されている。

番号	出土区	層位				
		I	II	III	IV	V
165	B－I (g－2)					○
166	C－II (k－4)					○
167	C－I (p－3)		○			
168	C－I (n－1)					○
169	C－II (l－7)					○
170	C－I (m－3)					○
171	C－I (l－4)					○
172	B－II (i－7)				○	
173						

表５　前平式土器出土区・層一覧表



第 46 図 前平式土器実測図

(4)円筒形土器（第47図 174・図版14）

口径27.4cm，高さ33.4cm，底径10.7cmを測る円筒形平底の土器である。

内外面ともヘラ磨きで仕上げるが，外面は剝離が著しい。器厚は 1.5cm底部は１cmと厚い。口縁部は蒲鉾状に丸味を帯び，わずかに波状となる。文様は口縁部に13条～14条の貝殻縁による条痕文を横位に施文する。

施文には放射助７条の施文原体を用い，口縁部に左より右へ引いて，７条の溝と６条の隆起線を廻らす。ついで，同一施文原体を用い，下位の隆起線に沿って横位に施文する。

施文の最初は，やや力が加わることと，中休みするために原体の貝殻縁の圧痕（第47図のうち平行とならない部分）が残る。現存する土器片でみると，上，下位のいずれも同一位置で息続ぎするもの２個所，下位だけのもの２個所が観察できる。その長さは最長15.2cm，最短13.1cmである。胎土は砂粒を含み粗いが焼成は良い。

器外面は，口縁部に媒が付着していることから煮沸に使用したものと思われる。

底部は中心部がやや窪み，上げ底状を呈する。接合された土器片の出土区は表示するとおりである。D－Ⅰ（r－4）区を主体にD－Ⅰ（q－3）区，E－Ⅰ（q－2）区に広がり，その距離は約６m に達する。出土層はⅣ層である。

出　土　区	層	出　土　区	層	出　土　区	層
D－Ⅰ（r－4）	Ⅳ	D－Ⅰ（q－3）	Ⅲ	D－Ⅰ（r－4）	Ⅳ
〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	C－Ⅰ（O－3）	〃	〃	〃
〃	〃	D－Ⅰ（r－3）	〃	〃	〃
〃	〃	D－Ⅰ（q－3）	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	D－Ⅰ（p－4）	Ⅲ
〃	〃	E－Ⅰ（q－2）	Ⅳ	D－Ⅰ（q－3）	〃
〃	〃	D－Ⅰ（p－4）	Ⅲ	D－Ⅰ（q－3）	〃
〃	〃	D－Ⅰ（q－2）	Ⅳ		

表6　円筒形土器出土区・層一覧表

(5)押型文土器（第47図 175，176・図版14）

押型文土器は楕円形押型文１点，山形押型文１点が出土した。

楕円押形文はD－Ⅱ（s－7）区Ⅲ層に出土した。3㎜×２㎜の楕円形押形文を器面全体に施施文している。色調は茶褐色を呈する。

山形押形文はD－Ⅰ（r－3）区Ⅲ層に出土した。やや外反する口縁部付近の破片である。器面には山形押形文を縦位に施文する。

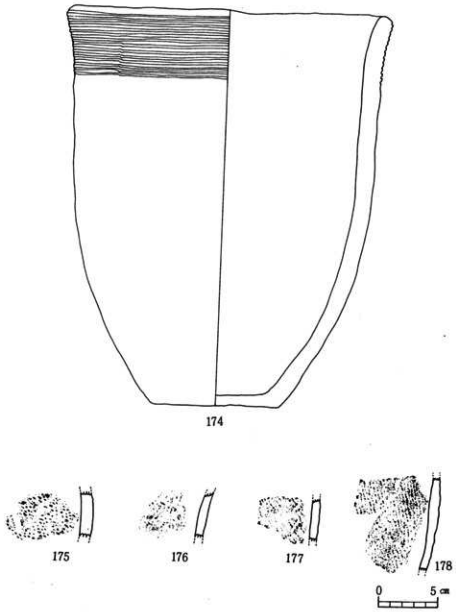
文様の単位は 1.8cmである。

(6平栫式土器（第47図・図版14)

平栫式土器は平栫貝塚（国分市）出土の土器を標式として名付けられた。

本遺跡では２点出土した。177はＤ－Ⅰ（ｔ－５）区Ⅲ層，178はＤ－Ⅰ（Ｓ－４）区Ⅳ層に出土した。器面には斜行する撚糸文を施している。

色調は茶褐色を呈し，胎土はわずかに砂粒を含み焼成は良い。



第47図　円筒形土器・押形文土器・平栫式土器 実測図

(7)塞ノ神 Aa式土器（第48図～53図・図版15～17

第48図 179～第53図 245までが塞ノ神 Aa 式土器である。

塞ノ神式土器は塞ノ神遺跡（大口市塞ノ神）出土の土器を標式にされたもので，その後河口貞徳氏により四型式，すなわち Aa 式，Ab 式，Bc 式，Bd 式に分類され，Aa 式→ Bd 式に系列づけられた。

このうち塞ノ神 Aa 式土器はややふくらみのある円筒形の胴部にラッパ状に開いた口縁部が付く器形を呈し，底部はやや上げ底気味の平底である。また口縁部と胴部のさかいには明瞭な稜線を形成する。文様は口縁部には幾何学沈線文，胴部には撚糸文，綱目文を施文し，口縁部と胴部とのさかいには連点文を廻らすものである。

本遺跡における塞ノ神 Aa 式土器はⅣ層中を中心に，若干Ⅲに出土する。

第48図 179は胴部下位から，底部を欠くものである。復元口径49.4cmを測る大形の土器である。器形はややふくらみのある径36cmの円筒形の胴部が立ち上り，ラッパ状に外反した口縁部が付き，口唇部は平担となる。外面の屈曲部は明瞭でないが，内面の口縁部と胴部の接点は明瞭な稜線を形成する。

口唇部端に刻目を有する。口縁部の文様は口唇部に近いところに4条の沈線文を横位に平行に廻らしたのち，5条の沈線文を縦位から描き，鉛角な角をもって胴部接点に向け直線をもって斜位に引き，口縁部と胴部のさかい目付近で再び縦位の沈線文にかわる。

この沈線文の間には5条の山形沈線を縦位に連続する。口縁部と胴部のさかい目には，3条の平行沈線文を横位に廻らした下位に，刺突連点文を1条廻らす。
胴部の文様は，胴部中位に廻らした5条の平行沈線文の上位に一条の刺突連点文を廻らす。

これらの文様帯と口縁部と胴部のさかいの間には，30～40本，幅7～10cmをもって縦位に撚糸文を施す。器面は内外ともていねいなヘラ磨き仕上げである。色調は茶褐色を呈するが，器外面には煤が付着する。口縁部には外面より，内面に向けて2個の穿孔がある。

第49図 180～第52図 212までは口縁部である。このうち 180～ 202は連点文，平行沈線文による幾何学文様は共通するが，口縁部が屈曲する部分には，この稜線上に1列の刻目を施すものである。この稜線は口縁部上位が一般的である。なお 185， 187は屈曲しないが，稜線上に刻目を施すという技法が名残り，刻目を施している。色調は黒褐色ないし茶褐色を呈する。

第52図213～第53図232までは胴部片の集成である。このうち213～224は撚糸文，225～233～までは綱目文の文様を有するものである。幾何学的な平行沈線文と撚糸文の施文順は，沈線文間に撚糸文が残存すること，沈線文と撚糸文の接点は，撚糸文に乱れが生じていること等から，器面に撚糸文を施したのち，幾何学文及び，刺突連点文を施したことがうかがえる。

番号	出土区	層位				
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
179						
180	C－Ⅲ(m－11)				○	

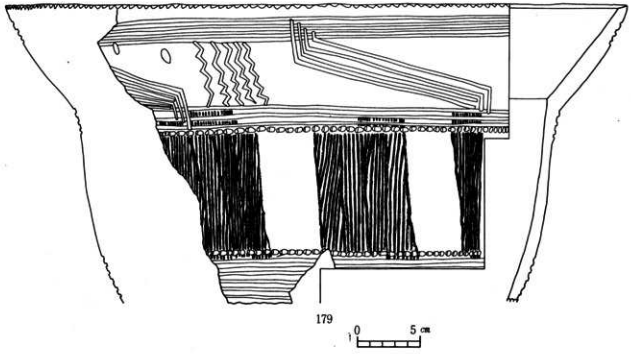
番号	出土区	層位				
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
181	C－Ⅰ(k－2)				○	
182	B－Ⅱ(b－10)				○	

表7　塞ノ神 Aa 式出土区・層一覧表

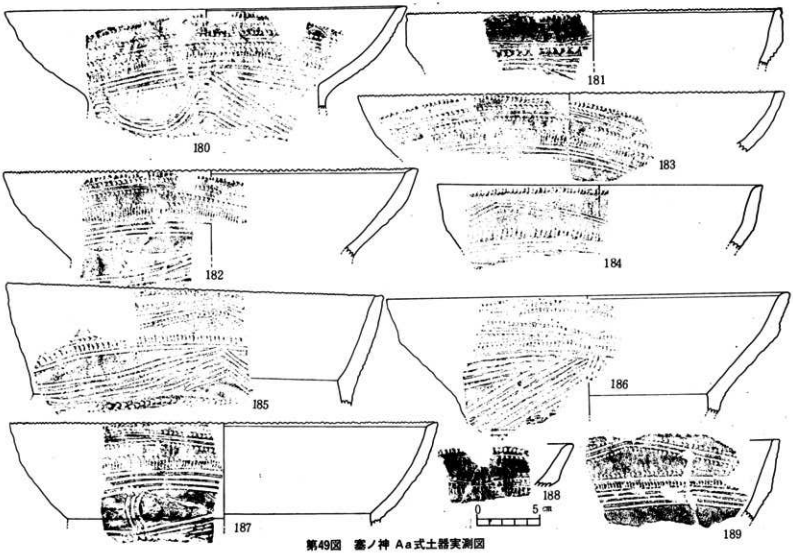
番号	出土区	層位				
		I	II	III	IV	V
183	C−Ⅲ(O−13)				○	
184	A−Ⅲ(1−13)				○	
185	C−Ⅱ(m−10)				○	
186	C−Ⅱ(O−6)				○	
187	B−Ⅱ(g−8)				○	
188						
189	C−Ⅰ(1−3)			○		
190	C−Ⅱ(1−6)				○	
191	C−Ⅱ(O−7)				○	
192	C−Ⅱ(k−8)				○	
193	B−Ⅱ(h−6)				○	
194	C−Ⅲ(m−11)				○	
195	C−Ⅱ(O−10)				○	
196	B−Ⅰ(i−3)					○
197	B−Ⅰ(i−5)				○	
198	B−Ⅰ(g−5)				○	
199	B−Ⅰ(g−4)				○	
200	C−Ⅰ(r−4)				○	
201	B−Ⅰ(g−4)				○	
202	C−Ⅰ(m−5)				○	
203	C−Ⅱ(m−15)				○	
204	B−Ⅰ(1−6)				○	
205	B−Ⅰ(g−2)				○	
206						
207	B−Ⅱ(h−4)				○	
208	C−Ⅱ(1−7)				○	
209	C−Ⅱ(O−8)				○	
210	C−Ⅱ(1−6)				○	
211	B−Ⅰ(i−4)				○	
212	C−Ⅰ(1−3)			○		
213	C−Ⅱ(1−9)				○	
214	A−Ⅱ(1−8)				○	

番号	出土区	層位				
		I	II	III	IV	V
215	B−Ⅱ(b−8)				○	
216	B−Ⅰ(i−3)				○	
217	C−Ⅰ(O−4)			○		
218	B−Ⅰ(i−4)				○	
219						
220	D−Ⅱ(i−15)			○		
221	C−Ⅲ(g−15)			○		
222	C−Ⅱ(m−15)				○	
223						
224	B−Ⅰ(i−3)				○	
225	B−Ⅱ(b−8)					○
226	D−Ⅱ(g−13)				○	
227	D−Ⅲ(i−11)				○	
228	C−Ⅱ(1−8)				○	
229	C−Ⅱ(　　)				○	
230	C−Ⅱ(O−9)			○		
231	D−Ⅲ(i−11)				○	
232	D−Ⅱ(g−10)				○	
233	B−Ⅱ(b−8)				○	
234	B−Ⅱ(b−8)				○	
235	B−Ⅲ(i−15)			○		
236	D−Ⅱ(p−10)				○	
237	B−Ⅱ(b−8)					○
238	B−Ⅲ(i−13)				○	
239	D−Ⅲ(g−4)				○	
240	A−Ⅱ(1−8)				○	
241	B−Ⅲ(b−13)				○	
242	B−Ⅰ(h−5)				○	
243	D−Ⅰ(h−3)				○	
244	A−Ⅰ(1−5)			○		
245	C−Ⅰ(1−4)				○	

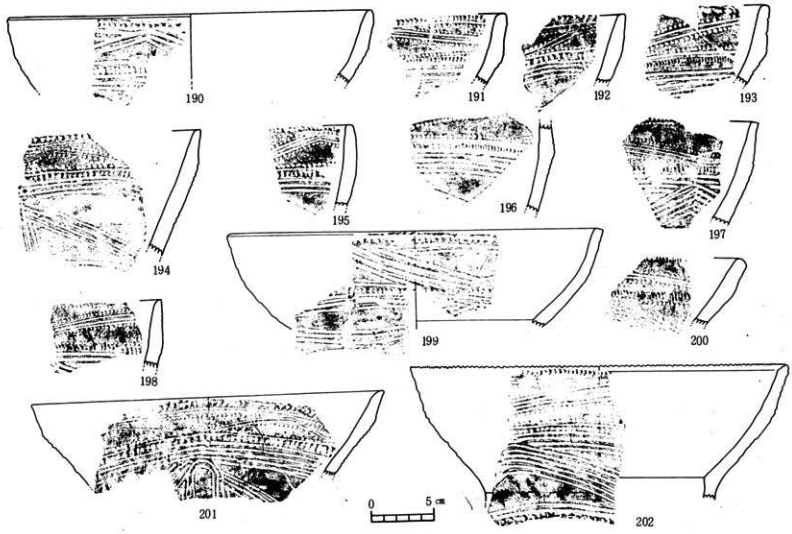
表8　塞ノ神 Aa 式土器出土区・層一覧表



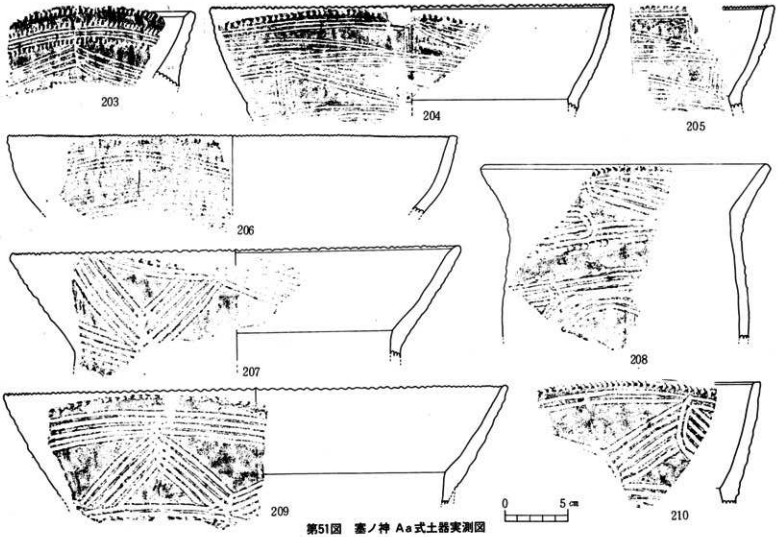
第48図　塞ノ神 Aa 式土器実測図



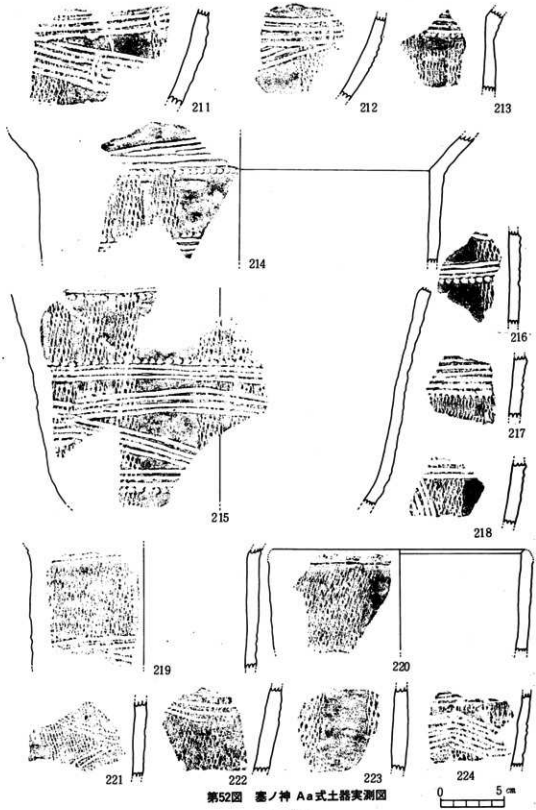
第49図　塞ノ神 Aa式土器実測図



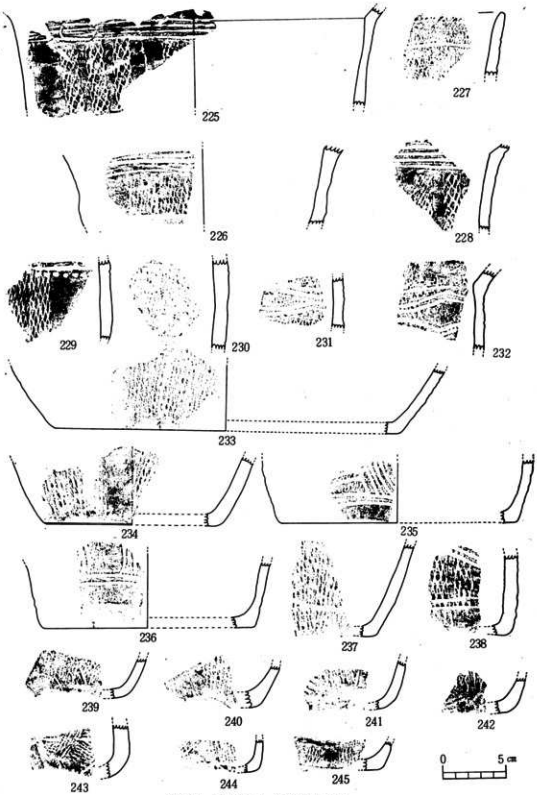
第50図　塞ノ神式 Aa式土器実測図



第51図　塞ノ神 Aa式土器実測図



第52図　塞ノ神 Aa式土器実測図



第53図　塞ノ神 Aa（底部）実測図

第53図226～232は綱目文を施すものであり，撚糸文同様に綱目文を施したのち幾何学文様を施文する。

第53図233～245は底部である。底部はやや上底気味の平底と，平底があり，底部端が丸味をおびたもの，明瞭に区分できるものなどがある。文様は底部際まで撚糸文等を施文するものや，底部よりやや上位に横位の沈線文で区画するもの等である。

(8)塞ノ神 Ab式土器（第54～58図・図版18～21）

塞ノ神Ab式は塞ノ神Aa式に続く型式のもので，器形の変化は稜線が不明確になること，文様はヘラ描きの幾何学文的な区画を施文し，この区画内に撚糸文系の文様を回転押捺すること等が塞ノ神Aa式との相違として挙げられる。

第54図 246は復元口径39.6cmを測る。円筒状の胴部からやや内湾しながら開く口縁部となる口唇部は内面を調整するが平坦とならず舌状を呈する。文様はこの口唇部外側に刻目を施し，口唇部上位には2条の平行沈線文をはさみ刺突連点文を横位に施文する。さらに4条の平行沈線文と，5条の山形連続の幾何学的文様を施す。平行沈線文の最上位の沈線文には更に縦位の刻目を施す。この刻目はAa式土器のうち肥厚して屈曲する部位に施す刻目と同一の技法である。胴部と口縁部のさかいには連点文が1条廻る。胴部には，ヘラ描きの平行な沈線文によって区画された区画内に撚糸文様を回転押捺している。口縁部と胴部のさかいは稜はみられない，色調は茶褐色を呈し，胴部に煤が付着している。 247は復元口径45.1cmを測る。口縁部と胴部のさかいはより一層なめらかとなる。口縁部の文様は口唇部の刻目，3条の平行沈線文のほか，区画内に撚糸文を施文する。胴部と口縁部のさかいは3条の平行沈線文をはさみ，上下に連点文を施文する。胴部には沈線に区画された撚糸文が幾何学的に施文されている。色調は茶褐色を呈するが，煤のため黒く変色する。248～253は口縁部である。文様は数条の平行沈線文による文様構成をもつもの（250，251）と区画内に撚糸文を回転押捺するもの（248，249，252）に類別できる。 251を除き器面には煤が付着する。胎土はいずれも砂粒を含むが焼成は良く，ヘラ磨きの仕上げである。

第56図 254～第58図 296は胴部片の集成である。区画内における文様は撚糸文が綱目文に比較して圧倒的に多いことが注目される。器形は全体を欠くため明確にはできないが，254，258等わずかに胴の張るものが多い。内面の調整は底部近くになるに従い粗く，上面はていねいなヘラ磨きである。

第58図 297～ 303は底部である。

底部中央部がやや上底気味となり，底部端は丸味を帯びて胴部につながる。

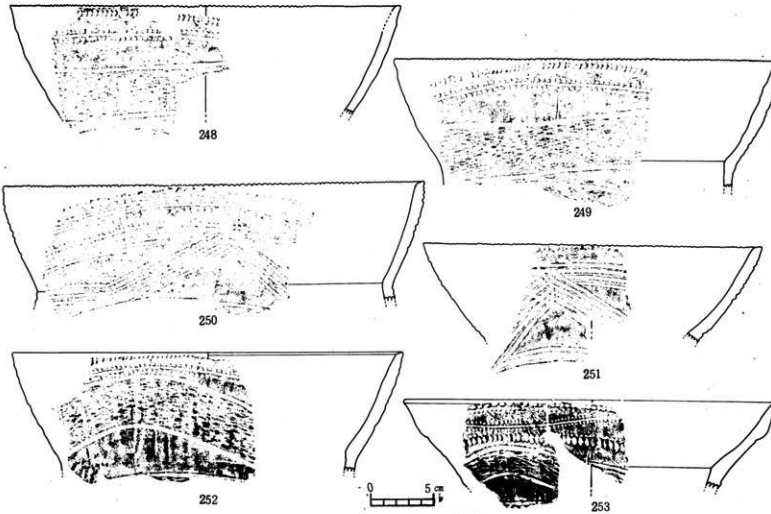
以上が塞ノ神Ab式である。出土層は表示するごとく，掲載した土器片のうち9点がⅡ，ⅢV層出土した以外45点はⅣ層出土で83.3%であることから中心はⅣ層であることは明確である。

番号	出土区	層位				
		I	II	III	IV	V
246	D−II (g−9)				○	
247	C−II (l−8)				○	
248	C−II (l−8)				○	
249	C−I (m−1)				○	
250	C−II (l−8)				○	
251	A−III (l−13)			○		
252	A−III (l−14)		○			
253	B−I (i−2)				○	
254	D−III (i−13)				○	
255	C−II (k−5)				○	
266	B−II (h−7)				○	
257	B−I (g−2)			○		
258	B−I (g−3)				○	
259	B−I (b−4)				○	
260	C−I (k−4)			○		
261	D−III (i−15)				○	
262	D−I (h−3)				○	
263	B−I (b−3)				○	
264	A−II (l−10)				○	
265	C−I (m−5)					○
266	B−II (p−13)				○	
267	C−III (m−10)				○	
268	C−III (m−5)				○	
269	C−II (l−8)				○	
270	C−II (l−8)				○	
271	C−II (n−15)		○			
272	D−II (g−9)				○	
273	C−II (m−6)				○	
274	C−II (l−9)				○	

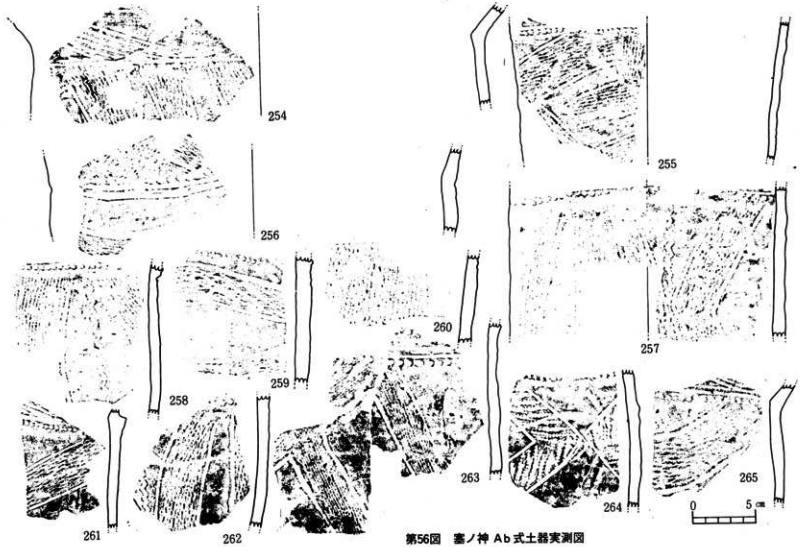
番号	出土区	層位				
		I	II	III	IV	V
275	C−I (m−5)				○	
276	B−I (b−2)				○	
277	A−III (c−13)				○	
278	C−III (n−14)				○	
279						
280	B−II (l−7)				○	
281	C−II (n−8)				○	
282	D−I (g−9)				○	
283	C−II (k−6)				○	
284	C−II (m−9)				○	○
285	B−I (a−2)				○	
286	A−II (l−7)				○	
287	D−II (g−9)				○	
288	P−III (b−11)				○	
289	B−I (l−4)				○	
290	B−I (g−4)				○	
291	C−I (l−4)					○
292	B−I (g−4)				○	
293	C−III (m−15)				○	
294	B−I (l−5)				○	
295	B−I (g−4)				○	
296	B−I (g−4)				○	
297	B−I (g−5)				○	
298	B−I (g−2)				○	
299	B−I (g−2)			○		
300	C−II (l−8)				○	
301						
302						
303						

表9　塞ノ神 Ab 式土器出土区・層一覧表

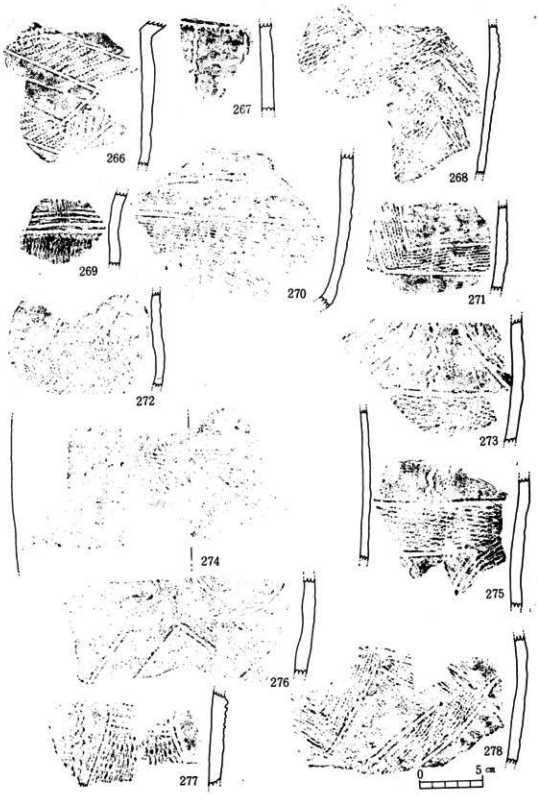
第54図　塞ノ神 Ab式土器実測図



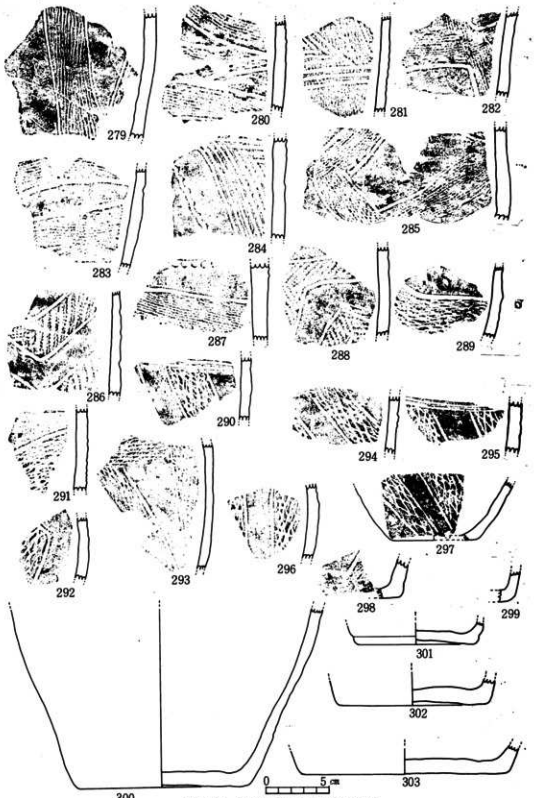
第55図　塞ノ神 Ab式土器実測図



第56図　峯ノ神 Ab式土器実測図



第57図　塞ノ神Ab式土器実測図



第58図　塞ノ神 Ab式(底部)実測図

(9)塞ノ神 Bd式・塞ノ神（無文）式土器（第57図・図版22）

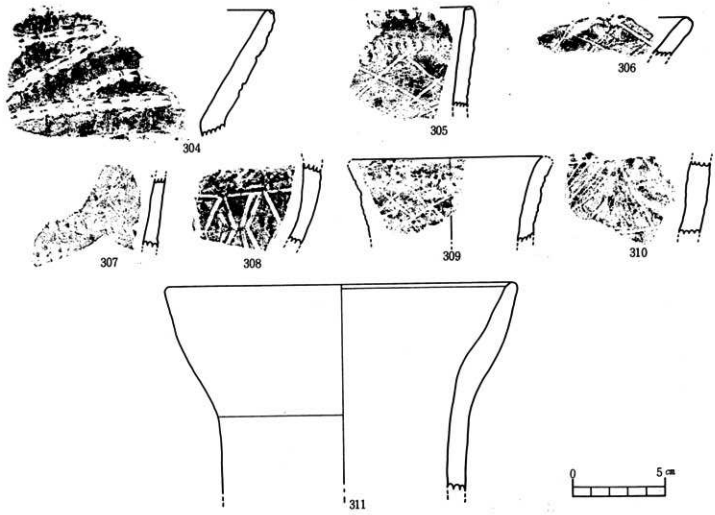
第59図 304～ 310が塞ノ神 Bd 式である。

塞ノ神 Bd 式土器は本遺跡では７点出土し，いずれも小片で全体の形状は把握できない。

304は口縁部で口唇部には刻目を施し，口縁部には貝殻縁による刺突連点文を施す。内面には口縁部と胴部に稜線がある。胎土は砂粒，雲母を多く含み粗いが焼成は良い。内面はヘラ磨きである。色調は茶褐色を呈し，口縁部には媒が付着する。 305は貝殻縁による刺突連点文の下位に，ヘラ描きの菱形格子文を施文する。 306は口唇部直下からヘラ描き菱形格子文を施文する。 307～ 309も同様である。 309は復元口径11.2cmを測り，口縁部は短かくわずかに外反する。口唇部に刻目はなく貝殻縁の刺突連点文，菱形格子文は粗い。胎土及び器面調整は粗雑である。 310はヘラ描き文とヘラ描きによって区画された空間に撚糸文を施文するもので，本遺跡では１点出土した。

以上塞ノ神 Bd 式は 304の接合した１点のV層を除きすべてⅣ層出土である。

311は口径19cmを測る無文の塞ノ神式土器である。円筒状の胴部からやや内湾しながらラッパ状に開く口縁部となり，口唇部は蒲鉾状となる。口縁部と胴部のさかいは内面でわずかな稜をもつ。色調は薄い茶褐色，胎土，焼成ともに良い。Ⅳ層に出土した。



第59図　塞ノ神 Bb式・塞ノ神(無文)式土器実測図

(10)新型式の土器（第60，61図・図版23）

第60図 312～第61図 348までの土器である。

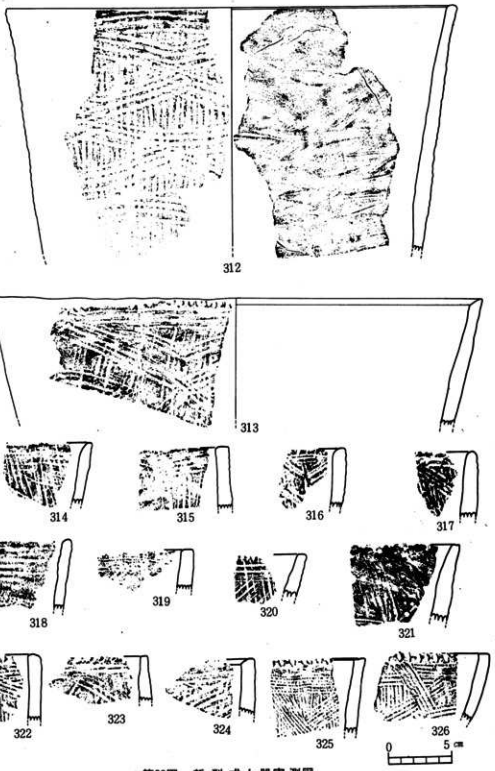
器形は円筒形を呈し，口唇部は平坦となるもの（312，315～317，319，320，322，325，326）と，内面の整形により舌状を呈するもの（313），蒲鉾状を呈するもの（321，323，324）があり，刻目をもつもの（320～323，324～326）。刻目を有しないものがある。

このうち 312は復元口径35.5cmを測る。文様は貝殻縁により口縁部から胴部下位にかけて施文し，重ねて4条の貝殻縁を用い塞ノ神Aa式等にみられる幾何学文を描く。しかしこの文様は曲線化し，正端さはない。文様は胴部下位には至らない。内面及び胴部下位には貝殻条痕がみられる。313は口唇部に刻目をもち，文様の技法は312と同様であるが，粗雑である。他の土器片基本的な技法は同一であるが，重ねた平行の条痕は名残りとしてとどまるのみで，規則性を失なっている。胴部下位は第61図342～340にみるように貝殻条痕のみである。出土層は表示したが，Ⅱ層11.0%，Ⅲ層36.0%，Ⅳ層59.0%となり他の塞ノ神式土器にみられる安定したⅣ層の出土は示さない。この様な土器は類がなく新型式の土器と考えられる。

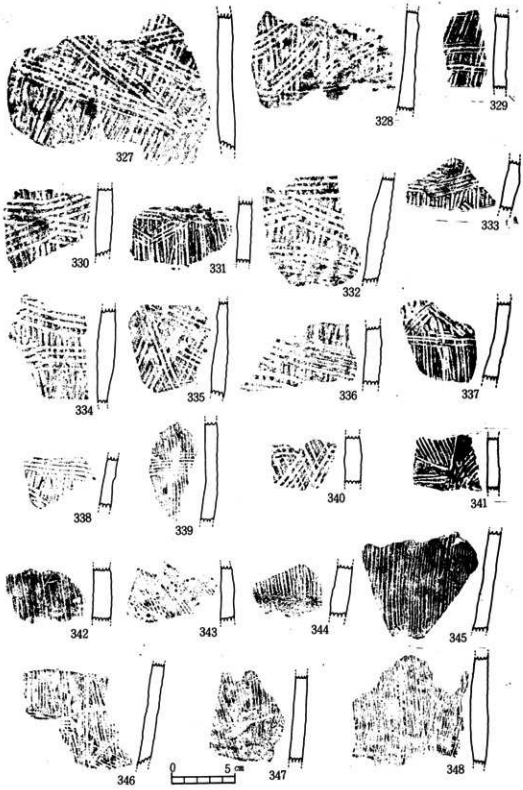
番号	出土区	層位				
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
304	B－Ⅱ(b－7)				○	
305	C－Ⅲ(k－15)		○			
306	C－Ⅲ(n－10)				○	
307	C－Ⅲ(n－11)				○	
308	A－Ⅲ(1－13)			○		
309	B－Ⅲ(b－11)				○	
310	C－Ⅲ(1－15)			○		
311	C－Ⅱ(O－10			○		
312	A－Ⅱ(1－9)				○	
313	D－Ⅲ(g－11)				○	
314	C－Ⅲ(k－12)				○	
315	D－Ⅲ(p－14)			○		
316	B－Ⅱ(i－7)			○		
317	C－Ⅳ(O－16		○			
318	C－Ⅲ(1－11)				○	
319	D－Ⅲ(g－12)			○		
320	C－Ⅲ(n－12)				○	
321	C－Ⅲ(n－12)				○	
322	B－Ⅲ(i－15)			○		

番号	出土区	層位				
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
323	B－Ⅲ(b－4)				○	
324	C－Ⅱ(h－11)				○	
325	C－Ⅱ(1－9)				○	
326	B－Ⅱ(b－7)				○	
327	A－Ⅱ(1－7)				○	
328	B－Ⅲ(i－15)			○		
329	A－Ⅲ(C－1)			○		
330	C－Ⅰ(a－12)				○	
331	D－Ⅲ(p－15)			○		
332	A－Ⅱ(1－7)				○	
333	C－Ⅱ(m－7)				○	
334	C－Ⅲ(n－13)			○		
335	B－Ⅱ(i－10)			○		
336	C－Ⅱ(b－12)		○			
337	C－Ⅱ(1－7)		○			
338	D－Ⅲ(i－12)			○		
339	C－Ⅲ(O－15)					○
340	B－Ⅰ(i－1)				○	

表10　塞ノ神系土器出土区・層一覧表



第60図　新型式土器実測図



第61図 新型式系土器実測図

(11)轟式土器（第62・図版24）

第62図349，350の土器である。349は復元口径29cmを測る。地文には貝殻条痕を施し，口縁直下に7条の凸帯を貼り付ける。凸帯先端部は尖る。この凸帯は粘土ひもないし粘土帯を貼り付けヘラ状工具で調整したもので，いわゆるミミズばれ状を呈す。内面は横位に貝殻条痕がみられ茶褐色を呈する。外面は煤が多量に付着し黒色を呈する。胎土は砂粒を含むが焼成は良い。351も同様である。ともにB－Ⅱ（j－12）区Ⅲ層に出土した。

(12)深浦式土器（第62図・図版24）

第62図351～360の土器である。351～355までは口縁部，以下は胴部片である。口縁部は舌状となり，器面には放射状のみみずばれ状凸帯を貼り付け，その空間にはヘラ状工具により細い沈線文を施している。354はこの放射状凸帯がみえず沈線が縦位に交叉する。355の凸帯は刻目凸帯である。器形は胴部以下が欠落するため全体の形状は不明であるが，口縁部はやや内湾気味に立上っている。これに比較して356，359は外気味であることから，口縁部は外反する器形である。器内面は研磨されたもの（351～355）と，貝殻縁に調整したもの（356～360）とがある。出土層位は356，357，360はⅣ層，他はⅢ層より出土した。

(13)その他の縄文器（第62図～64図・図版24～25）

第62図361～365は器面にヘラ状工具により・形文を施すものである。小片のため全体の形状は不明であるが，361～363直線的な口縁，364，365は外反する器形である。361は平坦な口唇部に刻目を施し，口縁直下には2列の・形文を施文する。内外面ともナデ調整で色調は黒色を呈する。362，363も361と同様である。364，365は外反する口縁部にヘラ描文，口縁部と胴部のさかいに横位のヘラ描沈線を描く。色調は黒色を呈し内外面ともナデ調整である

出土層は363のⅤ層上を除きⅣ層出土である。

第62図366，367は同一型式の土器である。366は復元口径26cmを測り円筒状を呈する。平坦な口唇部に連点文を廻らす。器面にはヘラ状工具により放射状の平行沈線文を施し，その沈線文間には貝殻縁による連点文を施す。しかしこの連点文は沈線文間すべてに施文するということでなく，放射状沈線の外区を埋め，中心部は施文せず文様効果を描き出している。

口縁内面には4条の粗い連点文を施す。器面はナデ調整を行うが粗い。色調は灰色を呈する。

367は貝殻条痕の地文に貝殻縁による連点文を重ねる。平坦な口唇部には刺突文を廻らし，口縁部内面には貝殻縁による5条の連点文を横位に廻らす。色調は茶褐色を呈し焼成は良い。

366，367は日木山式と称されるうちの連点文に属する。　層より出土した。

第62図368，369は春日式土器である。368は復元口径20cmを測る。口縁部はキャリパー形に内湾する。口縁部外側には細い波状文を描き，上下に刺突連点文を施す。369は粘土紐を貼付けたのち刻目を施す。内面は貝殻条痕が横位に施されている。器厚はいずれも薄く黒色ないし，黒褐色を呈する。Ⅲ層より出土した。

第63図 370～371，374，377～379は指宿式土器である。

370は復元口径35.5cmを測り，平坦な口唇部からやや内湾し，胴部がふくらむ器形である。器面には平行な4条の沈線文と渦文状の曲線文を組合せて描く。色調は茶褐色を呈し，器面はていねいなナデ仕上げである。371も同様な土器で沈線文は3条となり間隔は狭い。

377は山形隆起をもった沈鉢形土器で，器外面には2条の平行な曲線文が施されている。山形突起の内面には4条の沈線文が口唇部に向けて施されている。

374，378，379も同様に平行沈線文を施す土器である。

第63図372，373は岩崎上層式土器片である。

器面には貝殻条痕を施し，口唇部には刻目を施す。色調は黒褐色を呈している。

第63図375，376は形式明は不明の土器である。

口縁部下に波状の凸帯を有し，その凸帯内には貝殻縁で押圧している。色調は黒褐色ないし茶褐色を呈するものである。

第64図380～387は晩期の土器である。

380は復元口径21.7cmを測る。肩部で「く」字形を呈し口縁部はわずかに内側に傾斜する深鉢形土器である。口唇部は肥厚し，肩部は稜線をもつ，器内外面とも貝殻条痕が施されている。

381は380と同一個体と思われる胴部片である。いずれも黒色を呈し器面には蝶が付着するⅢ層より出土した。382は口径26cmを測る茶褐色の鉢形土器である。内湾して立上った器体はわずかな稜をさかいに外反し口唇部に至る。器厚は1cmを測る厚手の土器である。383は382同様な鉢形土器で胴部以下には席目圧痕がみられ，この部分から肥厚する。この席目圧痕の位置は382の稜線文とほぼ同一の位置にあたり，これ以下の器面全体に席目圧痕が施されている席目圧痕はやや斜位にあてがわれている。384，385も席目圧痕の土器片である。386は口縁部が肥厚した縄文時代晩期の土器片である。387は鉢形土器の口縁部である。

388は器面に貝殻条痕を施した薄手の土器で縄文時代後期該当の土器であろう。

389～398までは縄文式土器の底部である。

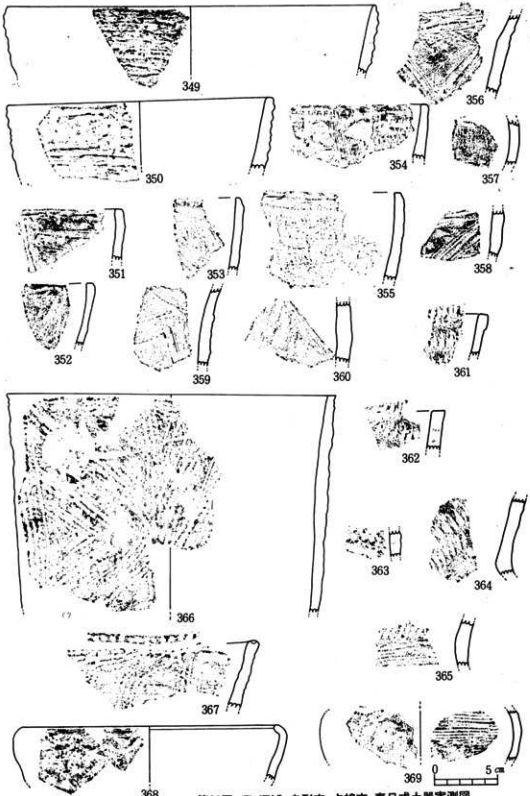
389，390は張り出した底部に外反する胴部が付く。底部はあじろ底となり，胴部の器面には縦位の貝殻条痕が施されている。あじろ底は縄文時代後期の岩崎式土器に付くことから後期の土器底部である。391～393はやや小ぶりの底部で，胴部はほぼ直線的に外反して立上る。器面には貝殻条痕の施文が縦位に施されている。

394，395はやや厚手で外に張り出した平底の底部であり，縄文時代黒川式に該当するものである。396～398も縄文時代該当の底部である。

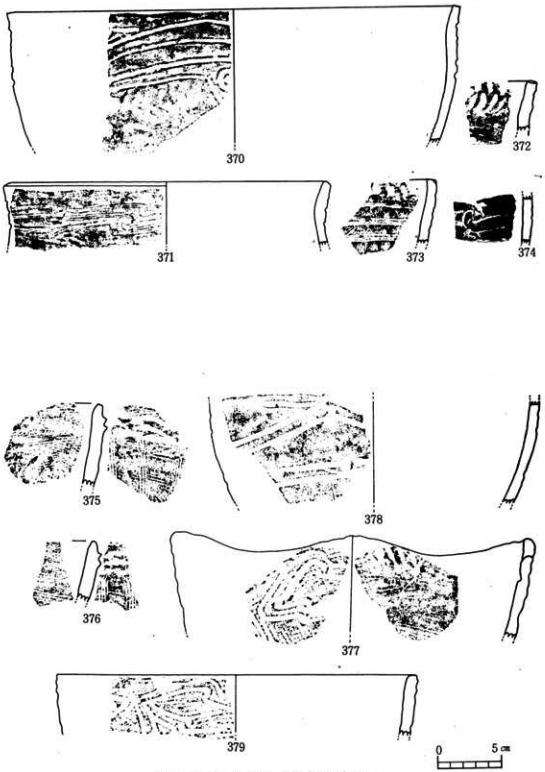
番号	出土区	型式名	層位 Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
349	B－Ⅱ(j－12)	轟式		○		
350	B－Ⅲ(j－13)	〃		○		
351	C－Ⅲ(n－13)	深浦式		○		

番号	出土区	型式名	層位 Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
352	D－Ⅰ(s－3)	深浦式		○		
353	D－Ⅰ(s－5)	〃		○		
354						

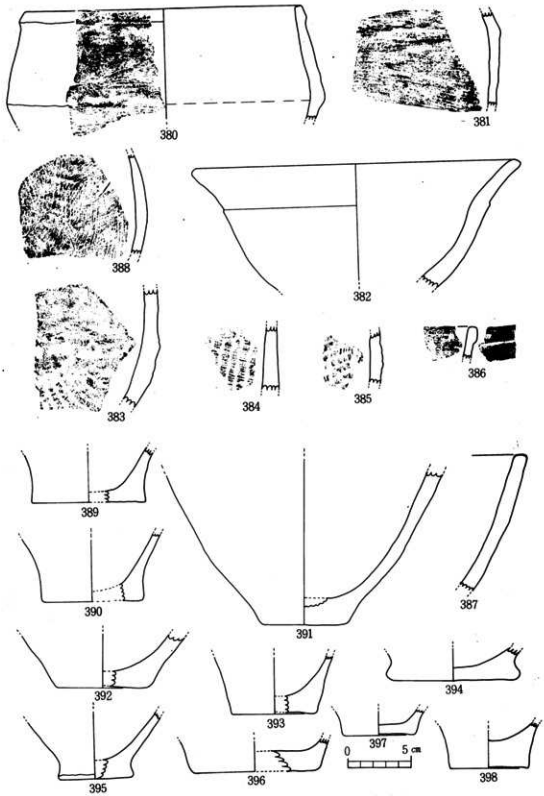
表11　その他縄文土器出土区・層一覧表



第62図　轟・深浦・舟形文・点線文・春日式土器実測図



第63図　岩崎式土器・宿指式土器実測図



第64図　縄文式土器（晩・後期）実測図

番号	出土区	型式名	層位			
			Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
355	D－Ⅰ(t－5)	深浦式		○		
356	C－Ⅳ(l－16)	〃			○	
357	D－Ⅲ(p－11)	〃			○	
358	D－Ⅱ(q－9)	〃		○		
359	B－Ⅱ(j－12)	〃		○		
360	D－Ⅱ(g－9)	〃			○	
361	B－Ⅱ(i－7)	ヘラ			○	
362	B－Ⅱ(h－8)	〃			○	
363	A－Ⅰ(e－2)	〃				○
364	A－Ⅱ(h－8)	〃			○	
365	B－Ⅱ(i－7)	〃			○	
366	B－Ⅲ(ピット)	点線文		○		
367		〃				
368	D－Ⅱ(q－9)	春日		○		
369	B－Ⅲ(g－12)	〃		○		
370	B－Ⅱ(h－4)	岩崎上層		○		
371	C－Ⅲ(m－12)	〃	○			
372	B－Ⅱ(i－8)	〃		○		
373	B－Ⅱ(f－9)	〃	○	○		
374	B－Ⅱ(j－6)	〃		○		
375	B－Ⅱ(i－9)	協和			○	
376	B－Ⅱ(i－10)	〃		○		

番号	出土区	型式名	層位			
			Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
377	C－Ⅲ(m－12)	指宿		○		
378	C－Ⅱ(k－6)	〃		○		
379	C－Ⅲ(m－11)	〃		○		
380	B－Ⅰ(f－5)	晩期		○		
381	B－Ⅱ(j－6)	〃		○		
382		〃				
383	B－Ⅲ(j－3)	〃		○		
384	D－Ⅰ(t－5)	〃		○		
385	C－Ⅱ(O－7)	〃	○			
386	B－Ⅱ(h－7)	〃				
387	B－Ⅰ(h－4)	〃		○		
388	D－Ⅱ(h－8)	後期		○		
389	B－Ⅱ(h－7)	底部		○		
390	B－Ⅱ(h－7)	〃		○		
391	B－Ⅱ(g－7)	〃		○		
392	D－Ⅱ(p－10)	〃		○		
393	B－Ⅲ(g－12)	〃		○	○	
394	C－Ⅱ(k－12)	〃			○	
395	D－Ⅱ(g－10)	〃		○		
396	(e－6)	〃		○		
397	B－Ⅴ(j－8)	〃		○		
398	D－Ⅱ(g－7)	〃			○	

表12　その他縄文式土器出土区・層一覧表

2　弥生式土器・土師器・紡錘車・土錘（第65，66図版26）

第65図399は復元口径37.3cmを測る甕形土器である。わずかに外反する口縁部と胴部のさかいには絡状凸帯を1条廻らす。器内面は縦位，内面は横位の刷毛目仕上げである。外面には煤が付着する。色調は茶褐色を呈し，胎土，焼成とも良い。400は口径23.4cmを測る。直口する口縁部をもつ。色調は茶褐色を呈し，口縁部には煤が付着する。

笹貫式土器該当の土器である。401は高坏脚部である。脚部でには4個所に透孔がある。402は中空の脚台で，胴部上位を欠く。茶褐色を呈する。403～405は甕，406～423までは坏類に属す。底部406～415まではヘラ切りのあと整形し，417，418，420，422は糸切底である。426，427は内黒土器で2点出土した。428～442までは皿である。これ等は底径に比較

して器高が低く，厚い底部から短かい口縁部が付き，糸切底であることが特徴である。このうち430，436，437は内面が黒色に変色することから灯明皿に使用されたものである。

番号	出土区	口径	器高	底径	器形	番号	出土区	口径	器高	底径	器形
399		37	19		甕	421	D.Ⅱ.D.3			8.0	坏
400		23.5	19.5	5.0	〃	422	B.Ⅲ.g.15.2			8.4	〃
401					高坏	423	C.Ⅲ.O.11.1				〃
402	B.Ⅰ.h.5.4			10	甕	424	B.Ⅱ.j.4.2			6.0	〃
403	B.Ⅱ.j.9.2			8.7	瓶	425	A.Ⅲ.d.15.1			6.5	〃
404	B.Ⅲ.h.11.5			8.8	〃	426	C.Ⅱ.n.8.2			8.0	内黒土器
405	D.Ⅰ.s.4.1			7.7	〃	427	O.Ⅱ.s.8	12.5			〃
406	C.Ⅱ.n.8.2			6.5	坏	428	C.Ⅱ.1.9.2	7.9	1.5	6.3	皿
407	B.Ⅱ.i.8.2			6.0	〃	429	C.Ⅲ.t.6.2	6.7	2.0	4.6	〃
408	B.Ⅲ.h.13.2			5.5	〃	430	D.Ⅰ.s.5.3	6.5	1.8	4.4	〃
409	C.Ⅱ.k.8.2			6.7	〃	431	A.Ⅲ.d.15.3	6.8	1.5	5.0	〃
410	B.Ⅱ.u.10.1			8.2	〃	432	D.Ⅱ.D.Ⅲ 大内	7.5	2.0	5.5	〃
411	A.Ⅲ.a.15.3			7.0	〃	433	A.Ⅲ.c.15.1			4.9	〃
412	C.Ⅱ.h.9.2			12.2	〃	434	A.Ⅲ.d.14.2	5.7	1.2	4.0	〃
413	C.Ⅳ.k.16.3			5.0	〃	435	B.Ⅲ.i.14.2	7.2	1.4	5.8	〃
414	B.Ⅲ.h.10.1			7.5	〃	436	B.Ⅲ.i.15.2	9.3	1.2	7.7	〃
415	B.Ⅲ.l.15.1			7.5	〃	437	B.Ⅲ.i.15.2	7.8	1.5	6.5	〃
416	C.Ⅱ.m.9.2	15.7			〃	438	D.Ⅱ.O.9.2	9.9	1.5	9.0	〃
417	B.Ⅳ.j.16.1	12.8	3.0	7.0	〃	439	A.Ⅲ.c.13.2	9.0	1.4	8.0	〃
418	A.Ⅲ.l.13.2			7.5	〃	440	D.Ⅲ.r.12.2	9.0	1.7	8.4	〃
419	B.Ⅲ.g.10.1	13.9	3		〃	441	C.Ⅱ.1.11.1	8.5	1.4	7.2	〃
420	B.Ⅲ.b.13.2	12.3	3.0	9.0	〃	442	B.Ⅲ.i.14.2	7.4	1.4	6.4	〃

表13　弥生式土器・土師器出土区・計測一覧表

443は復元径6.2cm，厚み0.8cmを測る土師質の紡錘車。444は長さ4.8cm，径1.4cmを測る細長の土錘である。

3　青　磁（第67，68図・図版27，28）

第67図445～第68図491までが青磁である。このうち445～485が碗，486～491までは皿である。445は復元口径16cmを測る削り出したしのぎ蓮弁をもつ。内外面には粗い貫入がはいる。446，448～452も削り出し蓮弁文を有するが，色調は450，451が薄い青色を呈するほかはくすんだ青色を呈する。447はヘラ描蓮弁文が描かれたものである。

453，455，456は退化した蓮弁文を描く。453，456は茶褐色を呈し453には貫入がはい

るものである。

457は碗の底部で蓮弁文は不規則にはいり，釉は高台内にはかからない。草色に近い青色を呈し貫入がはいる。竜泉窯系青磁である。

462は直口する口縁をもつ碗で，口縁部直下には一条の沈線が描かれている。内外とも貫入がいり，茶褐色を呈する。464は外反するもので，青色を呈し貫入は粗い。467は口縁部が外反し舌状にすぼまる。釉は良く溶けず釉溜りがみられ焼成は良くない。色調は白色に近い青色を呈する。475～485までは高台付の底部である。総釉は479，484のみで他は高台内及び畳付部には釉はかからない。486，488は口縁部で強く外反する段皿で釉は厚くかかり，内外面に粗い貫入がみられる。489～491稜化皿で口縁部内面には3条の波状文，見込みには沈線文が描かれている。釉は高台見込みにはかからず濁った青色を呈し，貫入は内外面ともにはいる。

4　白　磁（第68図・図版28）

492～499は白磁である。このうち492～495は口縁部がわずかに外反し舌状にすぼまる。口唇部には釉がかからないいわゆる口ハゲの白磁である。496～498は平底の白磁で，496，497は総釉，498の底面には釉はかからない。

5　染　付（第68図・図版28）

500は盤で見込内には草文を描く，高台には重焼き用の砂粒が付着する。502は万頭心の碗で見込みには草文，底面には「富貴長春」と描く。503は玉取獅子を見込みに描く。

505，506は，底を呈する染付で505は内面に2条の圏線文，見込みには文様を描く。506の外面には2条の圏線で連点を囲み下位にさらに1条の圏線を描く。釉は底部際より底部にかけかからない。

6　須恵器（第69，70図・図版29）

第69図507～第70図526までが須恵器である。

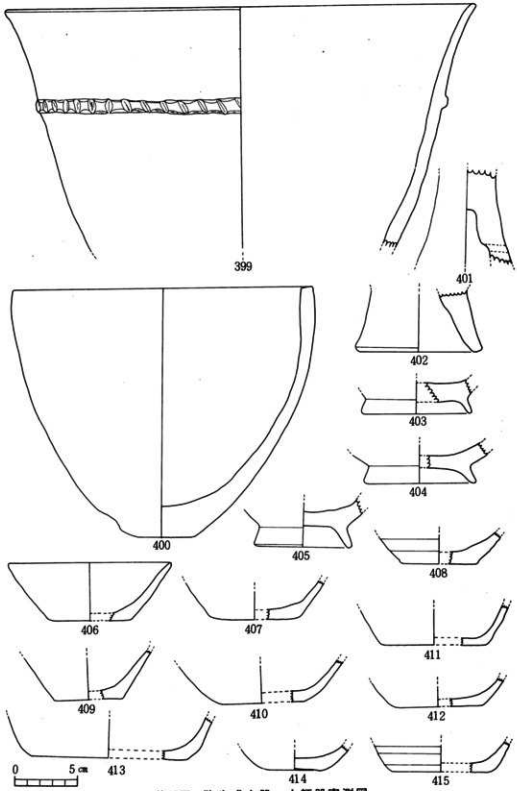
507は底部で灰色を呈し，軟質に焼上る。508以下は甕の胴部で外面には格子あるいは平行の叩き，内面には平行あるいは円弧の叩きが施されているものもある。

外面の叩きには4㎜×4㎜間隔のものが一般的である。508～512は灰色でやや軟質に焼上げる。516，517の器面には自然釉がかかる。518は器外面は黒色を呈する。

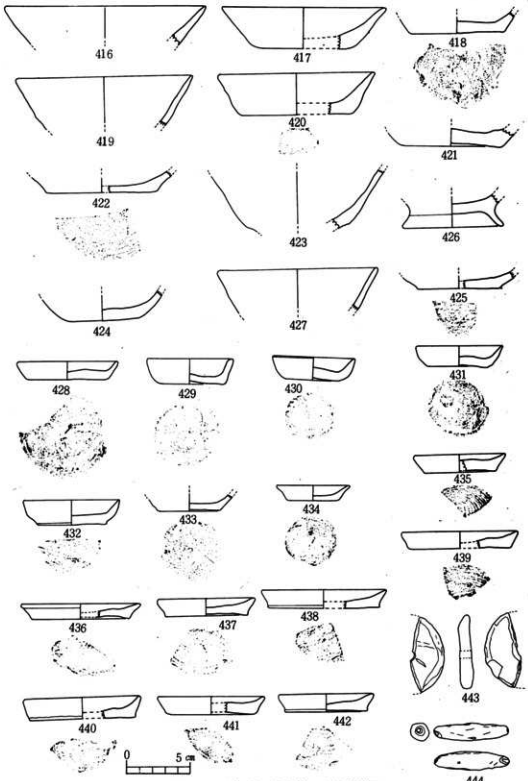
521～526までは鉢である。このうち521は復元口径25.7㎝を測る平底の鉢で，口縁部はやや肥厚する。

器内外面とも横位の刷毛目仕上げである。器厚は胴部に比して底部はきわめて薄い。

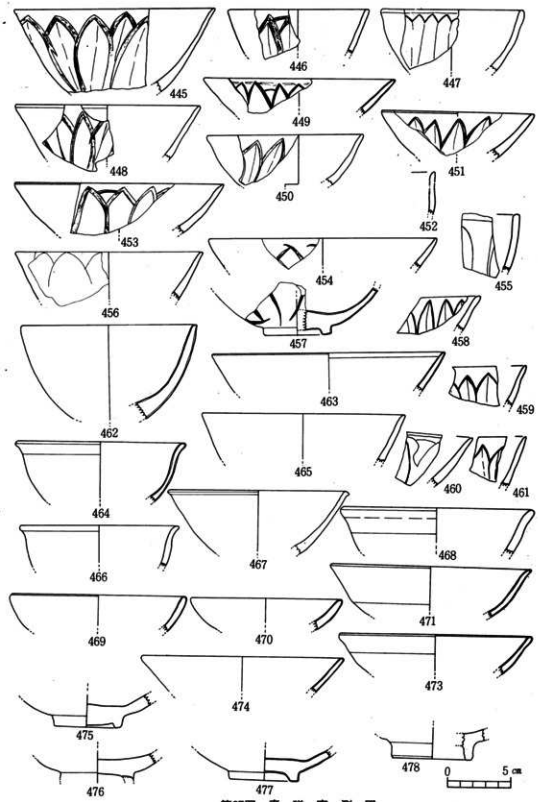
522～526も521と同様の鉢で復元口径は522（24㎝），523（23.7㎝），524（24㎝），525（20.5㎝），526（18㎝）をそれぞれ測り，いずれも灰色を呈する。



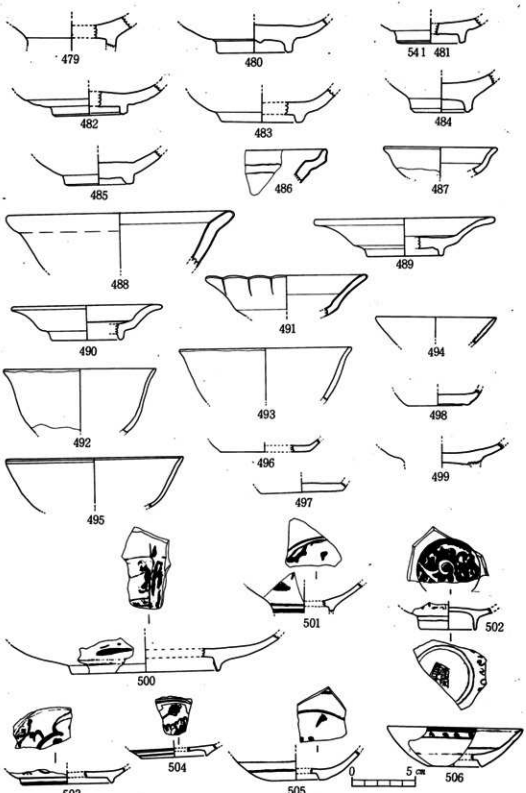
第65図　弥生式土器・土師器実測図



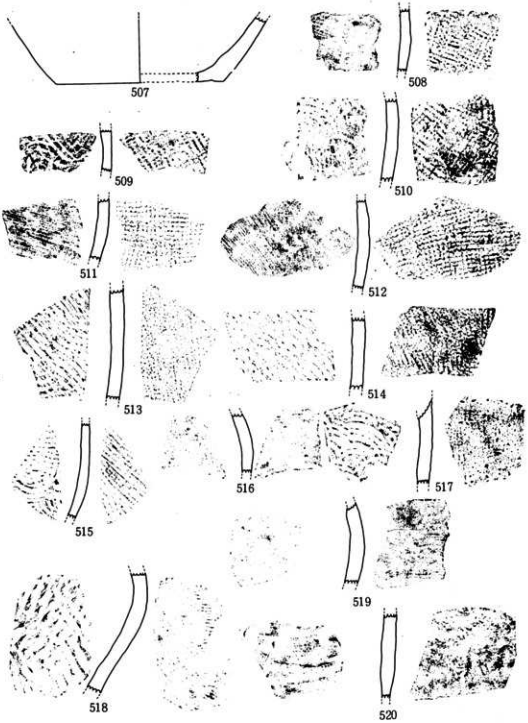
第66図　土師器・紡錘車・土錘実測図


445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
473
474
475
476
477
478
0
5 cm

第67図 青 磁 実 測 図



第68図　青磁・白磁・染付実測図



第69図 須恵器拓影

7　石鍋・その他陶磁器（第70図・図版29）

527～530は滑石製石鍋である。

527は口径19cmを測り，平坦な口唇部から口縁部下に断面台形の鍔状凸帯を廻らす。528はやや厚手のもので口径21cmを測り鍔状凸帯は小さい。529は22.6cmを測り鍔状凸帯は1cmと長く細い。器面は縦位にノミ状工具により整形する。530は復元底径17cmを測るもので，ヘラ状工具によりていねいに仕上げる。煤が付着する。

531は復元口径29.5cmを測る。口縁部は3.5cmと長く下位でわずかに肥厚する。内面に3条のかき目が残るものの小片のため何条の単位のものかは不明である。色調は茶褐色を呈し，胎土は砂粒を含まず焼成は良い。備前焼である。

532は口径25cmを測る常滑焼の甕である。口縁部は上下に拡張する。器外面肩部には自然釉がかかる。茶褐色を呈する。

8　台　座（第71図・図版30）

533は礫列中に出土したものである。一辺38cm，厚み26cmを測る凝灰岩製の無縫塔の台座である。上面には蓮弁花が10cm程浮きあがり刻まれている。

四面には狭座間（合掌式）が刻まれ銘文等はない。狭座間の文様は頂点から出た線は，缺道に向けてほぼ水平となり，曲線をもって肩に至る。頂点～缺道～肩はほぼ水平に並ぶ。

534はA－Ⅲ（d－15）区に出土したものである。各辺は49.2cm，47.1cmを測る凝灰岩製のもので中央には18cm×18.5cm，深さ12cmの柄突を穿つ。柄突の底部はU字形となる。

礎石として利用したのか，塔の台座としたかは不明である。

9　こうがい（第71図・図版30）

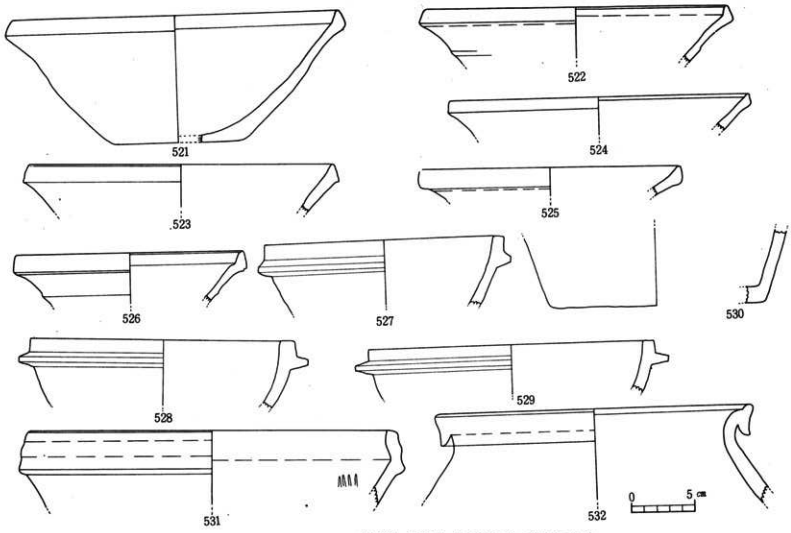
こうがいは1本出土した。全長15.6cm，最大幅1.2cm，厚さ0.25cmを測る。

耳かき部分は反りかえり，表には装飾が付いていたものらしく，貼付た痕跡があり，この装飾痕の両側面には，1条の彫込みの線が縦位にある。

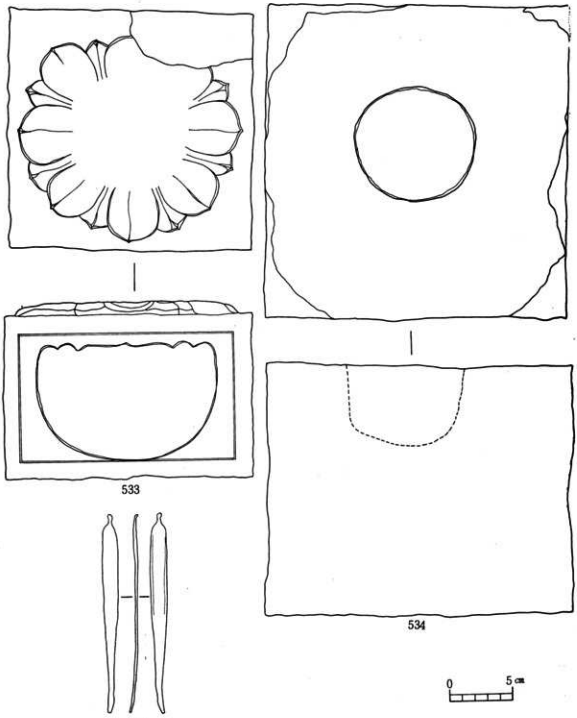
10　古　銭（第72図・図版30）

銅銭は4点出土した。536は径3.5cm，中孔は1cm×1cmの正力形である。表面には「崇寧重寶」，裏面には何もない。B－Ⅲ（r－13）区，Ⅱ層に出土した。

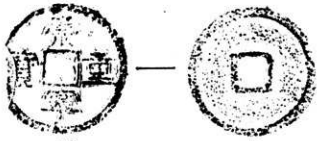
537，538は「洪武通寶」である。他に「口平口口」の銅銭片が出土した。



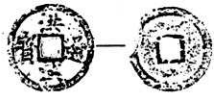
第70図　須恵器・滑石製石鍋・すり鉢実測図



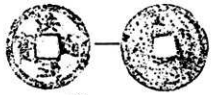
第71図　台座・こうがい実測図



536



537



538

第72図 古　銭　拓　影

第2節　石　器

石器には，石鏃・特殊石器・石匙・スクレイパー・剥片石器・剥片・削器・石槍・石核・砥石・磨石・石皿などの石器がみられる。これらの石器は，原則として層位別にレイアウトしたが，中には石器の形状によりレイアウトの段階で変更した石器が随所に見られる。

(1) 石　鏃

石鏃は30点が出土している。539～544はⅢ層，545～564はⅣ層，565～568はⅤ層である。

石鏃の形状は無茎で二等辺石鏃が主体を占るが，中には二等辺鏃（539・557・563）や不定形（559～564・568）などに大別される。素材は黒曜石と硅岩を主に，砂岩・チャートなども用いている。石鏃の基部形態は凹基（540～543・545～555・565～567）と平基(539・556～558）とに大別され，外に丸基（545・559～564・568）などが認められる。

①Ⅲ層出土の石器（第73図 539～544・図版31）

6点の無茎の打製石鏃で，完形品3，破損品3が出土している。539は三角形鏃で，やや厚手の素材を用い，不規則な剥離により調整されている。540・542はともに長身鏃で，同じ形状をもち，ともに基部の脚部片側が欠損している。調整はともに交互剥離により加工調整され，は中央部がふくらみレンズ状を呈している。541は片側脚部が欠損しているが，良質の黒曜石を素材に用い，押圧剥離も安定し，左右対称な状態に調整されている。543は黒色頁岩を用い，小形であるが，二等辺鏃で凹基式のU字状を呈している。544は厚手の剥片を用い，先端部と右側縁部に調整加工が認められ，石鏃としての利用が考えられる。

図版	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
539	B－Ⅲ(g－4)	Ⅲ	1.85	1.85	0.45	1.05	硅岩	三角形鏃，メノウ化している
540	C－Ⅰ(O－4)	〃	3.4	(1.5)	0.45	1.55	硬質砂岩	長身鏃
541	B－Ⅲ(i－11)	〃	2.2	(1.7)	0.4	0.9	黒色頁岩	
542	C－Ⅱ(l－8)	〃	3.6	(1.4)	0.5	2.0	チャート	長身鏃
543	C－Ⅱ(m－8)	〃	2.0	1.2	0.4	0.55	黒色頁岩	
544	C－Ⅱ(O－10)	〃	1.6	2.35	0.8	3.25	黒曜石	

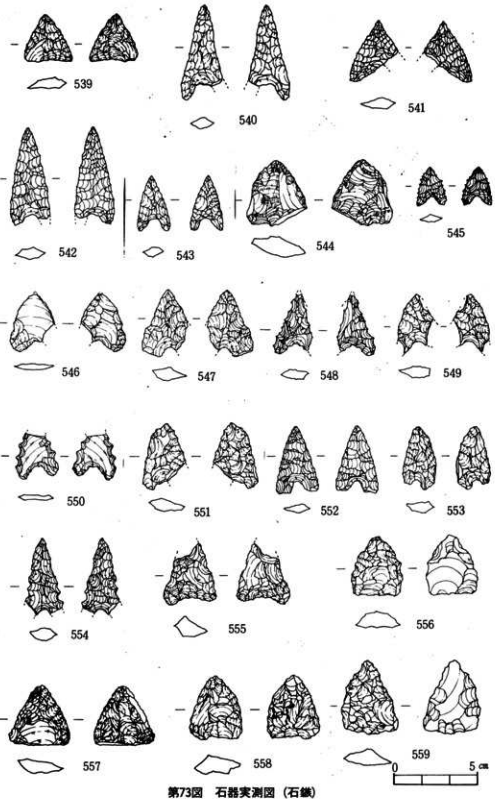
表14　石器出土一覧表　（単位cm及びg／　）付したものは現存値を示す）

②Ⅳ層出土の石器（第73図 545～559，第74図 560～564・図版31）

20点の無茎の打製石鏃，完形品11，破損品9が出土している。545～547はⅣ層最下部からの出土である。545は凹基式でU字状を呈する小形の石鏃で，両側縁を鋸歯状に加工調整してある。546は破損品であるが，凹基式でU字状を呈し，薄手の剥片の片面を中心に加工調整を行い剥片縁的様相をもっている。547は凹基式でU字状を呈し，側辺中央部のふくらみは石英の結晶部であり，加工調整を中断したものと考えられ，551と同一母岩を利用したものと思われる。

548は凹基式で，先端部，右側縁，片脚部が欠損しているが，側縁は545と同じく鋸歯状に加工調整がなされている。549は凹基式のU字状を呈し，先端部近くや両脚部の欠損が見られ，交互剥離に加工調整されている。550は凹基式でU字状を呈し，先端部は欠損している。薄手のチャート剥片の平坦面を残すように造りあげたもので，剥片鏃のような加工調整方法が用いられ，しかも鋸歯状な仕上げを行なっている。551は547と同一母岩を素材としたものと考えられる。先端部及び右脚部に欠損がみられる凹基式の石鏃である。552は二等辺鏃で，凹基式でU字状を呈し，表裏ともに交互剥離により加工調整がなされている。553は凹基式でU字形を呈し，製作途上のと思われる粗雑な仕上げものである。554は，両脚部の欠損が認められるが，凹基式でU字状を呈し，長身の鋸歯縁鏃で左右対称な加工調整がなされている。555は凹基式で，素材の選択に難があったと思われ，硬質な結晶部分で数回の剥離の試みが施されているが剥離が行なえず，途中で放棄したものと思われ，これに近いものに547・551などがあげられる。556は平基式で，基本的には546と同様な製作方法がみられ，剥片鏃的様相をもっている。557は正面の加工痕より石鏃として取り扱ったが粗雑な作りである。558・559は平基式で，厚手の不定形な剥片を用いたもので，三角形鏃で形状を呈しているが，加工調整は粗雑である。560は石鏃として取り扱ったが，平坦剥離が認められ，裏面の先端部近くの左右に1ケ所づつ大きな剥離が行なわれ，石匙のつまみ状の仕上がりがなされている。561は不定形な形態をなしているが，加工調整の状態より石鏃として取り扱った。562は石鏃として取り扱ったが，先端部の調整が鋭く加工され，ドリル的な用途も充分に考えられる。563は厚手の剥片を素材として用い，製作途上とも思われる粗雑なもので，553・555等と近いものと思われる。564は559～562等と同様に基部の底辺部分の仕上り形状を丸くするもので，他の石鏃と形態を区分して取り扱うべきとも考えられるが同一にあっかった。

番号	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
545	A Ⅰ(e－1)	Ⅳ	1.6	1.1	0.3	0.25	黒曜石	
546	B－Ⅱ(h－13)	〃	2.3	(1.8)	0.25	0.75	硅岩	メノウ化している。
547	D－Ⅲ(p－15)	〃	1.6	(1.7)	0.5	1.7	硅岩	
548	C－Ⅲ(p－11)	〃	(2.3)	(1.4)	0.4	0.9	黒曜岩	
549	C－Ⅲ(O－11)	〃	2.3	(1.35)	0.45	0.75	チャート	
550	C－Ⅳ(n－14)	〃	(1.7)	1.7	0.2	0.45	黒曜岩	
551	B－Ⅲ(n－15)	〃	1.6	(1.65)	0.5	1.7	硅岩	
552	C－Ⅱ(n－10)	〃	2.55	1.6	0.35	1.05	黒曜岩	
553	B－Ⅱ(g－10)	〃	2.5	1.3	0.45	1.05	硅岩	メノウ化している。
554	C－Ⅱ(i－10)	〃	(2.9)	(1.5)	0.5	1.4	黒曜岩	
555	C－Ⅱ(O－10)	〃	(2.4)	2.1	0.8	2.5	硅岩	



第73図　石器実測図（石鏃）

556	C Ⅲ(m−12)	Ⅳ	2.4	1.95	0.65	2.4	硅　岩	メノウ化している
557	C Ⅲ(h−11)	〃	2.3	2.35	0.55	2.94	チャート	
558	C Ⅱ(e−8)	〃	2.45	2.0	0.75	2.7	硅　岩	メノウ化している
559	C Ⅲ(n−13)	〃	2.9	2.15	0.65	3.7	硅　岩	メノウ化している
560	B Ⅲ(l−12)	〃	(2.5)	1.8	0.5	2.4	硅　岩	メノウ化している。
561	A Ⅲ(e−11)	〃	2.3	1.8	0.5	1.7	黒曜石	
562	C Ⅱ(O−12)	〃	2.6	2.2	0.75	3.45	黒曜石	
563	C Ⅲ(n−11)	〃	2.2	2.0	0.65	2.7	黒曜石	
564	C Ⅲ(O−13)	〃	2.9	2.15	0.65	3.7	硅　岩	

表15　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

③　V層出土の石器（第74図 565～568・図版31）

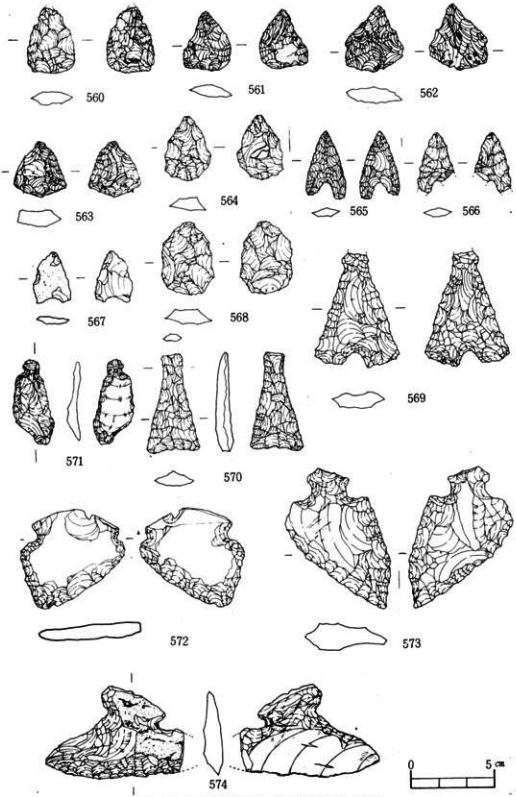
4点の無茎の打製石鏃で，完形品3，破損1が出土している。565は543・552と同一の形態をもつ石鏃で，凹基式でU字状を呈し，両側縁は交互剥離により加工調整がなされている。566は，両脚部ともに欠損しているが，凹基式でU字状を呈し，565等に近い形状が認められ一回剥離加工が大きく，一見荒く仕上がっているように思われる。567は凹基式で，薄手の剥片を素材として用いたもので，表面右側縁で2回，先端部付近で2回，左側縁で1回，底辺部で1回，裏面右側縁で2回，左側縁で5回，底辺部で3回の計16回の剥離により加工調整が行なわれた剥片鏃である。568は564に類似しているもので，平坦で厚手の硅岩を素材にした剥片に，平坦剥離を行なったもので亀の甲状の調整加工されている。

番号	出土区	層	全長（長径）	最大幅（短径）	厚さ	重さ	石　質	備　考
565	D Ⅰ(O−2)	V	2.65	1.55	0.35	1.25	黒曜石	
566	B Ⅰ(b−2)	〃	2.45	(1.4)	0.35	0.9	硅　岩	
567	C Ⅱ(k−6)	〃	1.9	1.45	0.3	0.7	硅　岩	
568	C Ⅱ(k−6)	〃	1.85	2.0	0.6	3.55	硅　岩	メノウ化している

表16　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

(2) 特殊石器（第74図 569，570・図版31）

遺物の形態から特殊石器として取り扱った。2点の出土がみられ，569はⅢ層での撹乱した部分より出土しており，570はⅣ層より出土した。このことから，569・570は同一の項目で取り扱う。569・570は，同一の形状を呈したもので，形状は鏃の形態の特徴をもち大型である。これらの石器は特異なもので，これまでに接したことがなく，初めての知見である。したがって用途等についても不明である。569は上部がやや欠落（欠損）しており，570は完形品である。今報告で，細い部分を上位に広い部分を下位に配置したのは，569で細い部分（上位）



第74図　石器実測図（石鏃・特殊石器・石匙）

が欠損していること，広い部分（下位）では，全く使用の痕跡が認められないことや正面左側の脚部と想定される部分の加工調整が完全になされておらず，中途で放棄している点などのためである。

番号	出土区	層	全長（長径）	最大幅（短径）	厚さ	重さ	石質	備考
569	C Ⅳ(k−16)	Ⅲ	4.15	3.05	0.65	7.00	紫色頁岩	撹乱
570	C Ⅱ(l−7)	Ⅳ	3.8	2.0	0.6	3.25	硅岩	

表17　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

(3) 石匙

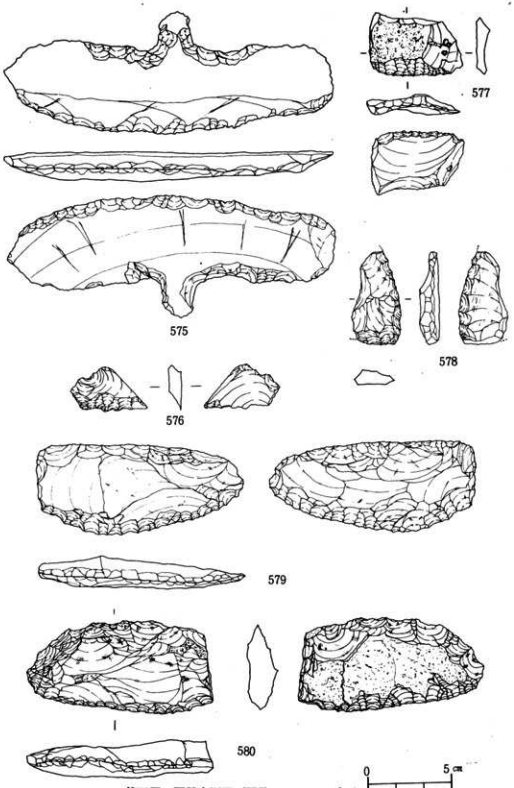
石匙は5点が出土し，571～575はすべてⅢ層からの出土である。

①Ⅲ層出土の石器（第74図 571～574，第75図 575）

5点の石匙の出土が見られる。571は縦長の不定形な剥片の打点部近くをつまみとした小型の石匙で，裏面は一次剥片の平坦部を大きく変えることなく用いている。つまみ部のえぐりは表裏より調整加工がなされている。572はつまみ部分を平行位置にしてみると，逆三角形の形状を呈している。パチィナーの進行した扁平な剥片を素材として用い，剥離面とはかなりの時間差が認められ，表裏の平坦面には多くの擦痕が認められる。573は572と同様に目的部分が逆三角形状で鋭利に仕上げられているもので，つまみ部分の先端部には礫面を残している。石刃と思われる部分は表裏から加工剥離がなされている。574は横長の石匙で，正面の一部に原石の自然面を残し，裏面は剥面の平坦面をそのまま利用し，つまみ部に剥離を施し，正面の刃部の加工剥離は45°～60°近くの角度を呈している。575は大型の横長で，特別に形状のよく整ったもので，横長の扁平な剥片を素材として用い，表面ともに節理面を残している。当遺跡出土の石匙の中で，特に刃部左側部分は剥離の交差面が極端に磨耗し，使用された度合いがうかがわれる。

番号	出土区	層	全長（長径）	最大幅（短径）	厚さ	重さ	石質	備考
571	D Ⅰ(f−5)	Ⅲ	3.35	1.55	0.50	1.25	チャート	
572	D Ⅱ(r−8)	〃	3.85	3.05	0.55	5.70	硅岩	メノウ化している
573	D Ⅰ(r−4)	〃	5.0	3.7	0.9	11.20	玄武岩	
574	C Ⅱ(k−9)	〃	(3.6)	5.25	0.75	12.0	硅岩	メノウ化している
575	A Ⅲ(l−15)	〃	11.9	4.35	0.9	38	安山岩	

表18　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）



第75図　石器実測図（石匙・スクレイパー）

(4) スクレイパー

12点のスクレイパーの出土が見られる。576・579・581はⅢ層，577・578・580・583～587はⅣ層，582はⅤ層からの出土である。レイアウトの関係で層位別配置が不規則となっている。

①Ⅲ層出土の石器（第55図 576・579・581・図版32）

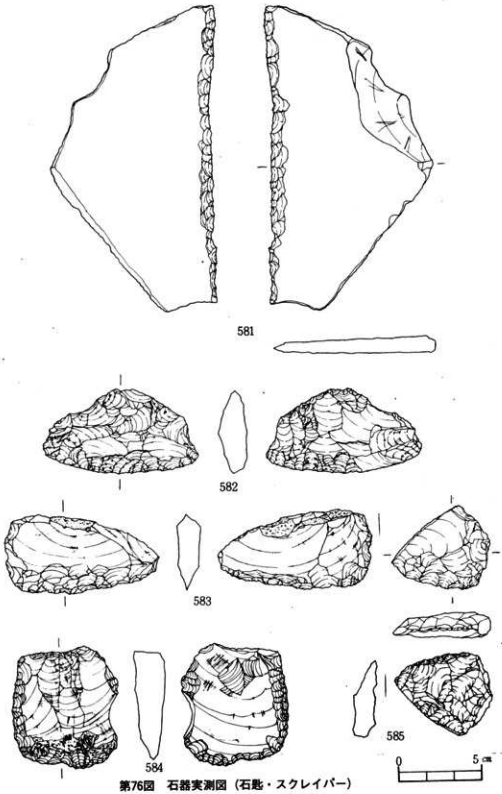
3点の出土が見られる。576は硅岩の扁平な剥片を素材に用い，裏面では一次剥片の平坦部を大きく変えることなく利用し，表面下位に刃部を造り，急峻な角度をもつ石器で，破損品のため全容は不明であるが，スクレイパー的用途で使われたものと思われる。579は横長に剥出された剥片で573と同様の母岩を利用し，剥片の全周に交互剥離加工を施し刃部を設けている。この石器を石槍としてとらえるには意識的に尖頭部が加工された痕跡はなく，一種のスクレイパーとしての機能をもち，しかも石器の全周がその目的をもったと思われる。581は節理面によって剥出した扁平な板状の安山岩の剥片を利用したものである。レイアウトの関係で，刃部の位置が縦位になっているが，本来は横長で下方向に刃部が来る石器である。刃部の形成は交互剥離加工が施され，波状の刃を呈している。

番号	出土区	層	全長（長径）	最大幅（短径）	厚さ	重さ	石質	備考
576	A Ⅱ(e−6)	Ⅲ	1.75	2.9	0.55	2.55	硅岩	メノウ化している
579	D Ⅰ(r−4)	〃	7.35	3.3	0.95	20	玄武岩	
581	B Ⅲ(f−12)	〃	10.9	5.9	0.6	35.0	安山岩	

表19　石器出土一覧表　（単位cm及びg，（ ）を付したものは現存値を示す）

②Ⅳ層出土の石器（第75図 577・578・580，第76図 583～585，第77図 586・587・図版32）

8点の出点が見られる。577はやや扁平な剥片を用い，一側部を刃部としたもので，576と同様な石器と思われ，粗雑な造りに仕上げられている。578はレイアウトの関係で，縦位に配置したが右側辺が下位になるような石器である。この石器は玄武岩の剥片を用い，裏面は剥片の平坦面をそのまま利用し，正面では二側辺部と裏面では一側辺のみに加工剥離が施されている。また現配置でみてみれば，先の石鏃の中で示した560，564等と同様な要素をもつ石器と思われる。580は572と同一母岩とする素材が用いられ，横長の剥片の打面部を除く部分に表裏面よりの剥離加工がなされたもので，正面上位中央部には原石の礫面を残している。579と類似した石器であるが，579との違いは先端部の加工剥離が入念に行なわれていることであり，石槍としての機能を持ち合わせている石器といえよう。583は579と機能を同一にすると思われる。573・579等と同一母岩を利用し，剥片の下位に交互剥離加工を施した刃部を施している。上位中央部付近には原石の礫面を残している。584は良質の黒曜石を用いたもので，一見ランド・スクレイパー的な形状に仕上げられている。打面部をのぞく全ての部分に表裏より入



第76図　石器実測図（石匙・スクレイパー）

念な調整剥離を施している。585は576・577等に類似した石器で，一側辺に刃部を造り出している。586はやや扁平な素材を用い，刃部の剥離加工は交互になるように施された石器で，硬質の硅岩を用いている。587は578のような石器で，一部が欠落している。一側辺には刃部を造り出しているが，その一部は硬質な石英の結晶部があり，剥離が行えず途中で放棄したものと思われる。

番号	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
577	C Ⅱ(h−10)	Ⅳ	2.45	3.6	0.7	5.2	硅岩	メノウ化している
578	B Ⅱ(j−8)	〃	3.65	(1.95)	0.7	5.2	玄武岩	
580	D Ⅲ(g−13)	〃	7.25	3.65	1.25	32.75	硅岩	メノウ化している
583	B Ⅲ(g−13)	〃	3.1	5.85	0.9	18.25	玄武岩	
584	C Ⅱ(m−9)	〃	4.7	4	1.2	22.45	黒曜岩	メノウ化している
585	C Ⅲ(n−12)	〃	3.75	3.2	0.6	10.96	硅岩	メノウ化している
586	B Ⅱ(j−8)	〃	5.5	2	0.6	6.75	硅岩	メノウ化している
587	D Ⅲ(p−13)	〃	3.75	1.85	0.8	5.4	硅岩	メノウ化している

表20　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

③V層出土の石器（第76図 582・図版32）

582の1点がV層から出土している。図面の下位が刃部に相当し，表裏に刃部が設けられているが，表面はほぼ全面に，裏面では右側部分には認められない。

番号	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
582	C Ⅱ	V	3.3	6.0	1.1	18.0	黒曜石	

表21　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

(5) 剥片石器

24点の剥片石器の出土が見られる。石器の配置はレイアウトの段階で層位別配置を一部変更した。598～600はⅡ層，601・602・610・611・613はⅢ層，589～591・594・595・604～609・612・616・623・624はⅣ層，592・593・596はV層である。

①Ⅱ層出土の石器（第78図 598～600・図版33）

3点の剥片石器の出土が見られる。598は剥片の一部に刃こぼれ状の痕跡が認められたものである。599は断面が三角形状の剥片を素材に用い，裏面は一次剥片の平坦部を大きく変えることなく利用し，剥片の両側に刃こぼれが見られる。600は一見，石錐等の下端部とも思われるが，表裏を交互に剥離し，石刃を造り出している。

番号	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
598	B Ⅲ(1−14)	Ⅱ	3.	2.3	0.7	4.05	黒曜石	
599	B Ⅲ(j−14)	〃	3.25	1.85	0.75	3.7	黒曜石	
600	C Ⅰ(k−4)	〃	(1.1)	(2.7)	0.6	1.7	硅岩	メノウ化している

表22 石器出土一覧表 (単位cm及びg( )を付したものは現存値を示す)

②Ⅱ層出土の石器 (第78図 601・602・第79図 610・611・613・図版33)

5点の剥片石器の出土が見られる。601は自然面を残した素材を利用し，断面が略三角形状の剥片の一部に刃こぼれ状の痕跡が認められるものである。602は剥片の一部に刃こぼれ状の痕跡が認められる。610は硬質な硅岩を，611は硬質な硅質岩を用い，610では下端部の一部に使用痕が認められる。613は612と同一の母岩を用いた石器で，断面が三角形状を呈する剥片を用い，裏面では一次剥片の平坦部を大きく変えることなく利用している。両側縁には微細な刃こぼれが認められ，使用したものと思われる。

番号	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
601	C Ⅱ(k−8)	Ⅲ	3.2	1.75	0.5	2.7	黒曜石	
602	A Ⅱ(e−10)	〃	3.4	1.7	0.75	2.9	黒曜石	
610	B Ⅰ(i−5)	〃	2.45	1.7	0.3	2.05	硅岩	
611	D Ⅲ(s−15)	〃	3.9	3.95	0.95	13.05	硅質岩	メノウ化している
613	C Ⅱ(l−7)	〃	3.4	1.7	0.75	2.9	黒曜石	

表23 石器出土一覧表 (単位cm及びg( )を付したものは現存値を示す)

③Ⅳ層出土の石器 (第77図 589〜591・594・595・第78図 604〜609・第79図 612・616・623・第80図 624・図版32・図版33・図版34)

15点の剥片石器の出土が見られる。589は硅岩の厚い剥片を用い，細石刃核に見られる楯状剥離痕が一部に認められる石器で，用途は不明である。590は不定形な硅岩の剥片の表側に抉入部をもつ石器で，裏面は一次剥片の平坦部を余り変えることなく，一部に自然面を残している。591は漆黒の黒曜石の剥片を素材とし，表面には自然面を残している。刃部は表裏から行なわれ，左側部分のみに交互剥離加工により造り出されている。594は硅岩の剥片を素材に用い，石器の形状は円盤形を呈し，打面部以外の縁辺の表面に荒い剥離加工が施れ，刃部を造り出している。595はやや扁平な剥片で，断面が逆三角形状を呈した素材を用いている。下端部は欠落しているが，打面部と右側縁部に表裏より剥出した刃部が作り出されている。604は扁平な剥片の一縁辺に表裏からの微細加工により刃部を造り出している。605は扁平な剥片を用い，表面左縁辺に刃こぼれが見られる。606は扁平な硅岩の剥片を用い，裏面に一次剥片の平坦部をあまり変えることなく，裏面方向からの細かい加工により刃部を造り出している。607は抉入状の刃部形成を行っているが，片面方向からだけで，破損しているため全容は不明である。

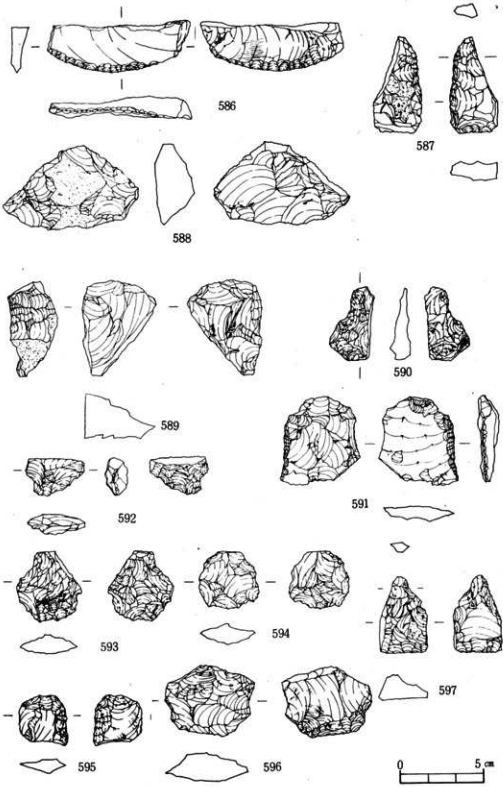
608は断面が略三角形状の剥片を用い，両側縁に裏面方向からの加工痕が認められる。609はホルン・フェルスの扁平な素材を用い，本遺跡ではこの石器のみに用いられている。本石器は下端部が欠落したもので，主として右側縁に交互剥離が見られ，波状の刃部を造り出している。下端部の欠落は刃部形成前に起ったものと思われる。表面には節理面を残し，裏面は一次剥片の平坦部を余り変えることなく利用している。612は613と同一母岩を用いた黒曜石の剥片で，微細な刃こぼれがあり，使用されたものと思われる。616は593・594に類似した石器と思われる。623は右側縁に硬質の結晶部分の見られる硅岩の厚手の剥片を用い，左側縁に刃部を造り出し，刃こぼれが見られる。624は硅岩を用いた縦長の剥片で，打面部は台形状，中央部上り下端部にかけては三角形状の横断面を呈している。両側縁に刃部加工が行なわれている。用途については，切削具としての機能をももっていると思われる。

図版	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
589	A Ⅲ(d−13)	Ⅳ	3.65	2.85	1.7	14.2	硅岩	
590	B Ⅲ(i−12)	〃	2.9	1.9	0.8	2.7	硅岩	メノウ化している
591	C Ⅱ(n−9)	〃	3.4	3.0	0.75	6.7	黒曜石	
594	C Ⅲ(O−11)	〃	2.25	2.3	0.6	3.95	硅岩	メノウ化している
595	B Ⅲ(g−13)	〃	2.0	1.9	0.55	2.0	硅岩	メノウ化している
604	C Ⅲ(m−13)	〃	1.55	3.35	0.3	1.25	硅岩	メノウ化している
605	B Ⅱ(g−6)	〃	2.4	2.55	0.5	3.45	硅岩	メノウ化している
606	C Ⅲ(m−13)	〃	2.6	1.4	0.58	1.25	硅岩	メノウ化している
607	B Ⅲ(i−15)	〃	1.6	1.7	0.3	0.9	黒曜石	メノウ化している
608	B Ⅰ(g−3)	〃	(5.95)	3.0	1.6	17.75	硅岩	
609	C Ⅲ(m−11)	〃	6.4	3.45	0.8	13.45	滑石岩 ホルンフェルス	
612	D Ⅱ(p−15)	〃	3.8	1.65	0.65	2.2	黒曜石	
616	C Ⅲ(l−11)	〃	1.9	2.2	0.55	2.2	硅岩	メノウ化している
623	C Ⅱ(k−8)	〃	4.3	3.35	1.65	16.95	硅岩	
624	B Ⅱ(h−6)	〃	9.2	2.5	1.6	24.75	硅岩	

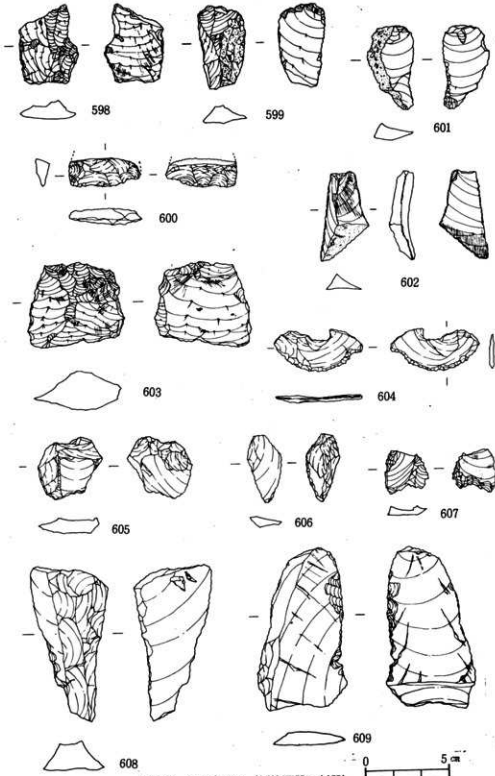
表24　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

④V層出土の石器（第77図 592・593・596・図版32）

3点の剥片石器の出土が見られる。592は厚手の剥片を用い，下端部が刃部と思われるが，両面より荒い剥離加工がなされ，欠損しているため用途は不明である。593は硅岩の剥片を用い，形状は円盤形を呈し，打面部以外の縁辺の表面に荒い剥離を施し，刃部を形成している。596は厚手の剥片で，裏面はほぼ平坦面を作り出し，下端には剥離加工が施されているが，粗雑である。表面より見れば，石核の一種（残核）とも思われ，周縁部より剥出している。



第77図　石器実測図（スクレイパー・剝片石器・石槍・削器）



第78図　石器実測図（剥片石器・削器）

番号	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
592	C Ⅱ(m−10)	Ⅴ	1.5	2.3	0.8	2.05	硅岩	メノウ化している
593	B Ⅲ(g−12)	〃	2.75	2.55	0.58	4.9	硅岩	メノウ化している
596	C Ⅱ(l−8)	〃	2.75	3.5	1.1	10.55	硅岩	

表25　石器出土一覧表

(6) 剥片

本遺跡の石器の特徴のひとつに，石器の素材の大半が硅岩を用いている。したがって，これと比例して数多くの剥片も数多く出土している。その中で，614・625はⅢ層，615・617・618～622はⅣ層からの出土である。

①Ⅲ層出土の石器（第79図 614・第80図 625・図版33・図版34）

614は欠損しているが，定形の石核より剥離され，一見刃器とも表現できる整形された小形の剥片である。625は大形であり，縁辺部には鋭利さが見られず，厚みのある剥片で，いたるところに石英の結晶部が観察される石器である。

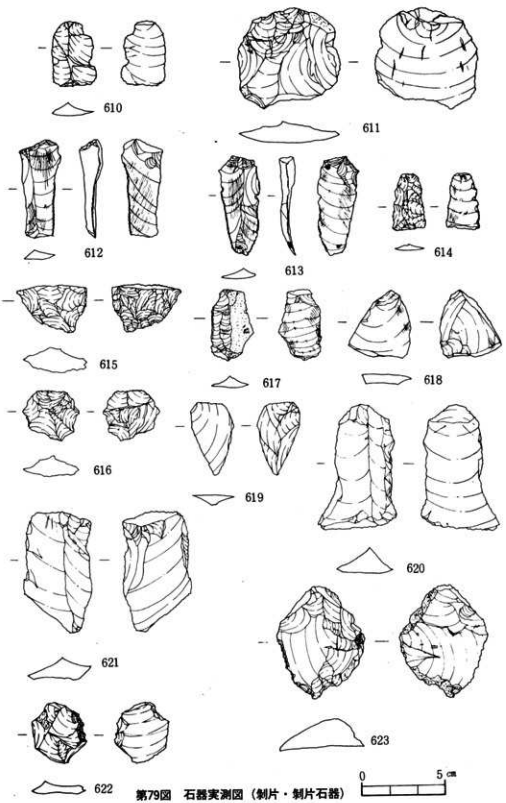
図版	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
614	A Ⅱ(c−14)	Ⅲ	(2.15)	(1.3)	0.3	0.75	硅岩	メノウ化している
625	C Ⅰ(l−4)	〃	7.25	3.5	1.7	38.25	硅岩	

表26　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

②Ⅳ層出土の石器（第79図 615～621・図版33）

615は硅岩の剥片で，上位部分に欠損が見られるが，縁辺部に表裏からの剥離加工が見られ一見スクレイパー的用途が考えられる。617は黒曜石で，表面の一部に自然面を残した縦長の剥片である。618はシルト製の剥片で，右側縁部に使用痕が見られる。619は整形された剥片で，左側側縁部に使用痕が認められる。620は表面の下端部に自然面を残し，縦長の剥片で整形されている。621はシルト製の整形された剥片であり，側辺部に使用痕が見られる。622は硅岩製で，表面の一部に自然面を残した円形状の剥片である。

図版	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
615	C Ⅱ(l−8)	Ⅳ	1.85	2.6	0.68	4.25	硅岩	メノウ化している
617	C Ⅱ(n−10)	〃	(2.8)	1.65	0.6	1.7	黒曜岩	メノウ化している。
618	C Ⅱ(k−8)	〃	2.65	2.4	0.55	2.4	シルト	
619	C Ⅲ(O−13)	〃	2.8	1.65	0.3	1.75	硅岩	
620	B Ⅰ(l−5)	〃	4.9	3.	1.35	11.9	硅岩	
621	C Ⅱ(k−8)	〃	4.7	2.6	1.	9.05	シルト	



第79図　石器実測図（剥片・剥片石器）

622	B Ⅱ(i−8)	Ⅳ	2.35	2.1	0.6	3.	硅　岩	メノウ化している

表27　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

(7) 削　器（第77図　588　・第78図 603・図版32・図版33）

2点の出土が見られる。ともにⅢ層からの出土である。588は厚手の不定形な硅岩の剥片を素材として用いたもので，目的部分の中央部には硬質な結晶部分に相当し，刃部形成を中途で放棄したものと思われ，削器的な目的があったものと思われる。603は黒曜石製の厚手で，横断面が三角形の剥片に刃こぼれの痕跡が残っており，裏面を下方に用いて削器の用途をなしたと思われる。

図版	出　土　区	層	全長（長径）	最大幅（短径）	厚さ	重さ	石　質	備　考
588	B Ⅱ(h−8)	Ⅲ	4.5	3.7	1.3	22.2	硅　岩	メノウ化している
603	B Ⅲ(h−10)	〃	3.35	3.75	1.45	16.4	黒 曜 石	

表28　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

(8) 石　槍（第77図 597・図版32）

1点のみの出土が見られる。597はⅤ層から出土している。C Ⅱ（m−10）区から出土し，長径1.9cm，短径0.7cm，厚さ0.7cm，重さ4.75gを計測し，硅岩でメノウ化した素材を用いている。578，587等に類似した石器で，特に先端部に使用目的があったと思われる。

(9) 石　核（第80図 628・第81図 829・図版34）

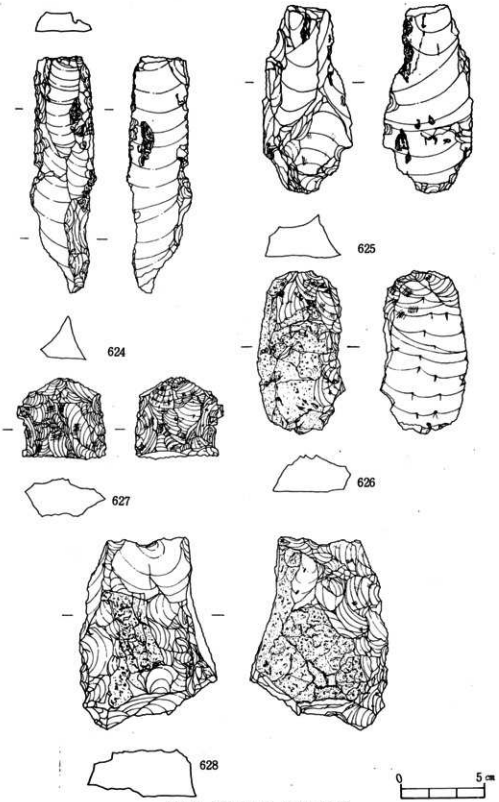
2点の石核の出土がみられる。ともにⅣ層からの出土である。628・629ともに硅岩製で，628は大形な扁平な素材で，表裏面ともに自然面を残し，特に表面の中央部付近の自然面は，硬質の結晶部の固まりで，剥片剥出はその周辺のみで行なわれ，大小の形の剥片を造り出して居り，打点も楕所に認められる石核である。629も表裏の一部に自然面の残存が見られる石核で，不定形な小形の剥片を造り出して居る。剥片の剥出は，表裏交互に行い，打点も楕時移動している。

図版	出　土　区	層	全長（長径）	最大幅（短径）	厚さ	重さ	石　質	備　考
628	C Ⅲ(n−15)	Ⅳ	7.4	5.25	1.95	80.32	硅　岩	
629	B Ⅰ(g−3)	〃	3.9	5.	1.95	39.7	硅　岩	

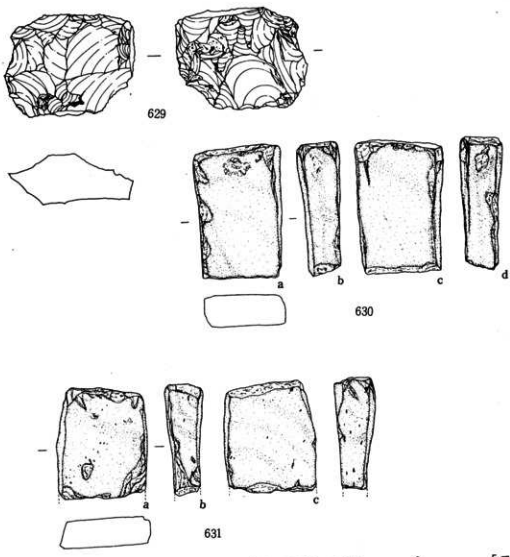
表29　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

(10) 砥　石（第81図 630・631・図版34）

2点の砥石の出土が見られる。630はC Ⅲ（1−15）区のⅡ層，631はB Ⅱ（f−14）区のⅢ層よりの出土である。



第80図　石器実測図（制片・石核）



第81図　石器実測図（石核・砥石）

①Ⅱ層出土の石器（第81図 630・図版34）

1点の砥石の出土が見られる。630は砂岩製の破損品であるが，全長7.3cm，最大幅4.75cm，厚さ2.2cm，重さ115gを測る。砥面は表裏及び両側面ともによく使われている。a面上位とd面上位及び中央付近に敲打された痕跡が認められ，C面左側上位には浅いV字状の溝が認められる。

②Ⅲ層出土の石器（第81図 631・図版34）

1点の砥石の出土が見られる。631はホルンフェルス製で，下部が欠損しているが，全長6.1cm，最大幅5.0cm，厚さ2.05cm，重さ115gを測る。砥面は表裏及び両側面ともに見られ，

よく使われている。砥面は平坦面を造り出し，C面には擦痕がわずかに認められる。

(10)磨　石

13点の磨石の出土が見られる。632～634はⅢ層，635～640・643はⅣ層，641・642はⅤ層からの出土である。632・634・636・637は磨る機能を主として，一部敲く機能をも果したものと思われる。

①Ⅲ層出土の石器（第82図 632～634・図版35）

3点の磨石の出土が見られる。ともに輝石安山岩製である。632は下部が欠損している。両面及び両側面ともに磨耗した研磨面が観察される棒状の磨石である。上端部はV字状の溝がゆるやかにS字状に走り，その周辺には敲打された痕跡も認められ，敲く機能も兼ねていたと思われる。633は楕円礫を用いた磨石で，特に両面に研磨面が観察される。634は楕円礫を用い。表裏面ともに磨耗面が認められるものの，石材がもろいため風化がすすみ亀裂が不規則にはいっている。周縁部は敲打の痕跡が認められ，裏面右付近にまで延びている。

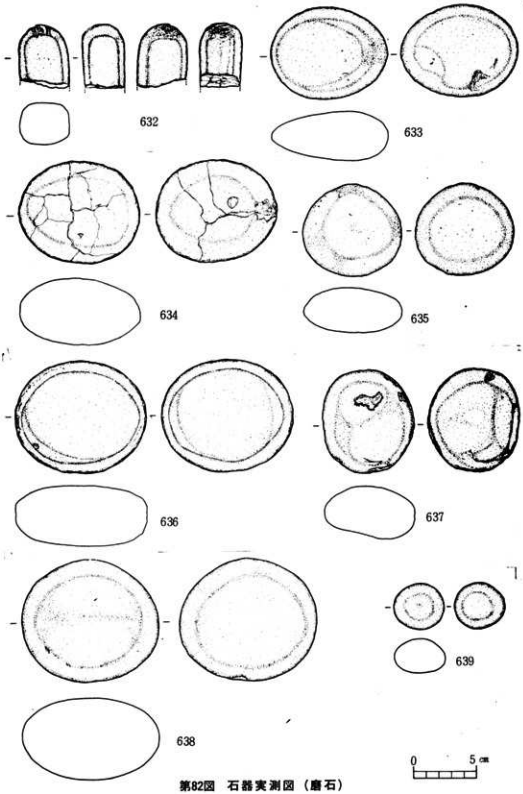
図版	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
632	E Ⅱ(n−8)	Ⅲ	(5.0)	(3.9)	3.3	100	輝石安山岩	
633	C Ⅰ(n−3)	〃	9.2	7.3	3.9	275	輝石安山岩	
634	D Ⅰ(r−5)	〃	10.4	9.0	4.7	500	輝石安山岩	

表30　石器出土一覧表　（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

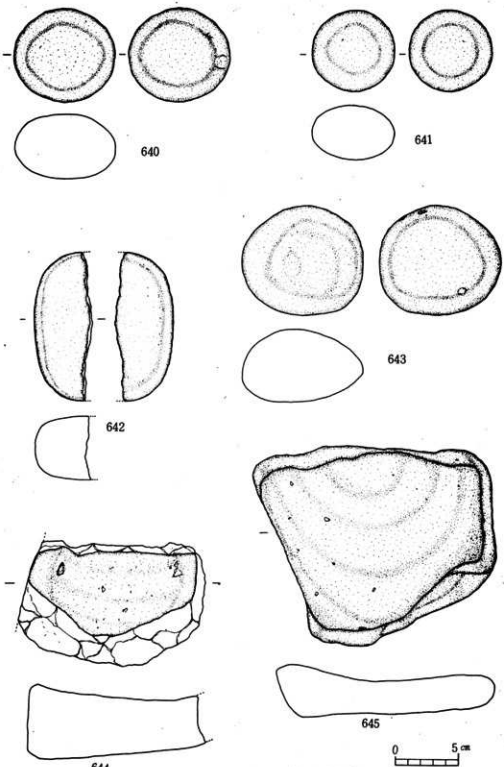
②Ⅳ層出土の石器（第82図 635～639・第83図 640・643・図版35）

7点の磨石の出土が見られる。640は角閃石安山岩製で，他はすべて輝石安山岩製である。635は楕円礫を用い，磨耗面が全面に認められる。636は楕円礫を用い，表裏面ともに平坦面状を造り出し，稜線が判明するほど磨り減ったもので，磨耗面は砥面を思わせるような磨面が見られる。周縁部には敲打の痕跡も認められ，一部敲石としての機能も充分考えられる。637は楕円礫を用い，磨耗面は両面に認められる。また表面上位の一部と周縁に敲打の痕跡があり，両機能を兼ねたものでみられる。638は楕円礫を用い，器面全体に研磨面が認められ，とくに表裏面はより研磨が施されている。これらの磨石の中で，いちばん大きい磨石である。639は小形の楕円礫を用い，器面全体に研磨面が認められ，また投弾としての可能性も考えられる。640は角閃石安山岩製で，風化のため磨面は判明しない。643は表裏面及び全周縁ともに磨面が観察される。C Ⅱ（1－1）区の集石中からの出土である。いちばん小形の磨石である。

図版	出土区	層	全長(長径)	最大幅(短径)	厚さ	重さ	石質	備考
635	B Ⅱ(g−10)	Ⅳ	7.3	7.3	3.5	275	輝石安山岩	
636	D Ⅱ(g−9)	〃	9.6	8.1	5.3	715	輝石安山岩	



第82図　石器実測図（磨石）



第83図　石器実測図（磨石・石皿）

637	C Ⅲ(n−11)	Ⅳ	8.3	7.2	4.1	350	輝石安山岩	
638	C Ⅱ(m−10)	〃	10.8	9.7	6.3	910	輝石安山岩	
639	D Ⅱ(p−9)	〃	4.7	4.7	2.7	50	輝石安山岩	
640	C Ⅲ(n−14)	〃	7.9	5.2	5.2	360	角閃石安山岩	
643	C Ⅱ(l−11)	〃	9.0	5.8	5.8	700	輝石安山岩	集石中より出土

表31　石器出土一覧表表（単位cm及びg（　）を付したものは現存値を示す）

③V層出土の石器（第83図 641・図版35）

2点の磨石の出土が見られる。641・642ともに輝石安山岩を素材としている。641は表裏面及び全周縁ともに研磨面が認められる。642は右側半分が欠落しているが，その形状から，636と類似し，稜線が判明するほど磨り減り，上位にその徴候が見られる。

図版	出土区	層	全長（長径）	最大幅（短径）	厚さ	重さ	石質	備考
641	B Ⅰ(J−3)	V	6.5	6.5	4.3	250	輝石安山岩	
642	B Ⅰ(h−1)	〃	(11.9)	(11.0)	5.0	375	輝石安山岩	

表32　石器出土一覧表表（単位cm及びg（ ）を付したものは現存値を示す）

⑫石　皿（第83図 644・645・図版36）

2点の石皿が見られる。644は表採品で，645はV層からの出土である。644・645ともに輝石安山岩製の素材を用い，下面は無脚である。644は破損品で，長径9.5cm，短径14.3cm，厚さ5.9cm，重さ1200gを測る。平面形は破損しているため形態は不明である。上面な滑らかな窪んだ面であるが，磨耗痕は認められず，風化のためか大小の窪みが認められる。下面は平坦面を呈している。645は完形品で，長径18.6cm，短径15.8cm，厚さ4.0cm，重さ1535gを測る。上面は滑らかな窪んだ面が観察される。下面は平坦面を呈している。

第3節　小　結

遺物には縄文時代は吉田式土器，塞ノ神式土器がⅣ，V層にそれぞれ出土した。これに伴う石器も吉田式土器には小形石鏃（三角鏃，平基式石鏃），塞ノ神式土器には大形石鏃（長身鏃，凹基式長脚鏃），石匙（横形，縦形，不定形）が伴い，石斧は出土しなかった。また剥片石器は塞ノ神式に伴うことも確認できた。

このように土器とこれに伴う石器の分類ができたことと，剥片の多量さ，石鏃に半製品がみられることなどについても注目される。

またこれ等のほか石坂系土器，新型式の土器の出土は新しい知見として注目される。青磁，白磁は12〜13世紀を上限とし，15〜16世紀までわたることに加え台座等の出土は本遺跡が寺院跡としての性格を物語るものと考え，現存の文献，口伝等にもなく廃寺となった寺の一端をうかがうことができる。

第Ⅶ章　総　　括

第１節　遺跡としての環境

小山遺跡は薩摩半島基部の台地を，思川の一支流が開析して生じた小さな谷底平地に立地する遺跡である。平地の幅は 100 m 余り，東西 300 m 程にのびて紡錘形の盆地を形成し，東端は山地がせまって狭隘となり，急傾斜をなして下り，思川の支流に開口する。このあたりの対岸には鍋谷の岩陰遺跡がある盆地は三方を山地で囲まれ，東端は峡谷となり周辺地域からは隔絶されて別天地を形成している。

縄文の遺跡地は，多くは河谷に臨む台地・段丘上，あるいは扇状地上などに存在し，水利があり交通の便が得やすい場所が選地されるのが普通である。南九州の遺跡地について見ても，殆どが台地・丘陵・河岸段丘などに立地し，また洞穴，岩蔭なども選ばれる場合もあるがこれとて同様な条件を備えたものである。これらの遺跡地が開放的な環境を備えているのに比べ，小山遺跡の場合は他と大いに趣を異にし，閉鎖的な孤立した山間の盆地が選地されている。きわめて特殊な自然環境を備えた遺跡地というべきである。

台地・丘陵などは攻撃に対して防禦しやすく，退路を断たれる恐れも少ないが，谷底，ことに盆地の場合は防禦が困難で，逃げ道がない。ただ外敵の目から遮蔽されて消極的に保身をはかることが唯一の生きのびる方法であったと思われる。したがってこのような小盆地が選ばれて遺跡地となった例はほとんどしられていない。

上に述べたような不利な条件を有したにもかかわらず小山は遺跡地として形成された。しかも周辺の吉田大原遺跡や鍋谷遺跡の場合は好条件に恵まれながら，大原遺跡では石坂式・吉田式の２型式の期間，鍋谷遺跡では塞ノ神 Ad 式・塞ノ神 Bd 式・　式の３型式の期間継続したにすぎないが，小山遺跡では縄文早期・前期・後期・晩期の４期17型式と歴史時代の略１時期で，かならずしも全期継続ではないが，たびたびこの地が選ばれて，しばしば人間活動の場となっていることを示し，その利用期間は前２遺跡をはるかにしのぐものがある。一見不利な条件にある小山遺跡が，先史時代・歴史時代を通じて，人間活動の場としてかくの如くしばしば選ばれ，利用されたのは如何なる理由によるものであろうか。

第２節　遺跡の様相

小山遺跡の地層には，第３層に鬼界カルデラ起源とされる赤ホヤ層（新井房夫・1978）がみられ，第６層に桜島起源ではないかと考えられている軽石層があり（加藤芳朗・1981），この層は鹿児島市川上町五反田５層・溝辺町石峰遺跡５層・志布志町東黒土田遺跡５層・志布志町井手平遺跡６層に比定される。上記４地層に包含される火山ガラスの屈折率測定を鹿児島大学大庭昇教授に測定して頂いたのでその結果を次に掲げる。

火山ガラスの屈折率（20℃測定値に温度補正）

試料No.	試料採取地	地層名	最大屈折率(Gmax)	最小屈折率(Gmin)	測定対象
1	鹿児島市川上町	加栗山五反田5層	1.526	1.510	※
2	姶良郡溝辺町	石峰 5層	1.517	1.510	※
3	曽於郡志布志町	東黒土田 5層	1.498	1.488	※
4	同 上	井手平 6層	1.510	1.498	※※

※ 帯紅（赤）色透明火山ガラスについて測定。

※※ 著しく風化・酸化しているため，セン イ状～裂片状無色透明火山ガラスについて測定。

1981．2．13 大庭昇 測定

火山ガラスの屈折率からみた層準対比

1．試料No.1とNo.2は，最大屈折率において完全に一致し，同一層準に対比できるものと判断される。

2．試料No.3とNo.4は，No.4の試料が著しく風化・酸化していたため測定対象が異なるが，最大屈折率および最小屈折率共に近似した値（特に最大屈折率について）を示すことから，ほぼ同一層準に対比されると考えられる。

3．しかし，試料No.1～No.2グループと試料No.3～No.4グループとは，屈折率からみて，時代的に余り離れていない異なる層準に属するように思われる。

以上が大庭教授による測定の成果であるが，上記の地層について，指宿高校教諭成尾英二氏が追跡調査を行われた結果，これらは桜島起源の火山噴出物の堆積によるもので桜島付近では4層に分れるという。

先史時代の遺物堆積状況から見ると，この軽石層を界として直上の地層からは縄文早期初頭の遺物が出土し，直下の地層からは旧石器時代終末期の遺物（細石器）が出土するという現象がやや広域に認められている。この桜島起源と考えられる軽石層は，第3層にみられるアカホヤ層とともに，出土遺物の年代の前後関係を知る上で極めて有力な鍵層である。本遺跡ではこの二つの鍵層がよく残っていることから遺物の編年に有効な手がかりとなった。

第3層（アカホヤ層）と第6層（桜島起源軽石層）とに挟まれた第4層（青灰色粘質層）と第5層（黒褐色粘質層）とは本遺跡で最も主要な遺物包含層となっている。第4層からは吉田

式・前平式・円筒形条痕土器など若干の早期土器を出土するが，主体をなすのは前期の塞ノ神式土器である。塞ノ神Aa式・塞ノ神Ab式・塞ノ神Bd式を出土するが，塞ノ神Aa式が出土量の大半を占めこの層の主要な部分を形成する。この層に出土した集石群13基がみられ，大形の安山岩礫を用い，まとまりのよい密集型を呈している。石器も層序による共伴関係は明瞭であるが，いま一つ石器自体の定形化があきらかでない。

第4層出土の土器として貝殻腹縁による条痕文を施す土器（第60，61図・図版23）がある。第3層～第4層に出土するもので，円筒形で底部は不明であるが，貝殻腹縁による器面調整を行ない，その上に貝殻腹縁による条痕文を施すものである。口唇部の外側稜線上に細かな刻目を施すものもある。新しい塞ノ神式の類とする考え方もあるようであるが，器形の相違・器面調整方法の相違・層序より推定される時期の相違などから考えて同類とはみられない。

第5層からは吉田式・前平式の他に1個体であるが石坂系の土器とみられるものが出土している。ここでは吉田式が主体で，出土量の過半数を占め，この層から発見された9基の集石群および，石器類も吉田式に共伴するものと考えられている。集石は第4層比べやや散漫な傾向がある。

石坂系とされる土器は第33図3・図版5の下部に示されるものである。円筒形平底と考えられ，口縁部でわずかに内弯している。口縁部には退化した紡錘形の把手が，横位と縦位に交互に付けられ，計4個あったものと考えられる。文様は貝殻腹縁によって口縁部には横位の連点文，把手以下には綾杉状連点文を施して，石坂式に見られた胴部の羽状条痕文に代えている。口唇部は平坦で内傾しているが，施文は見られない。石坂式には把手のあるものがあり，やや時期的に下るものであるが，この土器は更に後出のものであろう。石坂式・吉田式・前平式の補修孔は縦ながに設けられるのが普通であるが，この土器では円形の補修孔が穿たれている。

また第5層では吉田式と前平式とが出土しており，両者の層序関係を知るには絶好の条件を備えていたわけであったが，調査後10年以上の歳月を径過した今日，残念乍ら第5層内のこまかな出土資料は求めるべくもない。

第3節　遺跡の性格

小山遺跡では，先史時代にあっては，しばしば人間活動が行われた中で，出土遺物の量から見て早期と前期に重点が見られ，中でも早期では吉田式の時期に最盛期があり，その期間は，一つの土器型式の継続期間を50年と仮定するならば，小山遺跡の場合は吉田式とその移行形と見られる土器が一部に出土する状況であるから，少くとも50年に近いものであったろう。この時期にのこされた遺構としては集石群9ケ所が，北に山を背おった日だまりの場所に残されている。

前期では塞ノ神 Aa 式の時期が最盛期であった。この時期がはじまったのは，吉田式を早期中葉とすれば，塞ノ神 Aa 式が前期前葉に当るところから，吉田式の終末期から塞ノ神 Aa 式の開始期までは相当長期間を経過していたわけである。塞ノ神 Aa 式の土器には大形化の傾向が見られ，口径50cmに及ぶものがあり相当大量の食物が煮炊されたと思われる。この時期には13ケ所の集石群が，吉田式の集石群の東南に隣接して残されている。

上述２時期の，遺跡としての性格であるが，それぞれ長期間にわたる人間活動の場であったことは間違いないが，竪穴・柱穴などの定住を示す遺構はぜんぜん発見されず，また石器には建築に必要な木材に加工するための石斧類が見あたらない。

吉田式の時期には，本遺跡に近い加栗山遺跡においては，中央の広場を囲んで15ケ所の竪穴住居址と60ケ所の土拡群が配置された集落が発見されている。加栗山遺跡と同型式の土器文化を有した小山遺跡の人々が，定住を意図したのであれば当然竪穴などの定住施設を構築したであろう。これがなかったということは，別な人間活動が行われたと考えなければならない。

小山遺跡は谷底の小盆地に立地したことは前に述べた。盆地内には湧泉もなく，外界との交通には，背後の山を越えるか，東方へ通ずる峡谷をつたって行く外はなかったであろう。外敵に対する防禦的機能はほとんど皆無に等しいものであったろう。

集石群の存在，多量の土器の出土は食料の煮炊，調理のあとを示し，多くの石片の出土は石器の生産が行われたことを示す。

自然的条件と遺跡の状況からみて，小山遺跡は長期にわたって利用されたキャンプ地であったと考えられる。最も良く利用されたのは吉田式・塞ノ神 Aa 式の時期であり，その他の各時期も時に応じて利用されたものであろう。それだけに小山がキャンプ地としてはすぐれた条件をそなえていたといえよう。

歴史時代には柱穴・石列など明らかに15，16世期に何等かの建造物が存在したことが示されている。小山遺跡の発掘調査が行われる直前には，２軒の住家があり，谷底の小平地の畑地と密柑園があるだけであった。それ以前の時期はおそらく密柑園や畑の出作り小屋があった程度であろう。この地は隠棲の場所という感じがある。僧家の墓の一部と考えられる台座・青磁・白磁の出土等から寺院址が推定されるが，瓦等の発見もなく草葺きの小建築であったと思われ中世以降まで存続したことは考えられない。

図　　版

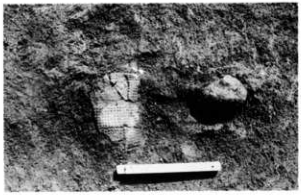
遺　跡　遠　景

発　掘　風　景

図版2

集石出土状況（C～Ⅲ区）

吉田式土器



吉田式土器

塞ノ神式土器

岩崎式土器

円筒形土器

図版4

石　匙

石　鏃

遺物出土状況

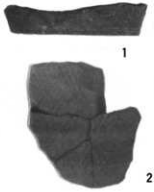
礫列出土状況

こうがい

土師器

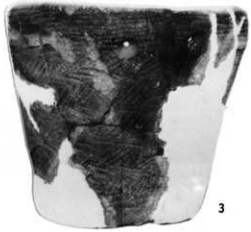
土　層

シラス混り
Ⅱ　層
Ⅲ　層
Ⅴ　層



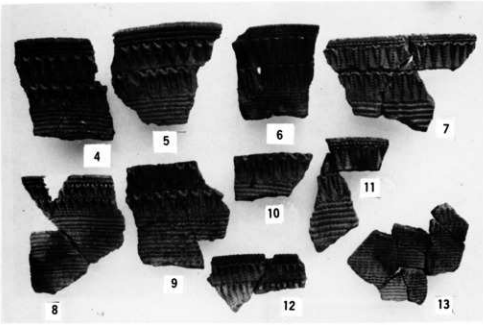
1

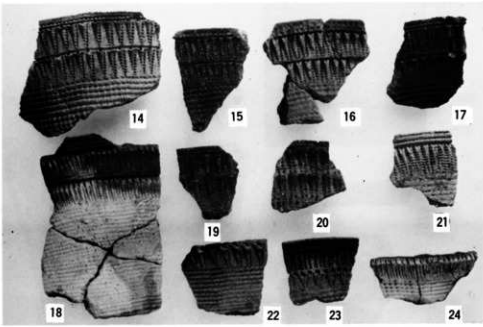
2



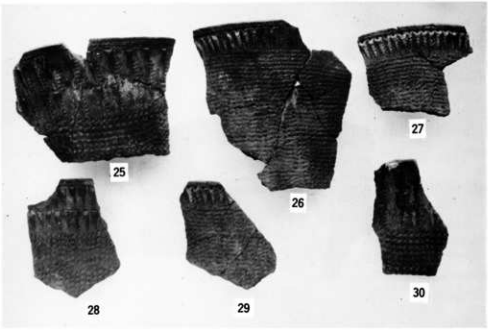
3

石坂式土器・石坂系土器

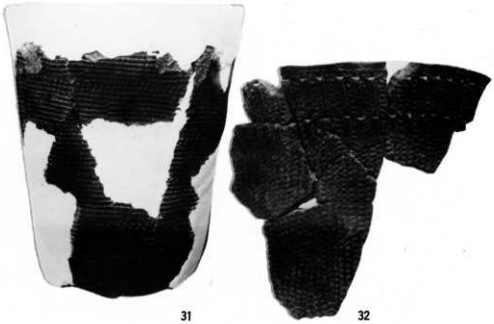




吉田式土器

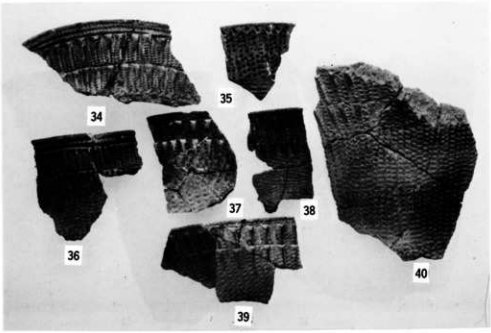


吉田式土器

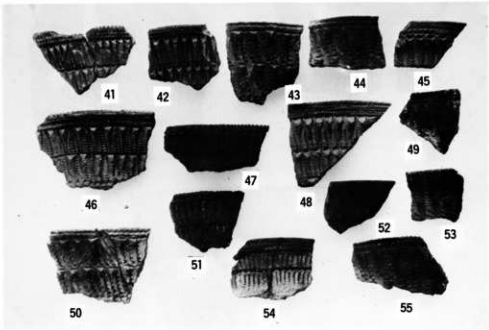


吉田式土器

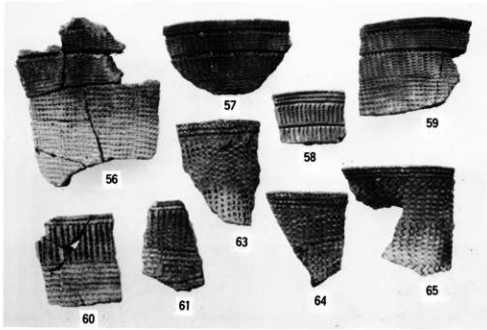
33



吉田式土器



吉田式土器（口縁部）

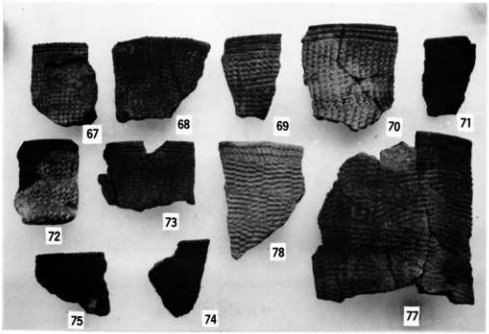


吉田式土器（口縁部）

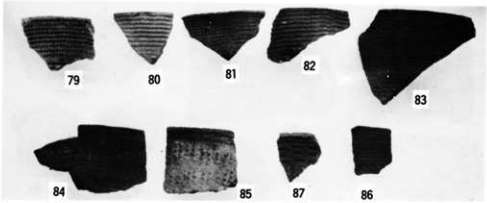
62

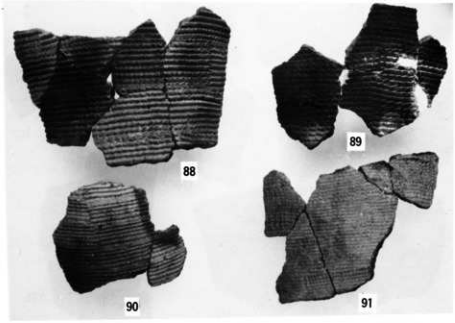
66

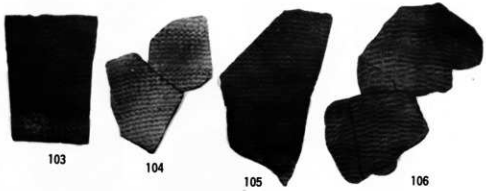
76



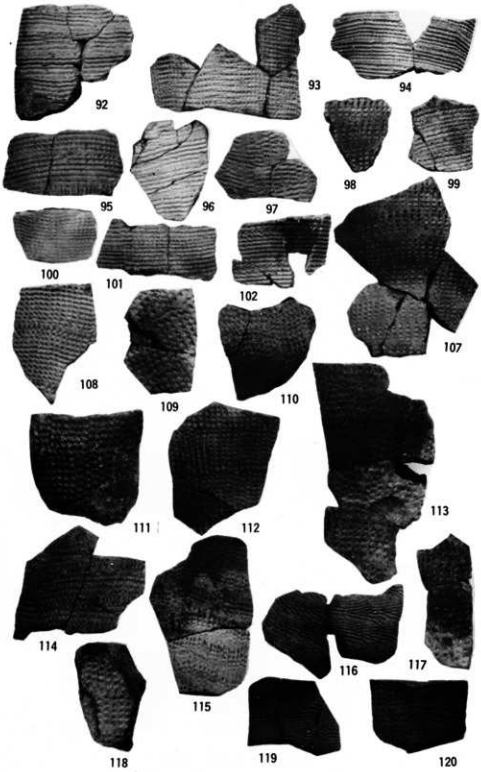
吉田式土器

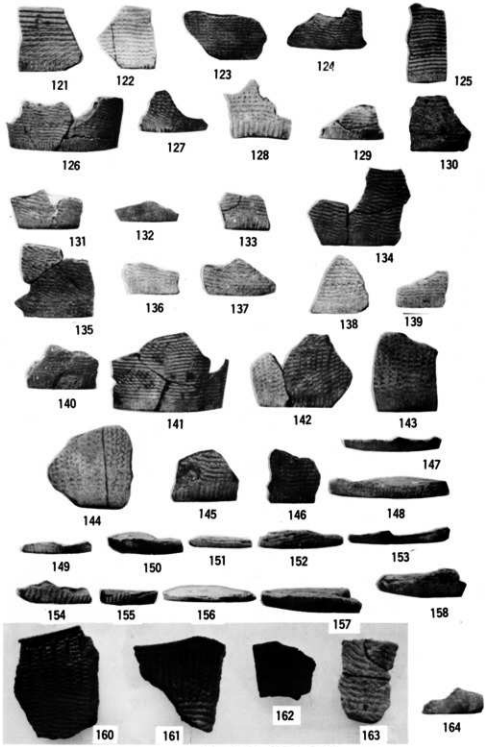




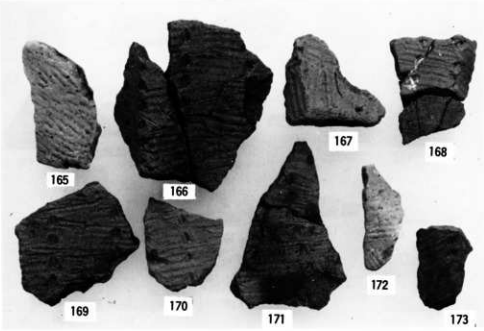


吉田式土器（口縁部・胴部）


92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120


121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
160
161
162
163
164

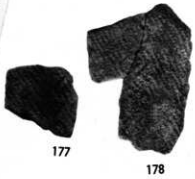
吉田式土器（底部・角筒）



前平式土器

円筒形土器

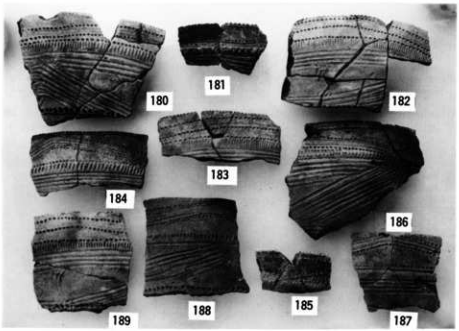
押形文土器



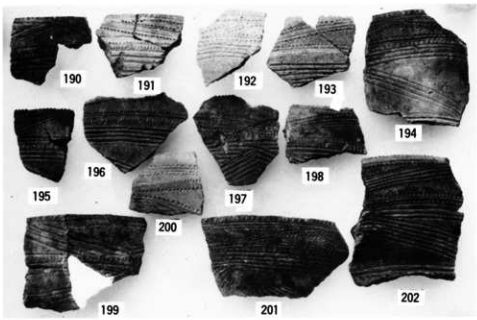
平栫式土器

179

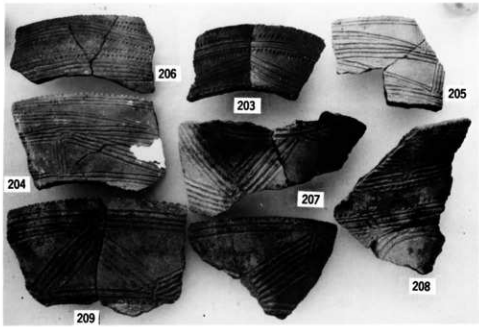
塞ノ神Aa式土器



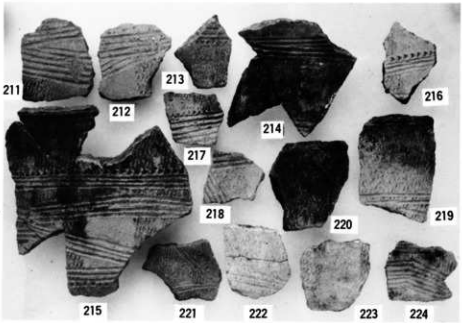
塞ノ神Aa式土器（口縁部）



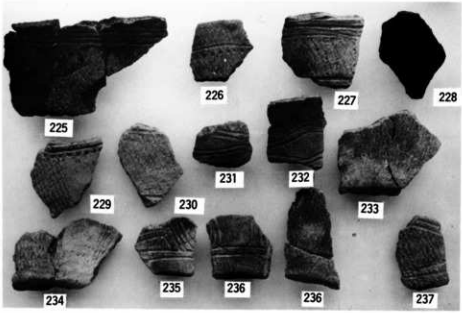
塞ノ神Ａa式土器（口縁部）



塞ノ神Aa式土器（口縁部）

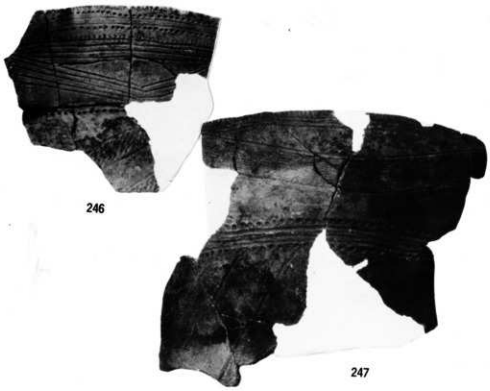


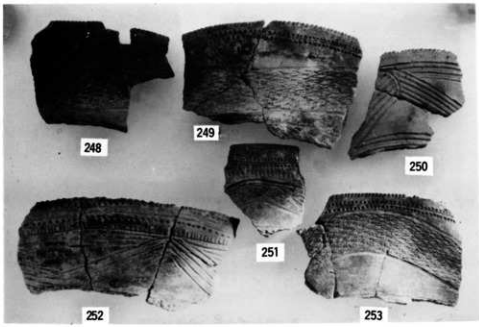
塞ノ神Aa式土器（胴部）



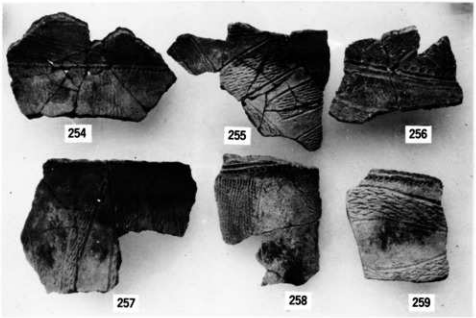
塞ノ神Aa式土器（胴部・底部）

図版18

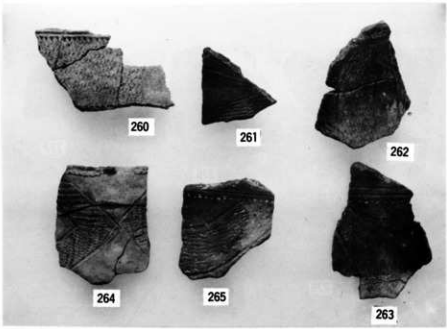




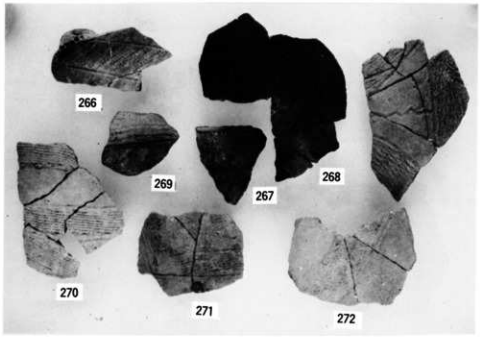
塞ノ神Ab式土器



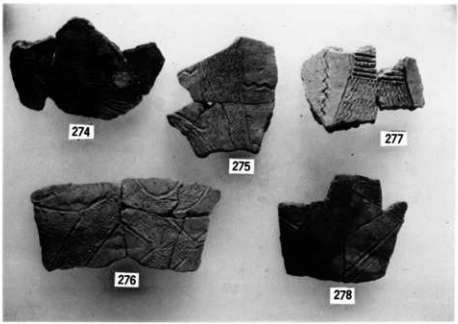
塞ノ神Aa式土器（胴部）



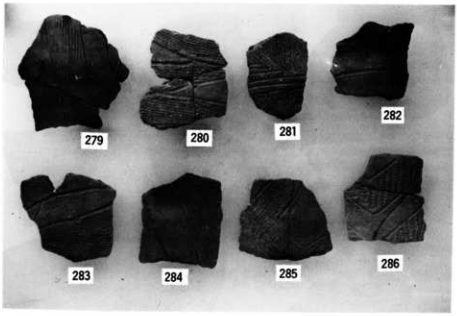
塞ノ神Ab式土器（胴部）



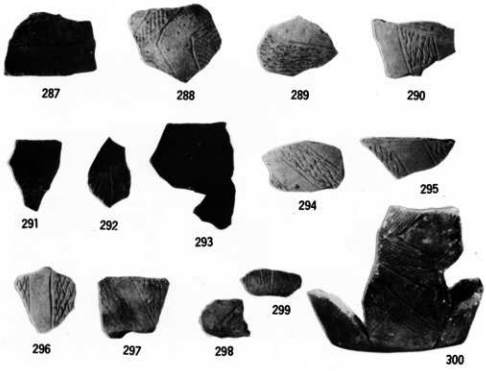
塞ノ神Ab式土器（胴部）



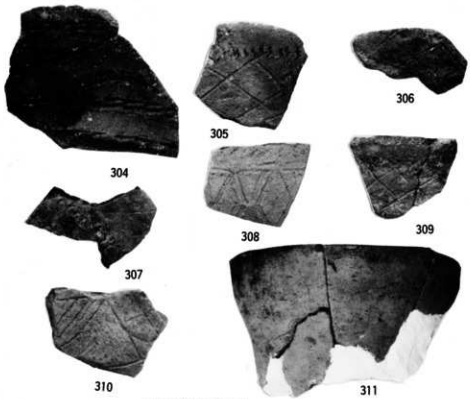
塞ノ神Ab式土器（胴部）



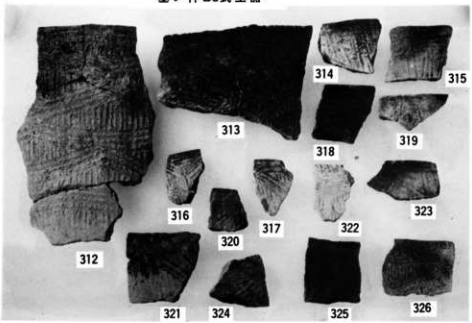
塞ノ神Ab式土器（胴部）



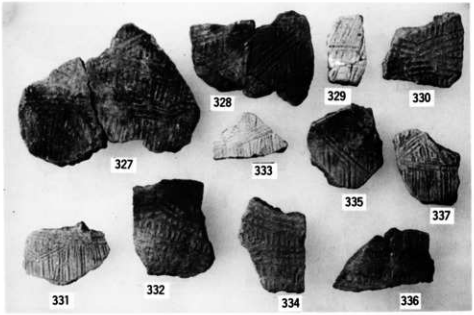
塞ノ神Ab式土器（胴部・底部）



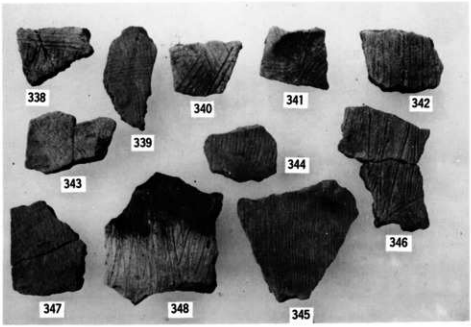
塞ノ神Bd式土器



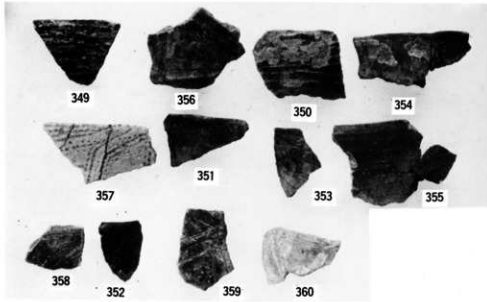
新型式土器


328
329
330
327
333
335
337
331
332
334
336

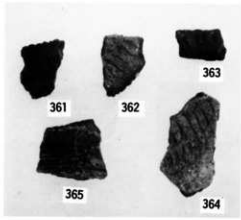
新 型 式 土 器


338
340
341
342
339
343
344
346
347
348
345

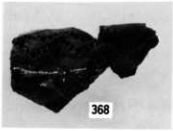
新 型 式 土 器



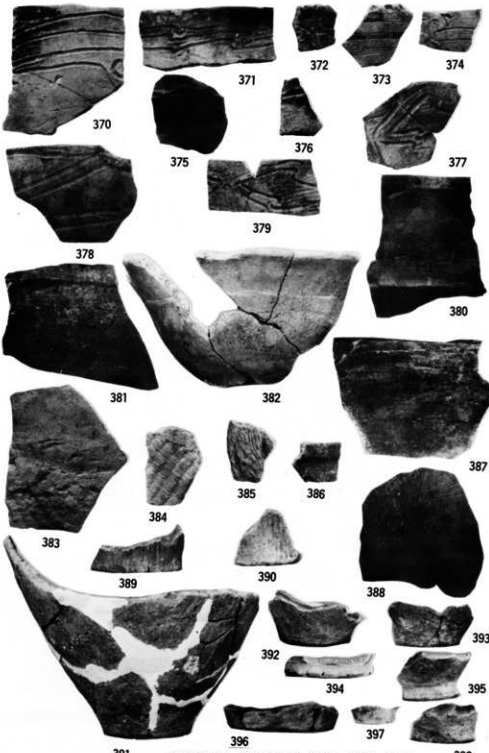
轟式・深浦式・点線文土器



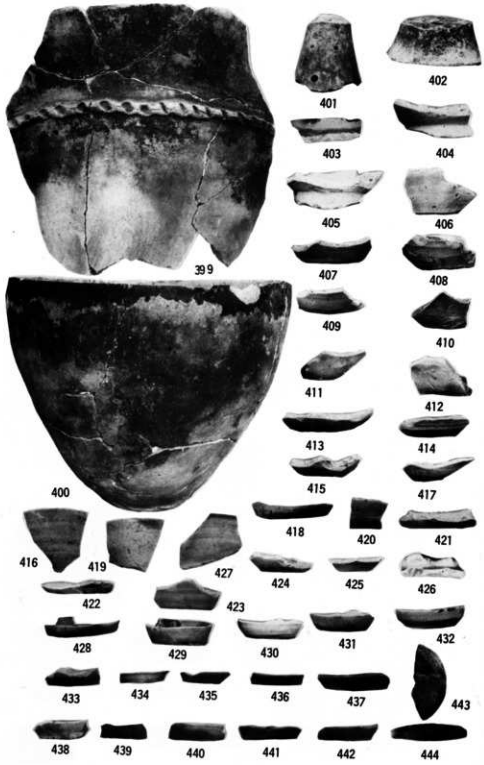
爪形文土器



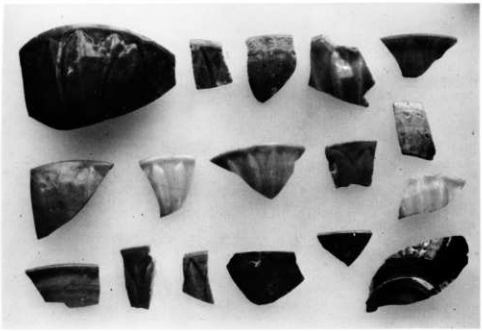
春日式土器



岩崎式土器・指宿式土器・後期・晩期・底部


399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
417
416
419
427
418
420
421
424
425
426
422
423
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
443
438
439
440
441
442
444

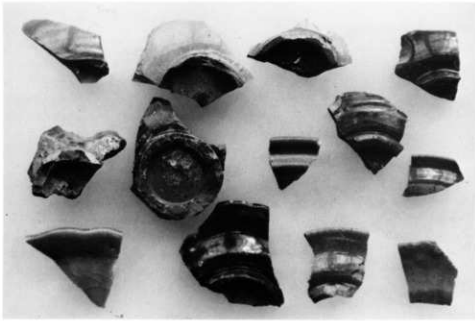
土師器・須錘車土器



青　　磁

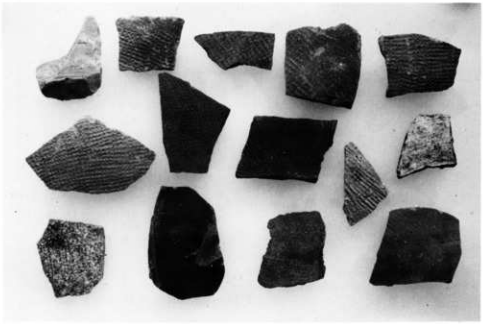
青　　磁

図版28

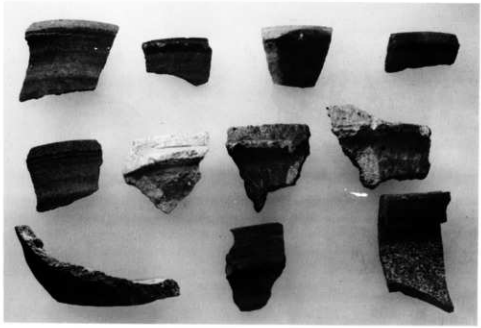


青　　磁

白磁・染付



須　恵　器



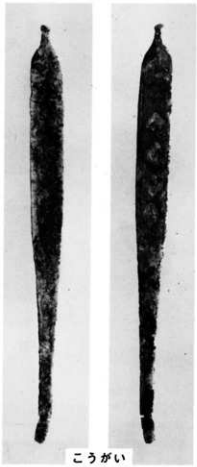
須恵器・滑石製石鍋・すり鉢

図版30

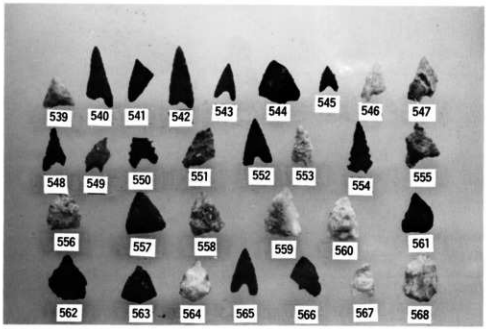
須恵器

古銭

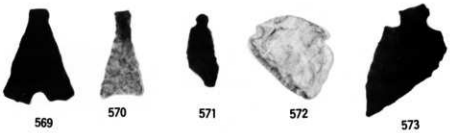
台座

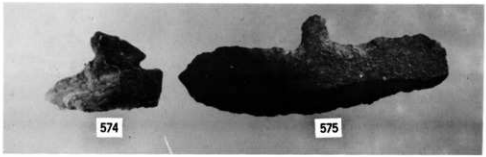


こうがい



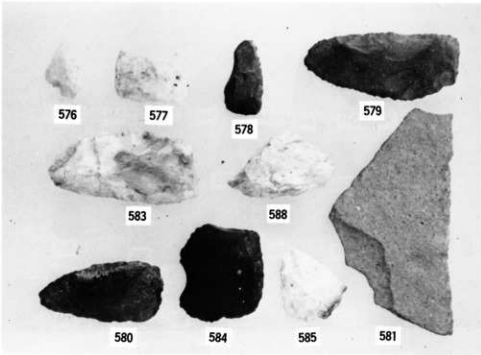
石　器（石鏃）



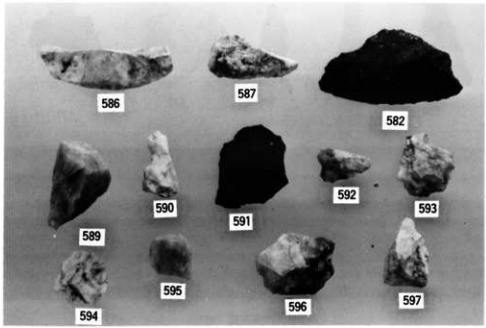


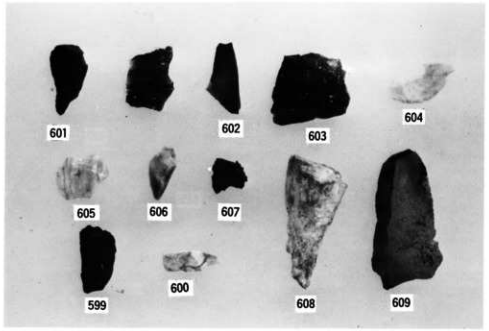
石器（特殊石器・石匙）

図版32

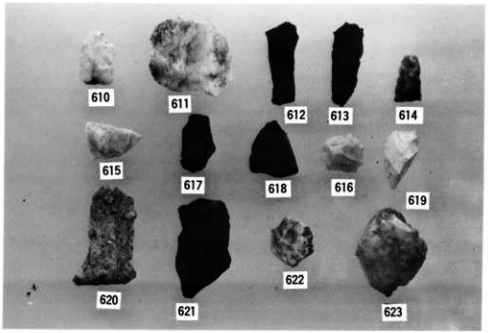


石器（石匙・スクレイパー）

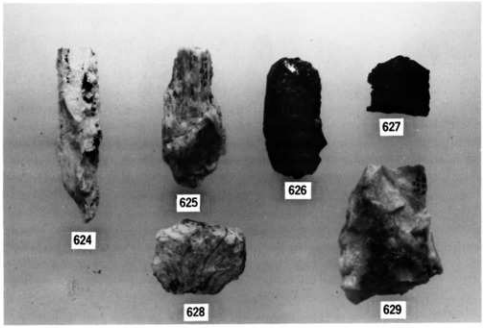




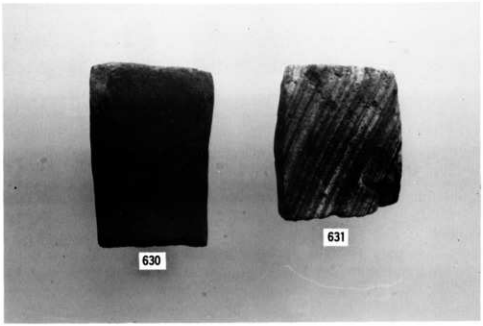
石器（スクレイパー・剝片石器・石槍・削器）



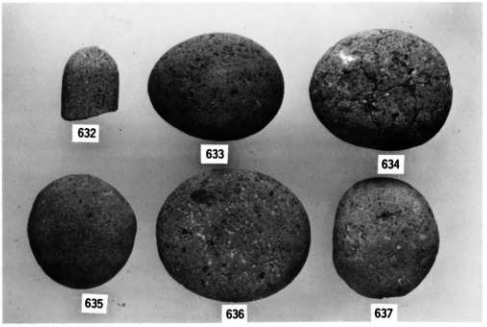
石器（剝片石器・削器）



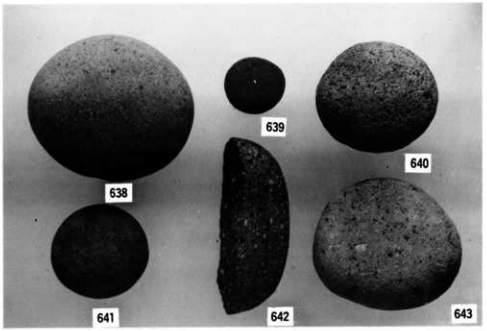
石　器（磨石・石核）



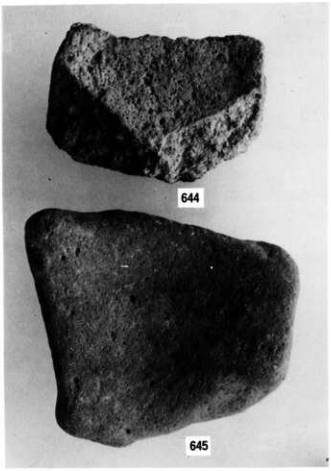
石　器（砥石）



石　器（磨石）



石　器（磨石）



石　器（石皿）

あ と が き

霜柱は10cmにもなった。朝晩の冷え込みは三方が山に囲まれているために遅く明け，早くかげることで，ことのほか厳しかった。

そんな毎日の発掘調査であったが，作業員の方々の協力で順調に進捗し，出土遺物も多種，多様なものとなった。

調査にあたっては，見通し断面，すべての遺物の平面実測とできる限り詳細な記録をとることを心がけ，また本報告もできるだけの努力はしたつもりである。

最後に，発掘調査から報告書作制の本年まで，いろいろの方々に，さまざまのはげまし，協力をいただいた。心から感謝申し上げむすびとしたい。

小山貝跡正誤表

頁	行	誤	正
25	20	2時間	2時期
29	第33図		1 2 3
50	16	鈍角	鋭角
58	14	肥原	肥厚
70	16 18	・形文	点形文
72	第62図	舟形文	点形文
73	第63図	管指	指管
83	27	「洪武通宝」	「洪武通寶」
110	19	式	式

谷ノ口　遺跡

例　　言

1．この報告書は，九州縦貫自動車道（加治木ー鹿児島線）建設に伴う谷ノ口遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団からの受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3．調査の組織は，調査組織及び調査の経過の中で記した。

4．本書の執筆・編集は，担当職員の異動により，立神が代って行った。

目　　次

Ⅰ　調査に至るまでの経過……2

Ⅱ　調査の組織及び調査の経過……3

Ⅲ　遺跡の位置及び環境……4

Ⅳ　調査の概要……7
　土　層……8
　遺　構……9
　遺　物……10

Ⅴ　む　す　び……11

挿　図　目　次

第1図　谷ノ口遺跡の位置及び周辺遺跡……5
第2図　谷ノ口遺跡周辺の地形図……6
第3図　谷ノ口遺跡グリット配置図……7
第4図　谷ノ口遺跡土層断面図……8
第5図　谷ノ口遺跡柱穴実測図……9
第6図　谷之口遺跡滑石製石鍋実測図……10

表　目　次

表1　谷ノ口遺跡柱穴計測表……10

図　版　目　次

図版1　谷ノ口遺跡の遠影……12
　谷ノ口遺跡柱穴……12
図版2　谷之口遺跡石鍋出土状況……13
　滑石製石鍋……13

Ⅰ．調査に至るまでの経過

九州縦貫自動車道は，昭和43年３月６日第18回国土開発幹線自動車道建設審議において，九州関係各路線とともに鹿児島県内では，九州縦貫自動車道加治木ー鹿児島間の整備計画が決定された。ついで昭和43年４月１日建設大臣から九州縦貫自動車道鹿児島線加治木ー鹿児島間25kmについて，日本道路公団に対して，工事施行命令が出された。

日本道路公団は「日本道路公団の建設事業等，工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に基づき，埋蔵文化財の取り扱いについての協議を求めた。これに対し鹿児島県教育委員会では，昭和43年12月17日～昭和44年１月20日の間，県内の考古学研究者を調査員に依頼して埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し，26個所の周知の遺跡の範囲確認を行った。

九州縦貫自動車道鹿児島線の路線は，この報告をもとに決定されたが，路線内の未確認の遺跡については昭和46年１月，分布調査を実施し，その結果建馬場（加治木町），松木田（姶良町），小瀬戸（姶良町），小山（吉田町），谷ノ口（吉田町），上城城址（吉田町），宮後（吉田町）の埋蔵文化財包蔵地６個所と中世の城跡１個所が確認された。

鹿児島県教育委員会は，この調査結果をもとに日本道路公団とそれらの遺跡の取り扱いについて協議する一方発掘調査の実施について鹿児島県考古学会（会長河口貞徳氏），鹿児島県史跡調査会（会長河口貞徳氏）等に協力を依頼した。

一応の発掘調査体制が整ったため，昭和46年８月10日，日本道路公団と鹿児島県教育委員会は，委託契約を行い，まず小瀬戸遺跡を昭和46年８月20日から発掘調査を実施する運びとなった。

本遺跡の発掘調査は，吉田町小山遺跡の発掘調査期間中であったが，別途調査班編成を行い昭和46年11月10日～11月18日で終了した。

Ⅱ．発掘調査の組織及び調査の経過

調査の組織

調　査　主　体	鹿児島県教育委員会	
調　査　責任者	社会教育課長	寺師　次夫
調査担当事務総務	社会教育課文化係長	盛園　尚孝
調　査　担　当		立神　次郎

調査の経過

分布調査の結果，谷ノ口遺跡は，県道鹿児島一蒲生線，吉田町本城バス停留所近く吉田町役場から南東方へ約400ｍの標高約138.6ｍの畑地に位置している。県道と遺跡との間には本名川が蛇行して流れ，両岸は本城の水田地帯となっている。遺跡の周辺は，人家が点在し，東側は標高201ｍの山が迫しせまるようにしている。

発掘調査は，井ノ上チヨ氏宅の西側に隣接している畑地に，九州縦貫自動車道建設予定地の幅杭と平行して，30ｍ×10ｍの範囲に2.0ｍ×2.0ｍのグリッドを任意に設定して，昭和46年11月10日より南端のCl－1～Cl－5区にかけて掘り下げ作業を実施した。層位に撹乱が認められたため，その範囲と遺物包含層を検出するため，Aa－2～Aa－5区，Be－1～Bh－1区，Ci－1～Ck－1区ご Ab－1～Ad－1区，Bh－2～Bh－5区の発掘作業を進めた結果，Bh－1区からA区にかけては，縄文時代から弥生時代，奈良，平安時代にいたるまでの遺物がⅡ層より混在してみられた。またBe－1区より径約40㎝の円状に焼土が確認されたため，約1ｍの拡張作業を実施した。さらに，Bh－1区より柱穴遺構の検出がなされたため，Bg′－1区 Bh′－1区を1ｍ，Ci－1区を0.5ｍ，さらにBh－2～Bh－5区の拡張を実施し，柱穴遺構の確認調査を実施した結果，14個の柱穴遺構が検出された。

その間の調査経過は下記のとおりである。

調査日誌抄

発掘調査期間　昭和46年11月10日～11月18日

11月10日　発掘調査開始。作業員に発掘調査説明と調査上の注意を行う。草木下払い作業。トレンチ設定作業。

11月11日　Cl－1～Cl－5区，Aa－2～Aa－5区掘り下げ作業。

11月12日　Be－1～Bh－1区，Ci－1～Ck－1区の掘り下げ作業。

11月13日　Be′－1（幅1ｍ），Bg′－1，Bh′－1，Ci－1区を拡張し，掘り下げ作業，

11月14日　Bh～2～Bh－5区の掘り下げ。Bg′－1，Bh′－1区の遺構掘り下げ作業。

11月16日　Ah－1～Ad－1区掘り下げ作業。Cl－1区の東壁の土層実測。

11月17日　Be－1 Bh－1区，Ci－1区の西壁の土層実測。

11月18日　各掘り下げたトレンチの土層実測作業。教育委員会へあいさつ。調査終了。

Ⅲ．遺跡の位置及び環境

谷ノ口遺跡は，鹿児島県鹿児島郡吉田町本城谷ノ口に位置している。遺跡の位置する吉田町は鹿児島県のほぼ中央部，すなわち薩摩半島の基部に位置し，鹿児島郡に属しており，北部は姶良郡蒲生町，東部は姶良郡姶良町，西部は日置郡郡山町，南部は鹿児島市に隣接し，鹿児島県の県庁所在地の鹿児島市の元標より北方へ約16.1kmの地点に所在している。

吉田町の地形は，略長方形を呈した地形となり，東部は赤崩を中心とする赤崩火山峰が連なり，西部は花尾岳及び雄岳を中心とした諸連峰がそびえており，山間部及び傾斜地の示める割り合いが大きく，土質は平地で第四紀層（沖積平地）で，山岳地帯は第三紀層（水成岩）で火山灰シラス土壌である。このような地形で構成される吉田町は，思川・本名川・稲荷川などの河川が高峰を源として，山間を湲流が縫って鹿児島湾へ流入し，北部地区は水田地帯となり，南部地区は畑地帯となっている。また河川流域の低地では河岸段丘の発達により沿岸は水田地帯となっている。

本遺跡の周辺は，吉田町のほぼ中央部に位置し，北部から西部，南部にかけては，本名川が蛇行しながらその両岸に立地する水田地帯とともに遺跡地を取り巻くような地形を呈している。遺跡地の北西部約500mの所には本城小・吉田町役場が所在し，役場南側沿いは本名川が流れ，水田地帯となり，さらに北側は県道鹿児島－蒲生線が山沿いを走っている。遺跡の周辺は民家が点在し，東部は標高209.7mの山がせまり，本名川によって形成された河岸段丘で，井之上チヨ氏宅に隣接した標高約138.6mの畑地が遺跡である。水田との比高差は約8m前後である。

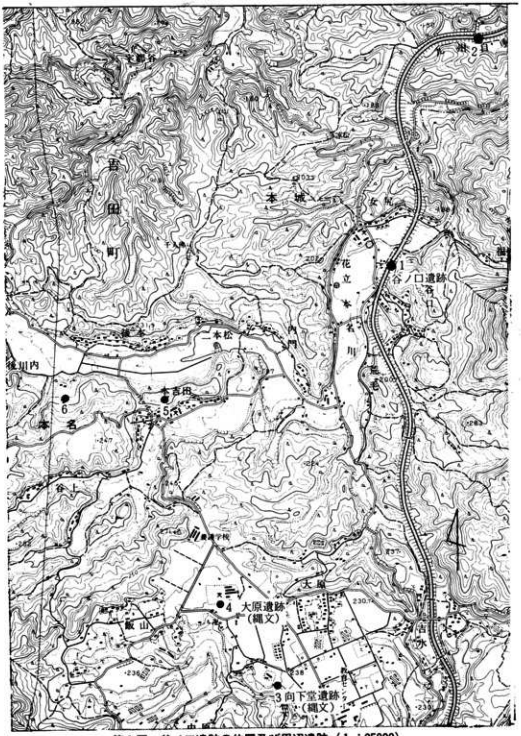
谷ノ口遺跡の周辺及び吉田町の遺跡についてみれば，吉田町は地形の制約を受けている関係から非常に少ないが，室町から江戸時代にかけての五輪塔やや中ノ神，その他多くの石造物は多く見られる。

周辺遺跡には[註①]，小山遺跡（縄文），向下堂遺跡（縄文），大原遺跡（縄文），柚原遺跡（不明），八幡神社（室町）などの遺跡が周知されている。小山遺跡は，本遺跡と同様，昭和46年度に九州縦貫自動車道建設に伴う事前調査により記録保存のなされた遺跡である。

吉田町には，縄文時代早期の吉田式土器の標式となった大原遺跡（4）が知られている。大原遺跡は，同町本名の吉田南中の校庭に所在し，昭和27・28年に河口貞徳氏により発掘がなされている。遺跡は第Ⅱ層赤褐色土層，第Ⅲ層黒褐色土層に遺物が包含され，主に円筒形平底で横位の貝殻腹縁による押引き文が施文された土器が出土し，吉田式土器と命名されている。第Ⅲ層よりは，主に石坂式土器が出土し，吉田式土器は石坂式土器に後継する土器形式であることが判明されている。[註②]

註① 鹿児島県教育委員会「鹿児島県市町村別遺跡地名表」 1977・3

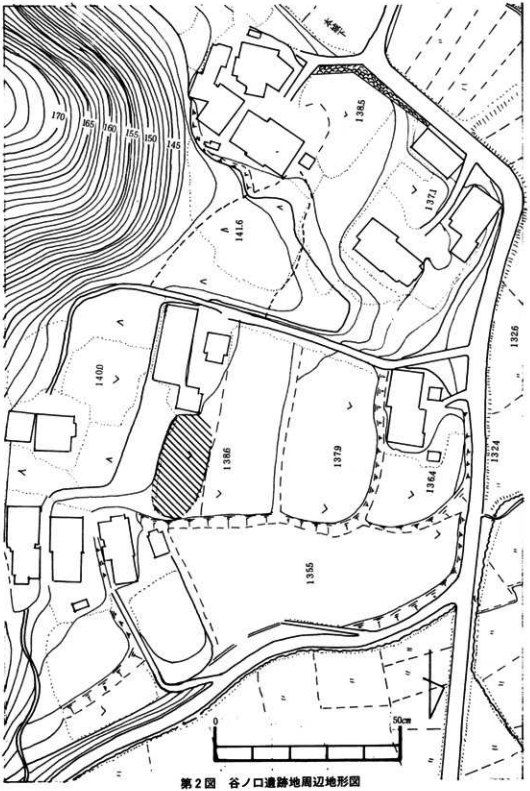
註② 河口貞徳先生古稀記念著作刊行会「河口貞徳先生古稀記念著作集」上巻 1981・10



第1図　谷ノ口遺跡の位置及び周辺遺跡（1：25000）

1．谷ノ口遺跡，　2．小山遺跡（縄文），　3．何下堂遺跡（縄文）

4．大原遺跡（縄文）　5．柚原遺跡（不明）　6．八幡神社（平安）

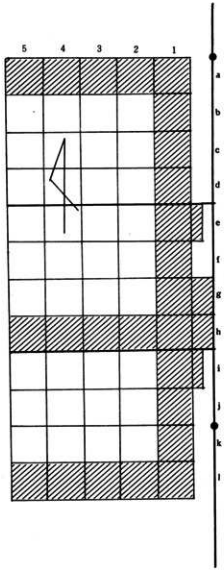


第２図　谷ノ口遺跡地周辺地形図

Ⅳ．調査の概要

谷ノ口遺跡は，吉田町のほぼ中央部，本名川によって形成された河岸段丘上の標高約138.6mの畑地に位置している。

発掘作業は，井之上チヨ氏宅と隣接した畑地に，九州縦貫自動車道の幅杭と平行に，30m×10mの範囲に2m×2mのグリッドを設定し，Aa－1，Aa－2，Be－1，Be－2，Ci－1，Ci－2とした。



第3図　谷ノ口遺跡グリッド配置図

調査は，確認調査から始め，まずグリッドの南端のCl－1～Cl－5区にかけて掘り下げ作業を実施した。その結果，地表面下30～50cmでⅡ層の黄褐色土層となるが，さらに下層下を確認するため，50cm幅で南壁に沿って掘り下げた結果，Ⅱ層・Ⅲ層との撹乱がみられ，一部はⅣ層まで影響が見られ，遺物は現代陶器の数片の散見のみで他は見られない。そのため，この撹乱部の範囲と，遺物包含層を探すため，B区において，Be－1～Bh－1区にいたる8m×2mとグリッドの北端Aa－1～Aa－5区について，それぞれ掘り下げた結果，Bh－1，Aa－1～Aa－5区においては，縄文時代晩期から弥生時代，奈良・平安時代にいたるまで遺物が混在して認められた。Be－1区では東壁近くに焼土がみられたため，Bl′－1区を0.5m拡張した結果，径約40cmのほぼ円状のひろがりがみられた。Bb－1区では柱穴と思われる遺構が検出された。

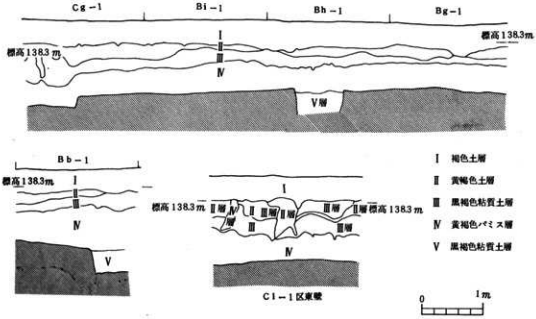
さらに，柱穴や焼土が確認されたため，Ab－1～Ad－1区，Bh－2～5区，Ci－1～Ck－1区に掘り下げ作業を行った。その結果，成川式系土器，土師器，現代陶器が混在して見られ，ほとんどの区においてⅡ層は上位からの影響がみられ，削平されている個所が多かった。柱穴などの遺構の検出がなされなかったため，Bg′－1区とBh′－1区は1m，Ci－1区は0.5mの拡張を行い掘り下げた結果，柱穴の検出がなされたが，東壁は九

州縦貫道の幅杭となるため拡張は中断した。柱穴は14個の検出がなされ，大きさは約30cm～50cm，深さは約30～70cmである。柱穴内の埋土は，すべてⅡ層黄色土で，Ⅴ層まで達しているものもみられた。

当時は，黄褐色パミス層を地山と判断し，下部の調査は行なわず，確認調査のみで調査は，終了した。

① 土 層（第 図）

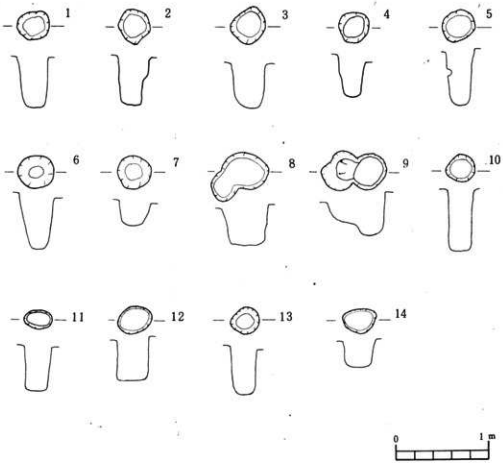
本遺跡は，本名川によって形成された河岸段丘上の標高約138.6mの畑地に位置している。土層は，Ⅰ層が褐色土層で耕作土である。Ⅱ層は黄褐色土層で，Cl－1～Cl－5区にかけては，現代陶器が数片散見され，BhからA区にかけては，縄文時代晩期から弥生時代，奈良平安時代にいたるまでの遺物が混在して認められたが，他区は認められなかった。Cl－1区においては，Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層との撹乱が認められる。さらに全区において上部は大幅な削平が認められる。Ⅲ層は黒褐色粘質土層で，約10～40cmの厚さをなしているが，全体的に見れば，約20cm程の堆積である。Bh－1区・Bi－1区・Bh'－1区・Bi－1区において上面に柱穴が14個所検出され，ⅣおよびⅤ層まで掘り込んでいる所も見られる。C1－1区においては撹乱が認められる。遺物は皆無である。Ⅳ層は黄褐色パミス層で，当時は地山と判断し，下層の掘り下げは実施しなかった。しかし，Bh－1区，Bb－1区においてⅤ層の一部を掘り下げた。Ⅴ層は黒褐色粘質土である。



第4図 谷ノ口遺跡土層断面図

② 遺 構（表Ⅰ）

本遺跡は，Ⅱ層の上部が削平され，撹乱をうけている個所が認められた。Bh－1区・Bi－1区，Bi－1区においてはⅢ層上面に柱穴14個が確認された。柱穴の埋土は，Ⅱ層黄褐色で，Ⅳ層黄褐色パミス層やⅤ層黒褐色粘質土層まで掘り込んでいる個所も認められた。しかし，Ⅱ層が撹乱を受けていたので柱穴の時期を明らかにすることは出来なかった。柱穴の規模については表Ⅰに示したとおりである。



第5図　谷ノ口遺跡柱穴実測図

表1　谷ノ口遺跡柱穴計測表

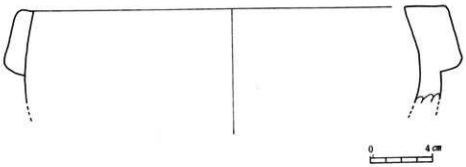
柱穴No.	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備　考	柱穴No.	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備　考
1	36	30	58		8	52	40	42	
2	38	34	54		9	70	42	50	
3	40	38	52		10	32	24	70	
4	34	32	48		11	32	20	48	
5	36	34	66		12	36	30	50	
6	40	36	62		13	32	30	56	
7	36	36	32		14	36	30	50	

③ 遺　物

本遺は，遺物包含層は確認されなかったが，Ⅱ層より現代陶器，縄文式土器，成川式系土器，土師器，白磁，滑石製石などの遺物が混在して出土した。これらの土器及び白磁は小片のため図化は出来なかった。

滑石製石鍋（第　図）

Bh－1区出土の滑石製の石鍋である。復元口径11.0cmを測り，口縁部は内弯し，口唇部は平坦に仕上げる。口唇部から胴部にかけて，幅2.5cm，長さ4cmの断面台形の凸帯を縦位に付ける。内外面ともノミ状の工具により縦位の器面調整を施す。器外面には煤が付着している。



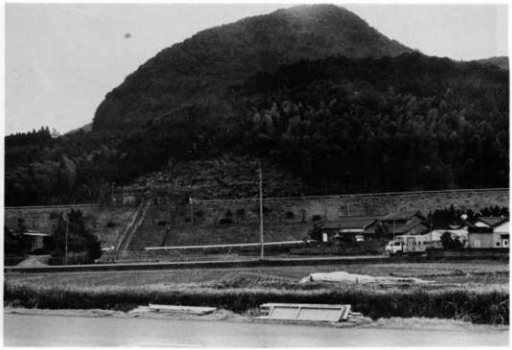
第6図　谷ノ口遺跡滑石製石鍋実測図

V. むすび

本遺跡は，縄文晩期から弥生時代，奈良・平安時代に現代に至るまでの遺物の混在が認められ，遺物包含層は確認されなかった。Ⅲ層上面においては，14個の柱穴と思われる遺構が検出された。柱穴の埋土はⅡ層であり，遺物は何んら検出されず，またⅡ層が大幅な削平や撹乱を受けていたため柱穴の時期と明らかにすることは出来なかった。さらに，柱穴の広がりは路線外へひろがるものと思われる。

以上，谷ノ口遺跡においては，Ⅳ層が黄褐色パミス層であったため地山と判断し，下層の調査は実施せず，確認調査のみで終了した。

図　　版



谷ノ口遺跡の遠景

谷ノ口遺跡柱穴

谷ノ口遺跡石鍋出土状況

滑石製石鍋

宮後遺跡

例　　言

1．この報告書は，九州縦貫自動車道（加治木ー鹿児島線）建設に伴って発掘した宮後遺跡の調査報告である。

2．発掘調査は，日本道路公団の受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3．調査の組織は，調査組織及び調査の経過の中で記した。

4．本書の執筆・編集は，担当職員の異動により，立神が代って行った。

目　　次

Ⅰ．調査に至るまでの経過…… 2

Ⅱ．調査の組織及び調査の経過…… 3

Ⅲ．遺跡の位置及び環境…… 4

Ⅳ．調査の概要…… 8
　土　層…… 8
　遺　物…… 10

Ⅴ．む　す　び…… 10

挿　図　目　次

第１図　宮後遺跡の位置及び周辺遺跡…… 5
第２図　宮後遺跡周辺の地形図……
第２図　宮後遺跡周辺の地形図…… 6

第３図　宮後遺跡グリッド及びトレンチ配置図…… 7

第４図　宮後遺跡第Ⅰ地点及び第Ⅱ地点土層断面図…… 9

第５図　宮後遺跡石跡石器実測図……10

図　版　目　次

図版１　宮後遺跡遠景
　　硬玉製丸玉

Ⅰ．調査に至るまでの経過

九州縦貫自動車道は，昭和43年３月６日第18回国土開発幹線自動車道建設審議会において，九州関係各路線とともに鹿児島県内では，九州縦貫自動車道加治木ー鹿児島間の整備計画が決定された。ついで昭和43年４月１日建設大臣から九州縦貫自動車道鹿児島線加治木ー鹿児島間23kmについて，日本道路公団に対して，工事施行命令が出された。

日本道路公団は「日本道路公団の建設事業等，工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に基づき，埋蔵文化財の取り扱いについての協議を求めた。これに対し鹿児島県教育委員会では，昭和43年12月17日～昭和44年１月20日の間，県内の考古学研究者を調査員に依頼して埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し，26個所の周知の遺跡の範囲確認を行った。

九州縦貫自動車道鹿児島線の路線は，この報告をもとに決定されたが，路線内の未調査の遺跡について，昭和46年１月，分布調査を実施し，その結果，建馬場（加治木町），松木田（姶良町），小瀬戸（姶良町），小山（吉田町），谷ノ口（吉田町），上城城址（吉田町），宮後（吉田町）の埋蔵文化財包蔵地６個所と中世の城跡１個所の遺跡が確認された。

県教育委員会は，この調査結果をもとに日本道路公団とその取り扱いを協議する一方発掘調査の実施について，鹿児島県考古学会（会長河口貞徳氏），鹿児島県史跡調査会（河口貞徳氏）等に協力を依頼した。

こうして一応の発掘調査体制が整ったため，昭和46年８月10日，日本道路公団と鹿児島県教育委員会は，委託契約を締結し，昭和46年８月20日から発掘調査する運びとなった。

本遺跡の発掘調査は，吉田町小山遺跡の調査班を二分して班編成を行い，昭和46年11月10日～11月18日で調査した。

Ⅱ．発掘調査の組織及び調査の経過

調査の組織

調　査　主　体	鹿児島県教育委員会	
調　査　責任者	社会教育課長	寺師　次夫
調査担当兼総務	社会教育課文化係長	盛園　尚孝
調　査　担　当		立神　次郎

調査の経過

分布調査の結果，宮後遺跡は，精木川の侵食により形成された河岸段丘上に位置し，県道鹿児島一蒲生線がとおる吉田町農協宮ノ浦支所前の小台地上に八幡神社があり，この神社の東側斜面にある段違いの三筆の畑地である。遺跡の東側は，畑地より急傾斜をなし，宮ノ浦の水田地帯が精木川の両河岸段丘上に所在している。現在は，九州縦貫自動車道吉田インターチェンジとなっている。

発掘調査は，遺跡が3筆の段違いの畑地のためグリッド及びトレンチは，地形に応じて任意に設定し，昭和46年11月10日より第Ⅲ地点より開始した。その結果，第Ⅰ地点から第Ⅲ地点まで表層から約40～50cmぐらいまでが旧田んぼの基盤層が確認され，遺物は皆無であった。さらに各地点を下層まで掘り下げた結果，赤褐色粘土層と田んぼ跡の層との混入が認められ，鉄分を含んだ固いブロック状の固まりや大小の礫，現代陶器，縄文式土器などの微片数点が混在して認められた。しかし，Ⅱ地点a～8，a～9の一部については，層位の乱れは見られず縄文時代晩期相当の微片とともに，硬玉製の丸玉が出土した。以下は，黄褐色パミス層を地山と判断し，確認調査をもって調査は終了した。

その間の調査経過については下記のとおりである。

調査日誌抄

発掘期間　昭和46年11月10日～11月18日

11月10日　発掘調査開始。作業員に発掘調査の説明と調査上の注意を行い作業に入る。草木下払い作業。トレンチ設定作業。第Ⅲ地点掘り下げ作業。

11月11日　第Ⅲ地点掘り下げ作業継続。旧田んぼ跡確認。部分的に削平されたり覆土されている。撹乱部分より現代陶器，縄文式土器の破片3点が散見される。

11月12日　第Ⅲ地点掘り下げ作業継続。第Ⅰ地点掘り下げ作業。

11月13日　第Ⅲ地点掘り下げ作業継続。遺跡地平板実測作業。第Ⅰ地点掘り下げ作業継続。

11月15日　第Ⅰ地点掘り下げ作業継続。第Ⅲ地点土層実測作業。

11月16日　第Ⅱ地点掘り下げ作業。第Ⅰ地点土層実測作業。

11月17日　第Ⅱ地点掘り下げ作業継続。

11月18日　第Ⅱ地点掘り下げ作業継続。第Ⅱ地点土層実測作業。

Ⅲ．遺跡の位置及び環境

宮後遺跡は，鹿児島県鹿児島郡吉田町宮之浦宮後に位置している。遺跡の位置する吉田町は鹿児島県のほぼ中央部，すなわち薩摩半島の基部に位置し，鹿児島郡に属しており，北部は姶良郡蒲生町，東部は姶良郡姶良町，西部は日置郡郡山町，南部は鹿児島市とに隣接し，鹿児島県の県庁所在地の鹿児島市の元標より北方へ約16．1kmの地点に所在している。

吉田町の地形は，略長方形を呈した地形となり，東部は赤崩を中心とする赤崩火山峰が連なり，西部は花尾岳及び雄岳を中心とした諸連峰がそびえており，山間部及び傾斜地の示める割り合いが大きく，土質は平地で第四紀層（沖積平源）で，山岳地帯は第三紀層（水成岩）で火山灰シラス土壌である。このような地形で構成される吉田町は，思川・本名川・稲荷川などの河川が高峰を源として，山間を浸流が縫って鹿児島湾へ流入し，北部地区は水田地帯となり，南部地区は畑地帯となっている。また河川流域の低地では河岸段丘の発達により沿岸は水田地。帯となっている。

本遺跡の周辺は，南部地区に位置し，飯山，大原，石下谷からのびるシラス台地縁辺部（舌状台地）の切れる先端部付近で，精木川により形成された河川段丘上の畑地に所在している。遺跡の西部は，八幡神社の敷地と相接し，台地縁辺部を県道鹿児島一蒲生線がとおり，吉田農協宮之浦支所がある。北部及び東部は，精木川や牟礼谷川によって形成された河岸段丘上は水田地帯となり，さらに東部には馬場園の集落地帯となっている。南部は，町道牟礼谷一宮之浦線がとおり，精木川によって形成された河岸段丘上は水田地帯となり，精木川が鹿児島市との行政区画区域となっている。

宮後遺跡の周辺及び吉田町の遺跡についてみれば，吉田町は地形の制約を受けている関係から非常に少ないが，室町から江戸時代にかけての五輪塔や田の神，その他多くの石造物は多く見られる。(注①)

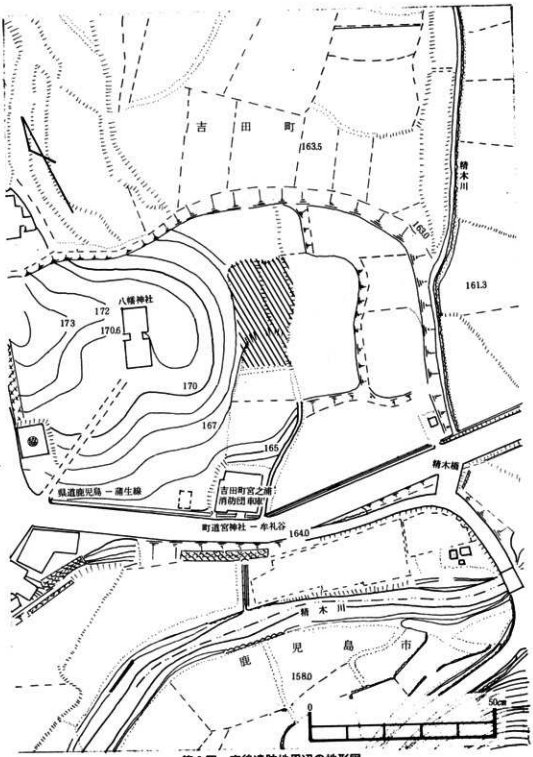
周辺遺跡には，牧古墓（平安）や鹿児島市の木ノ迫・加治屋園・加栗山の各遺跡が周知され，木ノ迫，加治屋園・加栗山遺跡などは，本遺跡と同様に九州縦貫自動車道建設に伴う事前調査により記録保存のなされた遺跡である。(注②)

吉田町には吉田式土器の標式となった上原遺跡が知られている。大原遺跡は，同町本名の吉田南中の校庭に所在し，昭和27・28年に河口貞徳氏により発掘がなされている。遺跡はⅡ層赤褐色土層，第Ⅲ層黒褐色土層に遺物が包含され，主に円筒形平底で横位の貝殻腹縁による押引き文が施文された土器が出土し，吉田式土器と命名されている。第Ⅲ層よりは，主に石坂式土器が出土し，吉田式土器は石坂式土器に後継する土器形式であることが判明されている。(注③)

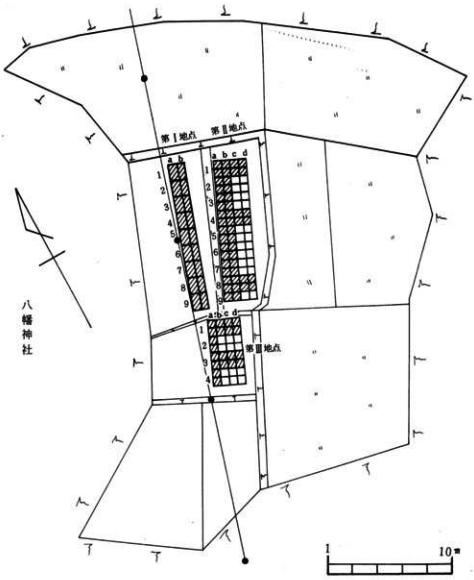
注① 鹿児島県教育委員会「鹿児島県市町村別遺跡地名表」 1977・3
注② 鹿児島県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ・Ⅵ」 1981・3
注③ 河口貞徳先生古稀記念著作刊行会「河口貞徳先生古稀記念著作集」上巻 1981・10

第１図　宮後遺跡の位置及び周辺遺跡

①宮後遺跡　②牧古墓（平安）　③木ノ迫遺跡　④加治屋園遺跡（鹿児島市）
⑤加栗山遺跡（鹿児島市）



第2図　宮後遺跡地周辺の地形図



第3図　宮後遺跡グリッド及びトレンチ配置図

Ⅳ　調査の概要

本遺跡は，精木川によって形成された河岸段丘上に位置し，八幡神社敷地の東側に隣接した段違いの三筆の畑地である。

発掘調査は，遺跡地が段違いになっているためグリッド及びトレンチは，地形に応じて任意に設定した。第Ⅰ地点は，４ｍ×17ｍの範囲に２ｍ×２ｍのグリッド掘りができるようにし，さらに１ｍ四方の区割りを行い，北を基準にして，ａ－１，ｂ－１，Ｃ－１，ｄ－１……のように区割りをした。第Ⅱ地点は遺跡地の西側に位置する畑地で，第Ⅰ地点とは約70ｍほどの比高がある。九州縦貫自動車道建設用幅杭と平行して，２ｍ×９ｍのトレンチを設定し，１ｍ×２ｍの小区割りをして，グリッド掘りができるように，北を基準にして，ａ－１，ａ－２，ｂ－１，ｂ－２……とした。第Ⅲ地点は遺跡地の南側に位置し，いちばん標高の低い畑地で，北を基準にして，ａ－１，ａ－２，ｂ－１，ｂ－２……として掘り下げ作業を実施した。

調査は，まず第Ⅲ地点より掘り下げ作業に取りかかり，ａ－１区，ｂ－１区，ｃ－１区，ｄ－１区，ａ－３区，ｂ－３区，ｃ－３区，ｄ－３区にかけて，表土層から掘り下げ，地表面から40～50cmぐらいで，田んぼの基盤層となる。この田んぼの基盤層は硬い粘土質で鉄分を含み軽石，小礫が混入している。さらに，下層下を確認するため掘り下げた結果，赤褐色粘土層が黄褐色パミス層と撹乱され，鉄分を含んだ固い部分や大小礫の混入が認められ，現代陶器，縄文式土器の微片（３片）などが散見されたのみであった。

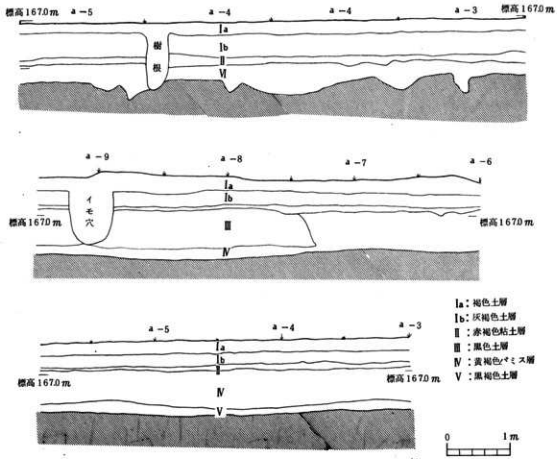
ひきつづき第Ⅲ地点に撹乱層が認められたため，第Ⅰ地点に移り，第Ⅲ地点との関連をみるため，ａ－１区，ｂ－１区，ｃ－１区，ｄ－１区，ａ，ｂ－２区，ａ－ｂ－３区，ａ－ｂ－４区，ａ－ｂ－５区，ａ－ｂ－６区，ａ，ｂ－７区，ａ－ｂ－８区，ａ，ｂ－９区について掘り下げ作業を実施した。遺物，遺構ともに検出されなかったため，さらにｃ，ｄ－４区，ｃ，ｄ－８区において掘り下げを行なったが第Ⅲ地点と同様の結果となった。

ひきつづき，第Ⅰ地点が遺物，遺構とも検出されなかったため，第Ⅱ地点ね移り，第Ⅰ地点との関連を見るために，ｂ－１区からｂ－９区までを掘り下げた結果，ｂ－９区において層位がしっかりしており縄文式土器破片数点と縄文時代晩期と思われる硬玉製の丸玉が出土した。その為に，ａ－１区からｂ－９区について掘り下げ作業を実施した。その結果，ａ－９区のイモ穴と思われる撹乱層中より土師器，縄文式土器の破片，現代陶器，黒曜石剝片が混在していた。遺物の出土したⅤ層はａ－７区からｂ－８区にかけて残存し，他区についてはⅤ層の層ではみられなかった。さらに下層については黄褐色パミス層となり，当時は地山と判断し，掘り下げ作業は終了した。またａ－９区，ｂ－８区の周辺の拡張は，九州縦貫自動車道建設幅杭のため断念せざるを得なかった。

①　土　層

本遺跡は，精木川などの河川により出来た河岸段丘上の畑地に位置している。遺跡地の周辺

地域は棚上になっており，後世の開墾のためか削平がみられる部分が多い。層位は不規則となり，耕作土層はａ，ｂに分けられ，ａは褐色土層で，ｂは灰褐色土層である。ａは現耕作面と考えられ，ｂは開墾前のものと思われる。Ⅱ層は赤褐色粘土層（酸化鉄を含む）で，田んぼの基盤層と思われ，畑地の前は水田として使用されたと考えられる。Ⅲ層は黒色土層で，第Ⅲ地点の一部だけに認められる。Ⅳ層は黄褐色パミス層となり，第Ⅲ地点では赤褐色粘土層と黄褐色パミス層との撹乱が認められる。Ⅴ層は黒褐色土層となり，各地点とも黄褐色パミス層を地山と判断し，掘り下げ作業を行っていない。しかし，Ⅰトレンチのｂ－３～ｂ－５区において一部掘り下げた結果，確認がなされた。



第４図　宮後遺跡第Ⅰ地点及び第Ⅱ地点土層断面図

② 遺 跡

本遺跡は，第Ⅲ地点の撹乱層より現代陶器，縄文式土器（晩期相当）の３点と第Ⅱ地点のｂ－９区より縄文式土器と硬玉製の丸玉が出土し，さらにｂ－９区イモ穴の撹乱部分より土師器・縄文式土器（晩期）・黒曜石剥片・現代陶器が混在して認められた。縄文式土器は黒色研摩で晩期に属すると思われ，土師器は皿と甕の二種類が出土した。甕は糸切底で平安以降のものと思われる。出土した遺物は小破片のため図化は行わなかった。

石 器

石器は，黒曜石剥片と硬玉製の丸玉が出土した。硬玉製の丸玉は，第Ⅲ地点のｂ－９区・Ⅲ層よりの出土である。長さ0.9cm，径は1.1cmで，青緑色を呈し，穿孔部は，一方からのみ孔をあけてあり，大きい方が，約5.5mm，小さい方は4.5mmである。

第５図 宮後遺跡石器実測図

Ⅴ．む す び

宮後遺跡は，黄褐色パミス層を地山と判断したため，下層の調査は行われなかった。第Ⅰ地点では遺物・遺構とも確認されず，第Ⅱ地点においては，一部黒色土層が認められ，硬玉製丸玉の出土したことは，大分県の大石遺跡，出水市の岩戸遺跡，加世田市の上加世田遺跡などにみられる硬玉製の石器などと同様に，素材の伝播経路を知り得るための好資料といえよう。ａｂ８・９区周辺の拡張は，九州縦貫自動車道建設幅杭のため断念したが，西側八幡神社敷地への広がりが考えられる。第Ⅲ地点も同様，黄褐色パミス層と赤褐色粘土層との撹乱が認められたため，下層の確認作業は実施しないまま調査は終了した。

図　　版

図版1

宮後遺跡遠景

硬玉製丸玉

上城城址

上　城　城　址

刀剣博物館
田野辺　道　宏

上城（うえんじょう）は，鹿児島郡吉田村大字本城，村役場より南へ約 0.5kmの地点にある小城郭である。この城の沿革については定かでなく，僅かに「三国名勝図会」に「上城，地頭館より未方一里一町余りの本城村に在り，吉田美作守清存居城といへり，今は開墾して畑地となる。」という記述を見るのみであるが，鹿児島大学教授五味克夫氏は「大隅国正八幡宮領吉田院小考」の中本城を吉田氏の一族中納氏と結びつけられた。また「三国名勝図会」に「地蔵蔵堂，佐多之浦村，峰高に在り，相伝えて云，往古は本城村上城に在り，吉田岩狭守清正，今の地に移り，……」とあって，これに拠れば吉田清正の代に地蔵堂を本城から佐多浦に移したということであるが，五味氏はその移転は単に地蔵堂だけでなく吉田院の政治上，軍事上の中心地の移転をも意味しているとし，それを室町初期，応永末年頃と推定された。このことは上城が小規模で平面構成上は然程に見るべきものがなく，総体に築城下技術の未発達の感があり，限が戦国期には入らないと思われるのに対して，佐多浦の松尾城は大規模の連郭型式城郭で典型的な戦国期の縄張様式を遺存していることからも肯けよう。なお吉田清存については系図にも見当らず不明であるが，図会の説をとれば兄弟不和のため兄に謀殺されようとし，南北朝の文和元年三月に自殺したとある。城址遺構は南より北方へ突き出した起高約40mの半島状台地に占地している。現在の景観からはそれほど険要性は窺えないが，台地方を除いた三面は湿田に囲まれていることから往時は接近困難な地域であったことは想像される。台地基部の狭くなった部分にはビワンコ１瀬戸と呼称される深さ約12m，底中約 5.5mの瀬戸道が横切っており，城外台地を遮断している。現在は堀底道であるが昔時は空堀りであったことはまず疑いない。地形的に見て，元来この部分は凹地であったと思われ，それを利用して簡単な堀割を設けていたものであろう。それを後世になって通路に利用するようになり，さらに自然の侵食作用もあって今日みる様な深いものになったとみられる。断面図（ａ－ｂ）（実測図参照）で分るように城外台地側が緩斜面であるのに比して，城の側の崖面は急峻に加工されているのが興味深い。半島状台地占地城郭の場合は隣接台地よりの敵の功撃に最大の防禦策を施すのが通例で，城外台地に接する部分には空堀りと同時に土塁構策がなされるのが常であるが，この城にはそれを暗示するような帯状の隆起は確認出来ない。城内は 1.5m ～６ mの落差でもって段階状に幾多の削平地が見出せるが，殆んどの部分に開墾がゆき渡っているためかなりの破壊が行なわれたもののようである。城内の分郭は明らかにできず，小規模の単郭式山城とみてよい。南部の部落墓地の附近が最も高く北進するに従い高さを減じている。乗の地点からは青磁・白磁などの施釉陶器片や素焼の粗製土器（いわゆるカワラケ）の破片がかなり多く出土している。吉田村在住の平原政治氏が表面採集されたものを，文化庁記念物課の安藤文部技官ならびに根津美術館の奥田美術部長に鑑定を依頼した処，青磁は南宋末（鎌倉時代）の竜泉窯と越州窯で，白磁は支那南半部で焼かれた明時代のもの，その他カワラケ類は大方宗町期の国産品で，桃山以降

のものは皆無であった。これらは茶碗・皿・壺・擂・鉢その他雑器類である。

勿論これによって直ちに城の存立期を越州窯・竜泉窯の時代に平行させるわけにはいかない。古いものが伝世されて後の時代に使用する場合もありうることであり，近隣のもっと沿革のはっきりした城郭よりの出土品とも比較対照しながら結論を出すのが望ましかろう。また，この附近には礎石とおぼしきかなり大きな石が畠の仕切りに利用されて一列に並べられているが，地主の城脇森吉氏の話では，これらは地表に露出していたものを集めたものだそうで，これより一段下った畠の中にはまだ三尺四方に石が敷きつめてあるとのことである。寺院などと違って中世城郭の建造物は堀立柱にするのが多く，礎石を使用するようになるのは上限が早くて室町も後期と云われている。前述の出土品とも併して考えれば，これは普通の中世山城に見られる臨時的な屋舎ではなく中納氏の居館ではないか。縄張的にも当城には命を守るという懸命な普請はみられず，きた地相的にもきして要害性に富んでいるというわけでもないことからして戦闘目的よりも政治的，日常生活的な色彩の強い館城の感がする。しかしこれも表面的な観察だけではまことに不充分である。幸いにしてこの礎石群の埋没した個所は九州高速道路より外れると聞いている。後日是非とも考古学的な発掘調査がなされることを切望する。当城で最も明確に築城遺構を存しているものと云えばⒶ～Ⓕの地元の人が馬乗り馬場と呼称している腰腰曲輪であろう。これらは急傾斜の側面に上面より一段低く６～８ｍ落差でもって帯状に設けられており，その幅は概ね一定していて約７～８ｍ幅を保っているⒶⒷ両腰曲輪は現状では分分離しているが，かっては一直線状につながっていたのが崖崩れのためこの様に中断されたものという。（榎木園親氏談）

現状ではⒶなる腰曲輪が最もよく旧態を維持しており，長さは実に 122m近くに及んでいる。この地点より上段を見上げると崖腹は殆んど直立状をなしており，人工的に削崖した様子が明確に看取される。県内の山城では当城の他にも，給黎城（喜入）・川口城（谷山）・長尾上（敷根）・廻城（福山）など典型的な腰曲輪の部分を馬乗り馬場と呼称している例があり，注目される。腰曲輪は有事に際しては横矢を有効にする働きがあり，崖をよじ登って来る敵兵には最も脅威となるもので，緊急の連絡通路の役目もあわせもっている。この城の入口はⒻ腰曲輪を通じて登るもの，Ⓒ腰曲輪をその方向に直交する形で横断するものなどがあるが，これらはすべて一直線状をなしており，後世に農道としてつられたものである。旧のままの虎口というものは敵兵の侵入を阻害すべく必ず複雑な屈曲がつけられているもので，後世農道に使用するには不便が生じたためか，今日では使われず登降不可能となっている場合が多い。この城の虎口はⒸ腰曲輪より北へ廷びた幅約６ｍの細長い尾根と城の北部の突出部にはさまれた狭い谷底道がそれと認められ，入口附近はタイノ口と呼ばれている。はたして如何なる字をあてるのか不明であるが，喜入の間城に垂の口と称する入口があり，あるいはこれが訛ったものかとも思われる。馬の背のような尾根の突鼻と腰曲輪Ⓓは外敵に対して防禦線を形成していたことであろう。また，東南方にも谷頭より腰曲輪Ⓔに向うジグザグ状の登道があり，これも往時のものかと思われる。

以上概観してこの城は南北朝期城郭（その後再使用されていないもの）に相通ずる面が多々あるが，腰曲輪が発達していることと出土品により室町時代には入るものとみなければなるまい。しかし野首附近の台地方に対する防禦性が貧弱であること，城内の分郭が全く見られないこと，土塁の施設が皆無であることなどの諸点を考慮すれば戦国期まで下げることはむずかしかろう。戦国城郭の一歩手前の段階にある姿と捉えてよいのではなかろうか。平面踏査を終えて痛感されることは立体的に堀り下げた考古学的方法の必要性である。土塁・空堀等の痕跡が歴然とした戦闘的戦国城郭の場合はある程度表面観察で事足りるが，この城のような日常生活と結びついた城館の場合には発掘調査なしでは不充分の感がある。発堀によってこそ当城の全貌は明らかになるに違いない。尚今回の調査にあたっては吉田村郷土史家平原政治氏および吉田村教育委員会の援助協力があったことを附記する。

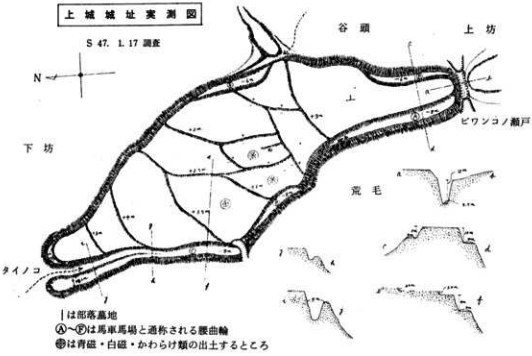
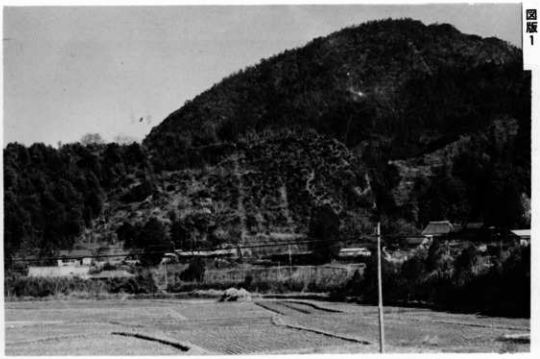


図　　版

図版1



西方より上城を望む

西南方水田より望む

図版2

城外台地より空堀を通して上城南端を見る

東南方谷頭附近より見たもの切り通しを境いに
左が城人、右が上城南端部である

腰曲輪Aの直下より見上げる。右の窪地が昔時の
空堀の址線と見られる。

腰曲輪Bを上面より見おろす

図版4

腰曲輪Ⓒより延びた突鼻より虎口をへだてて
腰曲輪Ⓓ（電柱の立っている部分）見る。

タイノ口附近より虎口を見る。

陶器、土器片の出土する地点

陶器、土器片の出土する地点